

那覇市文化財調査報告書第69集

神 応 寺 跡

— 繁多川公民館・図書館建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 —

2006年2月

那覇市教育委員会

じん おう じ あと
神 応 寺 跡

— 繁多川公民館・図書館建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 —



巻首図版 1 上：正門と調査区
下：正門石垣と層序



卷首図版2 上：歡喜天
下：青銅製品

序

この報告書は、「那覇市立繁多川公民館・図書館建設事業」に伴って実施された、神応寺跡の緊急発掘調査の成果を取録したものであります。

本遺跡の発掘調査は2000年1月に開始して同年8月に終了しました。遺跡は先の大戦の戦災や戦後の造成等でかなり破壊されていましたが、調査の結果、神応寺の本堂跡・石組みの階段・石組遺構・土壇など重要な遺構・遺物が検出されました。

その中でも、注目される成果としては、基盤の琉球石灰岩を削り本堂を構築する工法が明らかになったこと、また、境内での祭祀に用いられた仏具などの出土があったことが挙げられます。

その他にも、中国産・本土産・沖縄産等の陶磁器が多種多様に出土しました。これらの調査内容は、往時の神応寺を彷彿とさせるもので、沖縄の仏教史を考える上で貴重な資料を提供したと思います。

また、関係者のご協力のもと、神応寺の正面石垣及び正門の現地保存が決定したことは大変喜ばしいことです。今後は文化財指定を行い市民への公開・活用を図っていきたいと考えます。

この報告書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、さらには諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待するものであります。

末尾になりましたが、8ヶ月にわたる長期間、発掘調査作業に従事していただいた皆さん、その他多くの関係者の方々の多大なご協力に対して深く感謝いたします。

2006年2月

那覇市教育委員会

教育長 仲田 美加子

例 言

1. 本書は、那覇市教育委員会が平成12・13年度に実施した繁多川公民館・図書館建設工事に伴う「神応寺跡の緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 本土産陶磁器については、堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）・渡辺芳朗（鹿児島大学）の両氏にご教示を頂いた。記して感謝する。
3. 第2図は国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。
4. 第3図は、『那覇市現況・地籍併合図』を複製した。
5. 本書の編集は慶田の協力を得て、島・山里が行った。
執筆は第V章13を山里、その他全て島が行った。
6. 紙数の都合上、主な出土遺物を報告した。緑釉陶器・沖縄産陶器・自然遺物等については、別の機会でご改めて報告する。
7. 遺物実測図の番号と写真の番号は一致するように配置してある。
8. 出土した資料については、すべて那覇市教育委員会文化財課で保管している。

報告書抄録

ふりがな	じんおうじあと							
書名	神応寺跡							
副書名	繁多川公民館・図書館建設事業に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第69号							
編著者名	島 弘・山里千春							
編集機関	那覇市教育委員会文化財課							
所在地	〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8 TEL098-853-5776							
発行年月日	西暦2006年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°	m ²	m	
じんおうじあと 神 応 寺 跡	沖縄県 那覇市 字繁多川	47201		26度 13分 22秒	127度 42分 56秒	20021209 ~ 20030328	528	繁多川公民館・図書館建設事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
神応寺跡	寺院跡	中世・近世	本堂跡 石組遺構 埋裏 土壇 溝 等	青銅製品 瓦類 沖縄産陶器 本土産磁陶器 中国産磁陶器 等		基盤の琉球石灰岩を 削平、平場造成の工法 を確認。		

目 次

序	
例 言	
報告書抄録	
第 I 章 調査に至る経緯	2
第 II 章 調査経過と調査組織	2
第 1 節 調査経過	2
第 2 節 調査組織	2
第 III 章 遺跡の位置と環境	6
第 IV 章 層序と遺構	6
第 1 節 層序	6
第 2 節 遺構	7
第 V 章 出土遺物	18
1. 中国陶磁器	18
2. 色絵	41
3. 瑠璃釉	41
4. 翡翠釉	41
5. タイ産陶器	41
6. 褐釉陶器	41
7. 無釉陶器	41
8. 本土産陶磁器	48
9. 産地不明陶器	48
10. 蓮華	48
11. 人形	48
12. 青銅製品	58
13. 銭貨	66
14. 瓦	74
第 VI 章 まとめ	81

挿図目次

第1図	那覇市の位置	1
第2図	寺院の位置図	4
第3図	グリット設定図	5
第4図	層序	9
第5図	遺構配置図	10
第6図	正門、本堂跡 平面図・断面図	11
第7図	田辺泰氏による平面図との合成図	12
第8図	階段 平面図・断面図	13
第9図	建物跡 平面図・断面図	14
第10図	溜井、埋甕、土塙 平面図・断面図	15
第11図	石組遺構 平面図・断面図	16
第12図	白磁：碗、皿	27
第13図	白磁：皿	28
第14図	白磁：杯、碗	29
第15図	白磁：香炉	30
第16図	青磁：碗	31
第17図	青磁：皿、盤、瓶、鉢	32
第18図	青磁：香炉	33
第19図	青磁：香炉	34
第20図	青花：碗	35
第21図	青花：碗	36
第22図	青花：皿	37
第23図	青花：鉢	38
第24図	青花：鉢	39
第25図	青花：瓶、杯	40
第26図	色絵：皿、花生、碗、香炉 瑠璃釉：蓋、碗 翡翠釉：皿 タイ産陶器：蓋、合子	45
第27図	褐釉陶器：壺、水注	46
第28図	褐釉陶器：水注 無釉陶器：鉢、摺鉢	47
第29図	本土産陶磁器（肥前系）：碗、皿	52
第30図	本土産陶磁器（肥前系）：皿 （薩摩系）：蓋、水注	53
第31図	本土産陶磁器（薩摩系）：壺、鍋、鉢	54
第32図	本土産陶磁器（薩摩系）：花鉢、鉢	55
第33図	産地不明陶器：不明、蓋、鉢	56
第34図	蓮華、人形	57

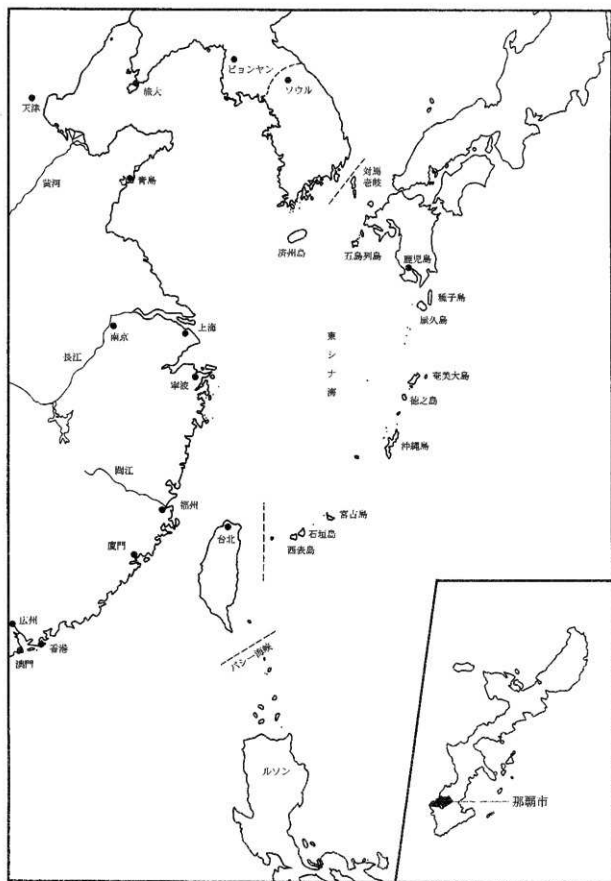
第35図	歡喜天	62
第36図	青銅製品：独結杵、碗、釜の芯、把手、 燭台、花瓶、脚、環塔？	63
第37図	青銅製品：飾り金具、把手、燻香、匙	64
第38図	青銅製品：留め具、カンザシ、キセル、 刀子、銅鏡、不明品	65
第39図	銭貨	72
第40図	銭貨：無文銭	73
第41図	軒丸瓦	79
第42図	軒平瓦	80

挿表目次

第1表	出土遺物一覧	17
第2表	白磁出土一覧	19
第3表	青磁出土一覧	20
第4表	青花出土一覧	20
第5表	白磁観察一覧	21
第6表	青磁観察一覧	22
第7表	青花観察一覧	24
第8表	色絵出土一覧	42
第9表	瑠璃釉出土一覧	42
第10表	褐釉陶器出土一覧	42
第11表	色絵・瑠璃釉・翡翠釉・ タイ産陶器観察一覧	43
第12表	褐釉・無釉陶器観察一覧	44
第13表	本土産陶磁器出土一覧	49
第14表	本土産陶磁器観察一覧	50
第15表	青銅製品観察一覧	60
第16表	銭貨出土一覧	67
第17表	銭貨観察一覧(1)	67
第18表	銭貨観察一覧(2)	70
第19表	軒丸瓦出土一覧	75
第20表	軒平瓦出土一覧	76
第21表	軒丸瓦観察一覧	77
第22表	軒平瓦観察一覧	78

図版目次

- 図版 1 1 段目 左：調査地区全景
右：南西側より
- 2 段目 左：正門
右：調査区より見た正門
- 3 段目 左：正門と調査区
右：石垣 南西側より
- 4 段目 左：石垣 南東側より
右：12ライン全景
- 図版 2 1 段目 左：12ライン近景
右：「さー12」Ⅲ層の小規模出土状況
- 2 段目 左：基壇跡
右：基壇跡の石列
- 3 段目 左：埋費No.2 出土状況
右：埋費No.2 近景
- 4 段目 左：建物跡全景
右：建物跡の石敷
- 図版 3 1 段目 左：溜井の半裁状況
右：溜井の完掘状況
- 2 段目 左：埋費No.1 半裁状況
右：埋費No.1 遠景
- 3 段目 左：1号石組遺構半裁状況
右：1号石組遺構完掘状況
- 4 段目 左：1号石組遺構遠景
右：3号石組遺構近景
- 図版 4 1 段目 左：3号石組遺構半裁状況
右：3号石組遺構完掘状況
- 2 段目 左：2号石組遺構半裁状況
右：2号石組遺構完掘状況
- 3 段目 左：土壌の近景
右：7ライン北壁と土壌完掘状況
- 4 段目 左：青銅製碗 出土状況
右：青銅製燗台 出土状況
- 図版 5 白磁：碗、皿
- 図版 6 白磁：皿
- 図版 7 白磁：杯、碗
- 図版 8 白磁：香炉
- 図版 9 青磁：碗、皿、盤
- 図版10 青磁：瓶、鉢、香が
- 図版11 青磁：香炉
- 図版12 青磁：香炉 青花：鉢
- 図版13 青花：碗
- 図版14 青花：碗
- 図版15 青花：皿
- 図版16 青花：鉢
- 図版17 青花：瓶、杯
- 図版18 色絵：皿、花生、碗、香炉
瑠璃釉：蓋、碗
翡翠釉：皿
タイ産陶器：蓋、合子
- 図版19 褐釉陶器：壺、水注
- 図版20 褐釉陶器：水注
- 無釉陶器：鉢、摺鉢
- 図版21 本土産陶磁器（肥前系）：碗、皿
- 図版22 本土産陶磁器（肥前系）：皿
（薩摩系）：蓋、水注
- 図版23 本土産陶磁器（薩摩系）：蓋、鍋、鉢
- 図版24 本土産陶磁器（薩摩系）：花鉢、鉢
- 図版25 産地不明陶器：不明、蓋、鉢
- 図版26 蓮華、人形
- 図版27 歌喜天
- 図版28 青銅製品：独鈷杆、碗、鉢の芯、把手、
燗台、花瓶、脚、環塔？
- 図版29 青銅製品：飾り金具、把手、蜂番、鍵
- 図版30 青銅製品：留め具、カンザシ、キセル、
刀子、銅鏡、不明品
- 図版31 銭貨
- 図版32 銭貨：無文銭
- 図版33 軒丸瓦
- 図版34 軒平瓦



第1図 那覇市の位置

第Ⅰ章 調査に至る経緯

那覇市教育委員会社会教育課では、繁多川・真地・識名地区をカバーする公民館・図書館を建設工事を当該地で進めていた。その予定地について、社会教育課から文化財課へ埋蔵文化財の有無の照会が成された。

当文化財課では当該地には、琉球八社の一つ識名宮を庇護する「神応寺跡」が所在しており、沖縄の仏教史を知る上で大変重要な遺跡があるとの回答をした。当文化財課は、その歴史的背景等を踏まえ、社会教育課と埋蔵文化財「神応寺跡」との取り扱いについて協議が行われた。その協議において、工事計画の変更は極めて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなった。

協議の結果を踏まえて、文化財課は社会教育課からの依頼を受け、平成12年・平成13年度の2ヶ年に亘って調査を行った。

第Ⅱ章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

調査は平成12年1月14日～8月31日にわたって実施した。

グリットはほぼ磁北に沿って4m×4mを1グリットとして調査区に方眼を組んだ。グリット番号は南北に50音、東西に算用数字を付し交差する南西の杭を「しー11グリット」等と呼称した(第3図)。

調査は表面攪乱土の除去後「さー11・13」グリットより開始した。約10cmほど落とすと、灰色・赤色瓦等が出土し始めた。その後、遺跡の状況を知るために暫時グリットを広げていったが、基本的表土下は戦災と戦後造成によって攪乱が著しいことが確認された。それでも、神応寺の正面階段部や建物跡・石組遺構等の遺構が続々と確認され始めた。

その後、遺構の写真・図面等を繰り返し、8月31日に終了した。資料整理は、平成14年6月より開始した。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査責任者	那覇市教育委員会		教育長	仲田美加子
調査総括	〃	文化財課	課長	金武正紀
〃	〃	〃	〃	古塚達朗
調査事務	〃	〃	主幹	喜納曙
〃	〃	〃	〃	大城伸雄

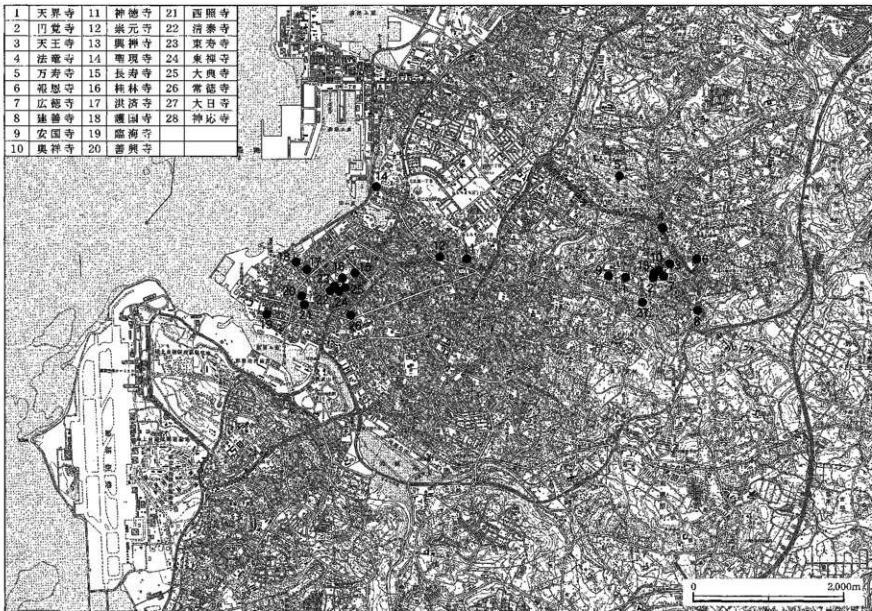
調査事務	那覇市教育委員会	文化財課	主任主事	上原善英
"	"	"	"	池間孝子
調査員	那覇市教育委員会	文化財課	主任専門員	島弘
"	"	"	専門員	玉城安明
"	"	"	"	仲宗根啓
"	"	"	"	樋口麻子
"	"	"	"	當銘由嗣
調査員	那覇市教育委員会	文化財課	発掘補助員	富山維佐子
"	"	"	"	国吉真由美

発掘作業員

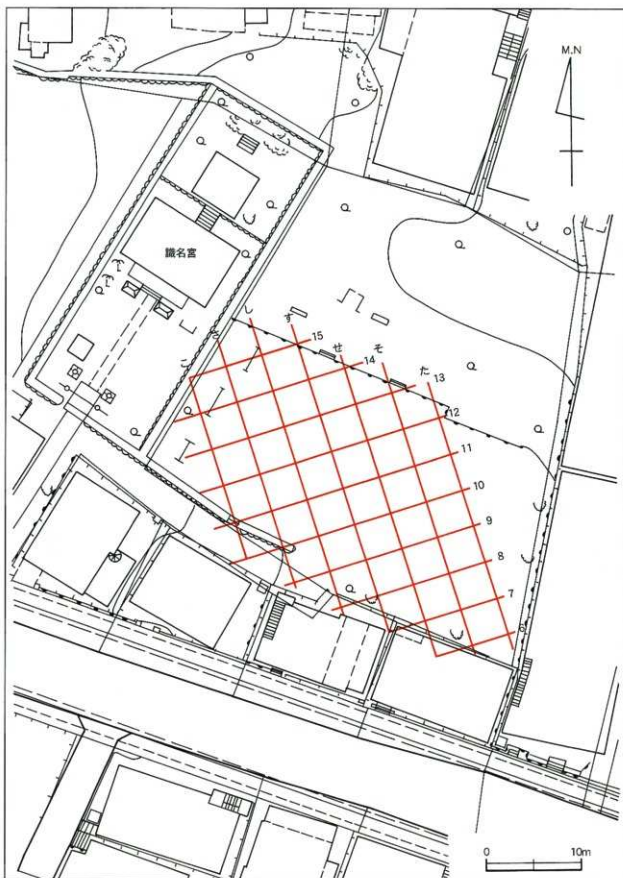
秋本真孝・伊礼ヒロ子・上地末子・奥浜悦子・嘉味田千枝子
 金城順子・久田恵美子・具志尚樹・佐渡山正子・瑞慶覧繁美
 津波古利恵子・照喜名武子・照屋栄子・當真美美子・當真哲
 比嘉史子・比嘉洋子・宮城新一・宮城奈緒・柚木崎末了
 与座洋子・与那城好子

成果の記録（資料整理及び協力者）

洗浄・注記・接合：伊波小百合・仲地和美・古波幸代・長井悦子・東江なおみ
 集計：宮良文子・慶田秀美・古波幸代・長井悦子・東江なおみ・金城愛子
 実測：宮良文子・慶田秀美・伊波小百合・山里千春・仲地和美・古波幸代
 長井悦子・東江なおみ・金城愛子
 トレース：慶田秀美・伊波小百合・宮城かの子・金城愛子
 撮影・現像・焼付：慶田秀美・運天綾・島袋明子



第2図 18世紀代までに建立された寺院の位置図



第3図 グリット設定図

第三章 遺跡の位置と環境

神応寺跡は那覇市字繁多川に所在する。那覇市は東中国海に面した沖縄本島南西部にあり、北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城市と隣接する県内人口の約1/4 (313,090人)を擁する沖縄の政治・経済の中心都市である(第1図)。

本市は、ほぼ略三角形を呈し東西に約11km、南北に約8kmを測り、総面積37.81kmを占める。地形的には、標高2~10mの那覇港側の沖積地を琉球石灰岩の台地が取りまく。台地は北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地・小祿台地が見られ大きく低地と石灰岩台地の2つに分けられる。また、市内には安瀬川・安里川・国場川等が台地を分けるかたちで那覇港に流れ込む。行政的には首里地区・那覇地区・真和志地区・小祿地区の4地区に大きく分けられる。

遺跡の所在する字繁多川は真和志地区に含まれ、字繁多川は識名台地の北側縁辺部に展開する。その北側には字名の由来に成っている「ハンタガー」の井戸がある。ハンタガーに接して首里城と那覇港を結ぶ往時の国道「真珠道」が通る。その真珠道に沿って「ボウジガー・ウファーガー」等の井戸が点在して見られ、水の豊富な一帯であることが窺える。特に、「ボウジガー」は神応寺の坊主が専用に使用していたので、このような井戸名が付いたと伝えられている。一帯は真珠道に沿って未だ石垣等が残り往時の景観が窺える。その真珠道に近くに琉球八社の1つに数えられている「識名宮」のお宮が立地する。その識名宮の東隣に神応寺がある。識名宮の奥には、聖域でもある琉球石灰岩の洞窟がある。一帯は琉球石灰岩が発達、路頭した地域でもある。神応寺はその琉球石灰岩の上に所在する。神応寺は識名宮を庇護する寺として建立されたようで、山号を姑謝山。本尊は千手観音・阿弥陀如来である。周辺には、シーマ御嶽遺跡や市指定の沢庵親方の墓や世界遺産に登録された識名園等の文化財が点在して見られる。古より閑静な一帯であったことが窺える。

<参考文献>

- | | | | | |
|--------------|-------------|----------|-------|----|
| 『統計那覇』No.134 | 那覇市 | 2006年 | 1月 | |
| 『那覇市の文化財』 | 那覇市教育委員会 | 2001年 | 3月 | |
| 『沖縄大百科辞典』 | 沖縄タイムス社 | 1983年 | 5月 | |
| 上原静・太田宏好 他 | 『那覇市の遺跡』 | 那覇市教育委員会 | 1982年 | 3月 |
| 島 弘・渡久地政嗣 他 | 『識名シーマ御嶽遺跡』 | 1997年 | 3月 | |

第四章 層序と遺構

第1節 層序

層序は第1表の出土表等で細かく区分されているが、基本的には①戦後の土層と②先の大戦で焼失した神応寺の造成土と③造営時の土層の3期に分けられる。以下、各層ごとに記述する。

第1層：戦後の土層。いわゆるグラントの整地上層で、下位は緑褐色砂層(方言でニービ)、その上位

に赤褐色土層（方言で国頭マージ）で整地された土層である。実際、老人会などがグランドゴルフなどで使用。

第Ⅱ層：戦災で焼失した神応寺の瓦礫を造成した層で、北西側より南西側の低地に敷き均らしたことが伺えた。その際に、本堂側の基盤（琉球石灰岩）も削平された状況であった。戦災に伴うものと思われた焼土の混入が顕著に確認された箇所も見られた（Ⅱa層）。遺物が集中的に出土する場合は、一括資料で取り上げた。

第Ⅲ層：神応寺の造営期と一部活動期の層で、正門側で顕著に確認された。Ⅱ＋Ⅲ層の混在する（Ⅲa層）。その下位の黒褐色の未攪乱土層で、琉球石灰岩の小礫を含む層（Ⅲ層）である。本層が神応寺の造営時の土層である。

第Ⅳ層：基盤の琉球石灰岩の凹地に堆積した淡い茶褐色土層と南西部で約30cmほどの厚さで堆積した土層である。遺物は殆ど得られなかった。

第Ⅴ層：「セー7」グリットで確認された層で地山の赤褐色土層に溝状に堆積した淡い茶褐色土層である。遺物は希少である。

第Ⅵ層：粘質赤褐色土。いわゆる地山で沖縄で「島尻マージ」と通称されている。

第2節 遺構

遺構は、層序でも述べたように、第Ⅱ層期の戦災及び造成によってかなり保存状態は悪かったが、それでも本堂跡・建物跡・石組遺構3基・埋壁2基・土壇1基等が確認された。以下、個々の遺構について記述する。

本堂跡（第6図）

第Ⅳ層の岩盤を削平し平坦面を構築する遺構である。礎石等は確認されなかったが、岩盤の右側で削平痕や前面で石列遺構等が僅かに検出された。石垣から正面の階段部は保存状態が良好であった。階段は3段、周辺は石垣で取り囲み、底面の袖に溝を巡らす。右側の溝口は表石垣で確認された。階段部の底面は石敷きを施すが、一部岩盤も削平し平坦面を造る。本堂へ繋ぐ参道部は攪乱が著しく明確な遺構は検出されなかった。

第7図に昭和初期の田辺泰氏の平面図²⁾と照らし合わせたもの示した。

建物跡（第9図）

その本堂跡の東側で幅90cmの雨端状の石敷き面が確認された。石敷き面の最東側では溜井跡が西側では石組遺構がそれぞれ検出された。この雨端状の石敷きの前面には粗掘りの溝と2個並列の石列

が検出された。石列は溝より新しく明らかに簡易な踏み石状のものであった。一方北側は削平が著しく石敷きに伴う遺構は検出されなかった。

溜井 (第10図)

直径90cm×深さ96cmを測り、内側に漆喰状のものを貼り付けた溜井である。周辺天場は破損しているが部分的に目地に漆喰状の貼り付けられている。埋土から石油コンロ等の新しいものも見られたが、獣骨片等も見られた。

石組遺構 (第11図)

石組遺構は近接した状態で3基確認された。1号石組は前述した建物跡に付随するもので、70cm×82cm×深さ58cmのやや長方形に構築されたものである。内面には丁寧に漆喰状のものを張り巡らす。天場周辺にも目地に充填する箇所が見られた。

2号石組遺構は1号石組の東側「せー10グリット」で確認された。保存状態が悪く立ち上がりは確認されなかったが、石敷きに漆喰状のものを貼り付けた底面が確認された。部分的にスミ痕も見られた。

3号石組は2号石組の北側「せー11グリット」で確認された。保存状態は良好で、126cm×64cmを測る長方形の遺構である。本遺構は岩盤を刳り貫いて構築されており、上位の遺構・下位の遺構に分けられる。上位の遺構(80cm×70cm)は下位の遺構を挟み、北側に底面から切り石を立ち上げた略長方形の遺構である。深さは約10cmほどで、底面に黄褐色の漆喰状の土に大ぶりの石をはめ込んで構築された遺構である。下位の遺構は、深さ58cmで、底面から周辺には黄褐色の漆喰状の土を貼り付けている。埋土は基本的に淡い暗茶褐色であるが、区画毎に3A・3B・3Cと呼称し取りあげた。上位の遺構が3A、下位の遺構が3B・3Cとなる。

埋壘 (第10図)

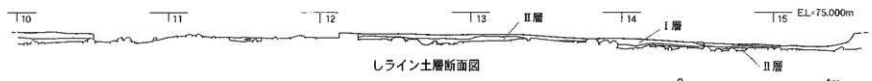
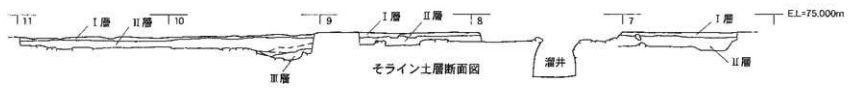
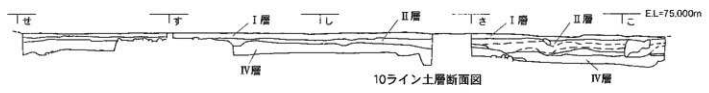
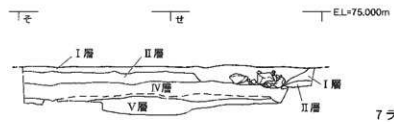
埋壘はいずれも掘えられた状態で本堂跡と建物跡の2箇所で見出された。本堂跡では前面の両端部に当たる「せー10グリット」で確認された。埋壘No.2は無軸陶器の鉢で、内部には鉢状加工したサンゴが検出された。周辺に漆喰面や礫敷き面が確認されたが、攪乱が著しかった。

建物跡の埋壘No.1は「せー9グリット」で石敷きの下位より確認されたが、基本的に建物跡に付随する遺構と解した。本品も無軸陶器の鉢で内部には石敷きの切り石が混入されていた。

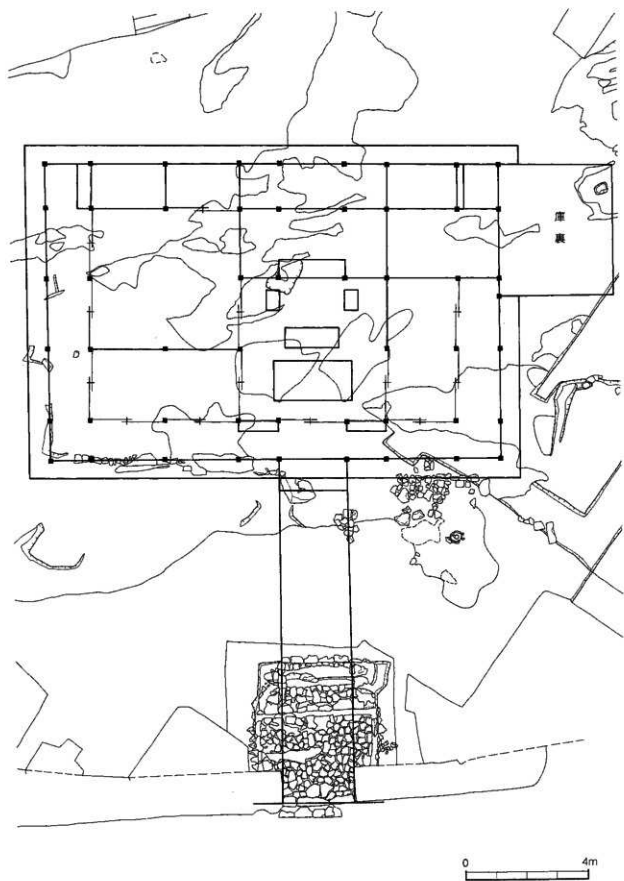
土壇 (第10図)

調査区の東側「せー6グリット」で検出された。平面形はやや長楕円形で長軸223cm×短軸106cmを測る。埋土は淡い黄褐色土を呈し、南側で集石が見られた。遺物は沖縄産の無軸陶器が僅かに出土している。

註：田辺泰『琉球建築』座右宝刊行会 1972年10月25日



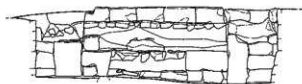
第4図 層序



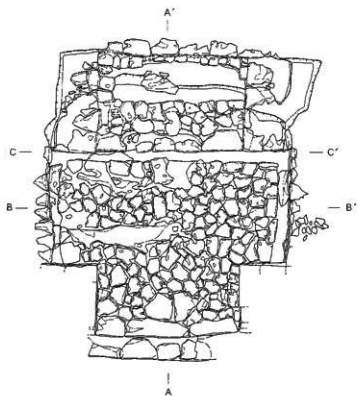
第7図 田辺泰氏による平面図との合成図

C

C' EL.74.800m



断面見通し図



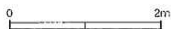
A' EL.74.800m

A

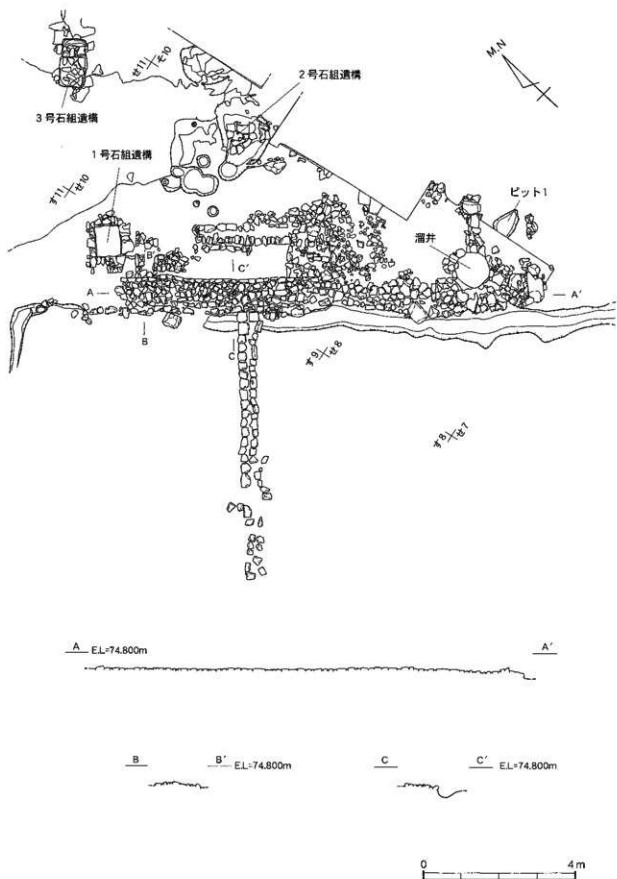


B

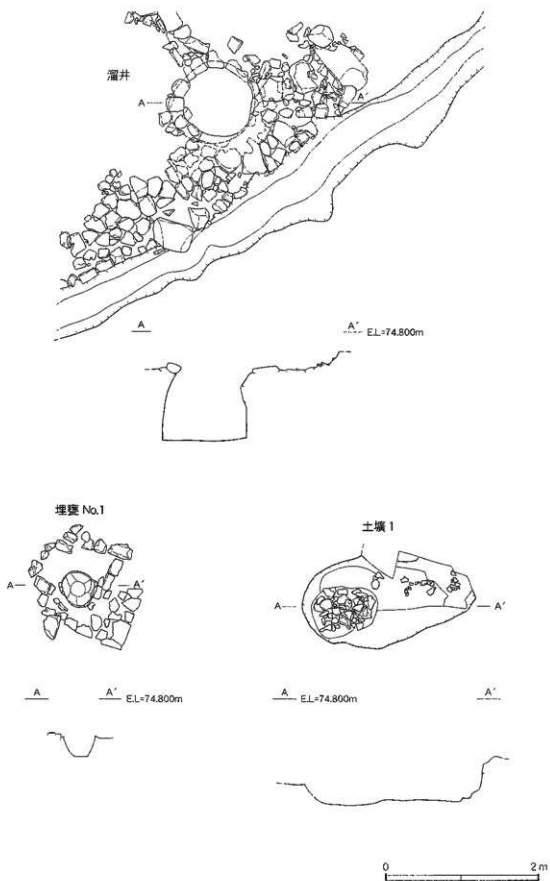
B' EL.74.800m



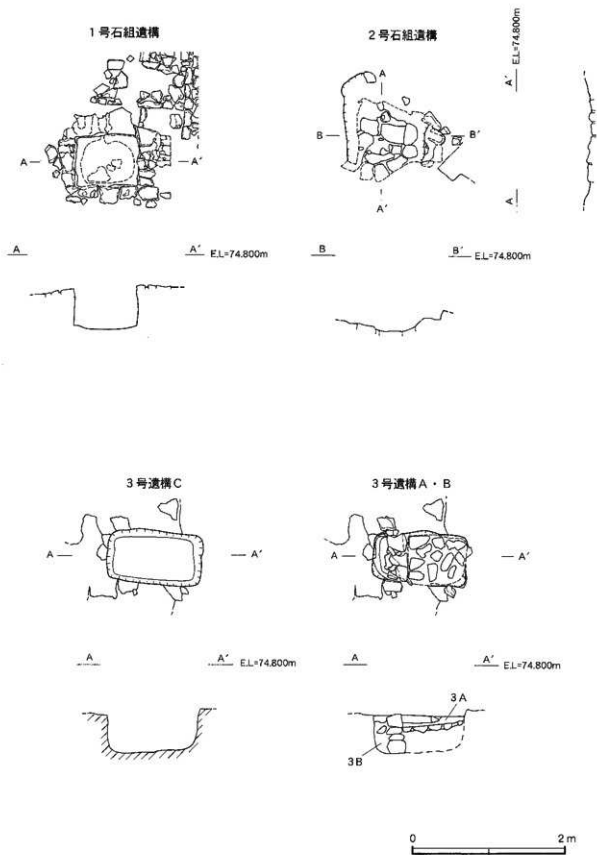
第8図 階段 平面図・断面図



第9図 建物跡 平面図・断面図



第10図 溜井、埋甕、土坑 平面図・断面図



第11図 石組遺構 平面図・断面図

第1表 出土遺物一覽

器種 出土地点	中国産				瑠璃華	壺家瓶	鉄箱	三彩	夕イ産陶器	埴輪陶器	本土産			沖繩産			産地不明										合計		
	白磁	青磁	青花	色絵							染付	産地陶器	無銘陶器	陶器土器	瓦葺土器	染付	産地陶器	無銘陶器	運筆	人形	円盤状製品	軒瓦	土器	鏡裏	青銅製品	鉄製品		石製品	
I層	52	36	95	8	1		2	1		55	27	41	382	514	81	20	12	65	2	1	1	14	48	9	4	8	115	3	1597
II層	164	97	223	9	5	1	4	5	2	153	61	73	767	949	125	97	62	210	10	3	1	23	165	33	39	36	442	13	3772
III層	121	76	129		1		1	8	2	174	29	15	134	178	48	7	32	84	13			10	34	97	27	11	51	3	1285
IV層	24	24	31					2		15	6	3	34	56	36		6	24	3	1	1	2	2	13	3		3	2	291
V層													1	2			1												4
階段部			2								1		5	40	1	1				1		1		1					53
基壇内	I層	1	1	2						4		1	4											1	2				16
	II層	2	6	9	1			2		9	4	1	5	26		3	3							7	7		3	4	92
基壇内 試掘トレンチ	III層	8	8	14			1	1	1	3	1			2		1	2		1		1		1	21			2	1	69
	I層									1			3																4
石敷	II層			1						1	1		13	16	5	3	1					1	1				2	2	47
	溝下部												2	2		1													5
掘井		1										1	19	27	1	1		1					1			3	7		62
1号石組遺構												1	1	9		2	1	1									1	3	19
2号石組遺構				1									6	9	2										1		1		20
3号石組遺構	埋上		1											2				3											6
	A											1						1											2
	B		1																										1
	C														2														2
土層1														1															1
土層2													4	10		3													17
土層3											1			4															5
ビット1		1																											1
試掘トレンチ	I層		3	4					1		1	24	18	12	2	1	1	1				1	2					5	76
	II層	3	3	4					7	4	2	20	21	4	5	2								4		1	11	1	92
	III層	2		3					2	1	2	9	20	1	2	1		1							4		12	1	61
合計	379	257	518	18	7	2	8	19	4	425	136	141	1430	1911	320	148	124	390	31	6	4	52	266	187	74	65	658	24	7604

※1 自然遺物、近代遺物、陶器の小片(2×2cm以下)、軒瓦をのぞく瓦類、形状の不明な金属類は集計の対象外とした。

※2 攪乱、採集はI層に言めた。

第V章 出土遺物

第1表に示したとおり、多種多様な遺物が得られた。その多くが、戦災や造成等によって遺物は細かく破損して得られた。それでも寺院跡の特徴を示す遺物、香炉・仏具等が確認された。その中でも最も多く得られたのは瓦類で、次いで碗類などであった。その中から、特徴的な遺物を抜き出し報告する。以下、中国陶磁器より略述する。個々の観察は第5～7表に示した。

1. 中国陶磁器

白磁（第12～15図）

第2表に示したとおり破片379点の出土であった。器種としては、碗・皿・杯・香炉等で、最も多く見られたのは皿類であった。

碗類は薄手の表面に龍鱗痕が見られる外反碗や直口碗などが得られた。釉薬もその殆どが高台脇までの施すものであった。その中で、高台内は印花文を施すものも得られている。

皿類は最も出土量・種類も多く確認され、宗教施設の特徴と思われた。器種としては、皿・小皿・稜花皿・灯明皿等が得られた。6～9に示したものは、浅い内湾ぎみ皿である。第13図14の高台内に墨書が観察されるが、判然としない。その他に、17～19の灯明皿の出土も注意された。

香炉は内湾器形と袴腰の2種が見られた。いずれも3足の脚が付く。杯・小碗類の殆どが型成形品のものである。

青磁（第16～19図）

第3表に示したとおり破片で257点出土であった。器種が確認されたものとして、碗・皿・盤・瓶・鉢・香炉等の6種であった。最も多く得られたのは碗類である。

碗類も白磁同様に1～3に示した薄手のものが注意を引いた。4・5は細蓮弁文碗である。皿類は白磁と異なって少なかった。瓶は僅かに1点のみ示した。淡い緑色を呈し、頸部が緩やかに立ち上がるものである。11・12は鉢類で直のものとし字に折り曲げ稜花のものが見られた。

香炉は筒型（小）と袴腰（中・大）のものが見られた。小サイズは13～19に示した。20は中サイズのもので、釉薬を口縁部内面より脚部まで施釉。内面と底面は露胎。頸部に帯状の凸帯を巡らす。大サイズは第19図に口縁部と底部を示した。21は肩部より直に立ち上げ口唇部を折り曲げるもので、頸部には沈線、腰部に草花文を描く。せ-6のIV層を中心に出土するが、I層からも得られている。22は底部片で高台部は露胎。

青花（第20～25図）

中国陶磁器で最も多く得られたもので、第4表に示したとおり破片で518点得られた。碗・皿・鉢・瓶等が見られた。その中で、26・30・31に示したものが、漳州窯系と確認されたのは意義深い。

碗類は1～18に示した。1・2のアラベスク文や十字文などの古手のものは少なかった。3の粗製碗も少なく、殆どが4～15の草花文・寿字文等のものが多く確認された。皿類は古手の玉取り獅子文・十字文も見られたが、波濤文の基筒底の皿が顕著に確認された。26～34は鉢類で内湾器形のもので顕

著に見られた。第24図34はハの字に立ち上げるもので、外面に濃い呉須を用いて抽象的な文様を描いている。瓶類は胴下半部の膨らむものが得られた。文様は芭蕉文・唐草文・窓文に梵字を描くものである。

杯類は高台内に僅かに文様が観察される38と外面が鉄釉で内面に圏線と抽象的な草花文を描く39・40の外反杯が得られた。いずれも壘付けは露胎である。38は蛇の目釉はぎが施されている。

第2表 白磁出土一覧

器種	碗						皿										
	口縁部	胴部	底部	小碗			口縁部	胴部	底部	口縁部	小皿			稜花皿			
				口縁部	胴部	口縁部					口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	
I層		1	2	1	1		4		4		3			2	2		
II層	6	1	2	1	1		21	1	20		4	1	1	3	4		
III層	6	1	4	3		1	30	1	12	1	3	2	1		3		
IV層	2	1		1			7		3		1				1		
基壇内	I層																
	II層						1										
	III層	1					2			1		1		1			
溜井																	
ビット1									1								
試掘トレンチ	II層	1															
	III層	1					1										
合計	18	5	7	6	1	1	66	2	40	1	12	3	3	3	11	6	2
	30			8			109			21			19				
	38						149										

器種	灯明皿			小杯			香炉			器種不明					合計	
	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	器種		袋物		蓋?			
									口縁部	胴部	底部	口縁部		胴部		
I層				2	1		3	11	1	3	7	3		1	52	
II層	1				4	1	16	24	5	12	23	8	1	2	164	
III層	4	2	2	1				2		4	24	6	1	2	121	
IV層										1	5	2			24	
基壇内	I層										1				1	
	II層									1					2	
	III層									1	1				8	
溜井								1							1	
ビット1															1	
試掘トレンチ	II層									1	1				3	
	III層														2	
合計	5	2	2	3	5	1	19	38	6	22	62	20	2	4	1	379
	9			9			63			111						

第3表 青磁出土一覽

器種	碗												皿			盤			鉢			瓶			香炉			酒会座			器種不明					合計
	口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		蓋?		把手?			
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	蓋?	把手?				
I層	2	5	1	1	1	1	1	1	2	1	2	5	1	3	1	7	2																	36		
II層	9	12	1	2	1	2	3	6	1	2	9	7	6	4	4	1	3	14	5	4	1												97			
III層	16	8		1		2	1		6	3		3	4	1	2		2	17	9													76				
IV層	3	2	3	1	2			3		1		2	2				1	3	1													24				
基壇内	I層																																1			
	II層	1	2					1										1															6			
	III層						2	1		2	1							2															8			
基壇内 試掘トレンチ	II層						1																										1			
	埋土						1																										1			
3号石組遺構	C					1																											1			
	I層		1		1									1																			3			
試掘トレンチ	II層									1																							3			
	III層																																	3		
合計	30	31	6	6	6	9	12	1	14	13		14	18	6	13	1	7	42	17	4	1	1											257			
	67		16		22		27		1		38		14		72																					

第4表 青花出土一覽

器種	碗												皿			杯												鉢			小瓶			器種不明					合計				
	口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部			胴部		底部	
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部		底部			
I層	19	13	8		2		2	1	4	6	11	1																													95		
II層	45	32	12	1	5	2	4		11	5	17	1	2	1			6		2	1	1	1	2	3	2	4	7	2	2	5		1	6	23	9	4	1	2	1	223			
III層	20	23	3		1	2	1		18	4	5	2	1	3			3	3																						129			
IV層	2	10			1	2			2																														31				
階段部入口	裏込め		1							1																													2				
	I層			1																																			2				
	II層		5							1	2																												9				
台敷	III層		6	1					1	1																													14				
	II層			1																																			1				
2号石組遺構	I層		1																																				1				
	II層			2																																			4				
試掘トレンチ	I層		1																																				4				
	II層			1																																			4				
	III層		2							1																													3				
合計	102	82	24	1	9	7	7	1	37	15	39	4	3	4	1	9	3	2	2	1	1	6	4	2	8	17	2	5	16	3		15	47	21	10	1	2	2	518				
	209		23		24		91		103		12		14		30		28		23		3		98																				

第5表 白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口径 高さ 高台径 (cm)	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第12図 図版5の1	1 外反碗	13.7 — —	黄白色で 粗粒子	内外面に薄い透明 釉を高台脇まで施 す。	なし	灰白色	細かい	さー10 IV
" " 2 " 2	" "	— — —	淡灰白色で 微粒子	"	"	青白色	なし	こー14 IV さー13 IV攪乱
" " 3 " 3	碗の 高台	— — 4.1	"	" 内底面は蛇ノ目、高 台は露胎。	印花文	灰白色	"	こー10 III礫混
" " 4 " 4	" "	— — 5.5	黄白色 粗粒子	"	記の印花文	黄灰色	"	こー12 II
" " 5 " 5	" "	— — 5.4	"	薄い透明釉を高台 脇・内底際まで施す。	なし	"	"	さー9 III けー11 III攪乱
" " 6 " 6	皿	13.8 4.1 5.2	"	"	"	灰白色	"	さー9 けー12 II a
" " 7 " 7	" "	14.4 — —	"	薄い透明釉を内外 面に施す。	"	"	"	すー11 基壇内III
" " 8 " 8	" "	12.8 4.2 3.8	灰白色で 粗粒子	"	"	灰白色	細かい	こー14 III たー15 II最下部一括
" " 9 " 9	" "	14.8 — —	黄白色 粗粒子	"	"	黄白色	"	さー13 II
第13図 図版6の10	10 腰折皿	9.6 1.6 5.0	灰白色で 微粒子	畏付け露胎。	見込みに寿字の 印花文	白色	なし	さー10 II
" " 11 " 11	外反 皿	10.8 2.5 5.6	淡灰白色で 微粒子	"	なし	淡い白色	"	さー9 III
" " 12 " 12	" "	— — 3.2 6.2	"	"	"	"	"	さー9 II a II a 造成土
" " 13 " 13	稜花 皿	9.8 — —	灰白色 粗粒子	内外面に施釉。	"	"	"	さー12 基壇内III こー14 III攪乱
" " 14 " 14	皿の 高台	— — 3.8	黄白色 粗粒子	高台脇から露胎。	"	黄白色	細かい	さー10 II b 高台内に墨 書?
" " 15 " 15	小皿	5.6 1.1 3.0	白色で 微粒子	口縁部に薄く施釉。	"	淡白色	なし	けー13 II
" " 16 " 16	" "	7.2 1.9 2.8	"	見込みと高台脇は 露胎。	"	"	"	さー12 II統土礫混
" " 17 " 17	灯明 皿	7.8 — —	白色で 微粒子	内面のみに施釉。	"	"	"	けー12 II a

第5表 白磁観察一覧

押図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 器 高 台 径 (cm)	径 高 台 径 (cm)	素地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第13図 18 図版6の18	灯 明 皿	7.8 1.8 4.1	7.8 1.8 4.1	白色で 微粒子	口唇部・胴下半部は 露胎。	なし	淡 白 色	なし	こー11 Ⅲ焼土
" 19 " 19	"	7.8 1.8 4.3	7.8 1.8 4.3	"	外面露胎。	"	"	"	こー10 Ⅲ礫泥
" 20 " 20	綻 花 皿	18.8 3.1 10.0	18.8 3.1 10.0	白色で 微粒子	畳付け露胎。	外面に筥掘り	淡 白 色	"	さー10 Ⅱa すー11 Ⅱ焼土
第14図 21 図版7の21	小 杯	3.2 2.1 1.6	3.2 2.1 1.6	灰白色で 微粒子	畳付け露胎。	なし	白 色	"	しー10 Ⅱa
" 22 " 22	"	— — 2.5	— — 2.5	"	" 見込みは蛇ノ目軸 八分。	"	"	"	こー10 Ⅱ
" 23 " 23	"	— — 1.5	— — 1.5	"	畳付け露胎。	"	"	"	けー13 Ⅱ こー12 Ⅱ焼土
" 24 " 24	小 碗	— — 2.5	— — 2.5	"	長付け露胎。 蛇ノ目軸八分。	"	"	"	こー12 Ⅱ焼土
" 25 " 25	"	8.2 4.1 3.2	8.2 4.1 3.2	"	畳付けから高台内 露胎。	"	淡 白 色	"	けー11 Ⅲ礫泥 胎土目2ヶあり
第15図 26 図版8の26	香 炉	23.8 — —	23.8 — —	"	外底面露胎。	"	灰 色 色	"	さ・し・すー10 せ・そー8 Ⅱ他
" 27 " 27	"	24.8 — —	24.8 — —	白色で 粗粒子	内器面胴下半より 露胎。	"	淡 白 色	あり	せー7・8 Ⅱ遺物集中 他

第6表 青磁観察一覧

押図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 器 高 台 径 (cm)	径 高 台 径 (cm)	素地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第16図 1 図版9の1	外 反 碗	13.5 — —	13.5 — —	灰褐色で 粗粒子	内外面に薄く施す。	無文	淡 緑 色	細 か い	さー10 Ⅱ
" 2 " 2	直 口 碗	14.6 — —	14.6 — —	淡灰白色で 粗粒子	内外面にやや薄く 施す。	"	灰 緑 色	"	こー14 Ⅲ
" 3 " 3	"	16.6 — —	16.6 — —	"	"	"	"	なし	さー9 Ⅱa 造成上 さー10 Ⅱ
" 4 " 4	"	12.8 — —	12.8 — —	"	内外面に薄く施す。	細蓮弁文	灰 緑 色	あり	こー12 Ⅱ・Ⅲ・Ⅲa
" 5 " 5	"	11.2 6.7 4.3	11.2 6.7 4.3	"	内外面にやや厚く 施す。 外底面内は露胎。	細蓮弁文 見込みに 印花文	淡 緑 色	"	こー11・12 Ⅱ・Ⅲ焼土 さー10 Ⅳ
" 6 " 6	碗 の 高 台	— — 6.7	— — 6.7	灰白色で 粗粒子	蛇ノ目軸八分。 畳付け・外底面露胎。	なし	"	なし	さ・せー10 Ⅳ 試掘トレンチ

第6表 青磁観察一覽

押印番号 図版番号	名称 又は 仮称	口径 高さ 高台径 (cm)	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第17図 7 図版 9の7	桜花瓶	— — —	灰白色で 粗粒子	内外面にやや厚く 施す。	なし	灰 緑色	あり	さー9 Ⅱ攪乱
" 8 " 8	"	— — —	"	"	ラマ式蓮弁文	"	"	そー10 Ⅱ攪乱 試掘トレンチ
" 9 " 9	盤	32.0 — —	"	"	波状文	淡 緑色	なし	こー14 Ⅰ表探
" 10 図版10の10	瓶	— — —	灰白色で 微粒子	外面に厚い釉薬を 施す。失透釉。	頸部に貼り付け 文	淡 緑色	"	さー15 Ⅰ
" 11 " 11	鉢	— — —	"	内外面に薄く施す。	緑部裏に沈線を 巡らす	灰 緑色	あり	さー13 基壇内Ⅲ しー12 基壇内Ⅲ
" 12 " 12	桜花鉢	21.8 — —	"	外面に厚い釉薬を 施す。	口唇部に凹線を 巡らす	淡 緑色	なし	けー12 Ⅲb こー14 Ⅲ攪乱
第18図 13 図版10の13	香炉	8.0 — —	灰白色で 粗粒子	内外面に薄く施す。 内面下部は露胎。	緑部・胴部・下部 に沈線を施す	淡 緑色	"	こー11 Ⅲ焼土
" 14 " 14	"	9.7 — —	淡黄灰色で 粗粒子	内外面にやや薄く 失透釉を施す。	なし	"	あり	さー15 Ⅱ
" 15 " 15	"	— — —	"	"	緑部に沈線	"	"	けー12 Ⅳ
" 16 " 16	"	— — —	灰白色で 粗粒子	内外面にやや薄く 失透釉を施す。	緑部に沈線	濃 緑色	なし	たー15 Ⅱ最下部一括
" 17 " 17	"	9.9 — —	"	内外面に薄く施す。	緑部に沈線	灰 緑色	"	こー10 Ⅲ確混
" 18 " 18	香炉の 腰部	— — —	灰白色で 粗粒子	内外面にやや薄く 施す。	外面に沈線と千 鳥文	灰 緑色	"	こー14 Ⅱ攪乱
" 19 " 19	"の 底部	— — 6.1	"	内外面に薄く施す。	なし	"	"	さー11 Ⅱa こー12 Ⅱ・Ⅲ
" 20 図版12の20	"	16.0 10.6 —	灰白色で 微粒子	" 緑部内面と高台露 胎。	緑部と凸帯文	"	あり	せー6 Ⅲ さーしー10 Ⅲ 他
第19図 21 図版11の21	"	35.6 — —	"	内外面に厚く施す。	緑部に沈線 肩部に草花文	淡 緑色	"	けー11・12 Ⅱ・Ⅲ せー6 Ⅳ
" 22 " 22	"	— — —	"	見込みと高台裾か ら外底面露胎。	腰部に蓮弁文	"	"	せー7 Ⅱ

第7表 青花観察一覧

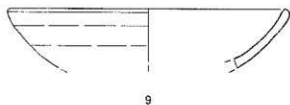
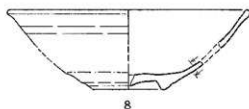
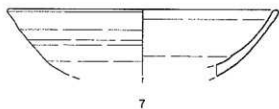
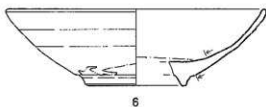
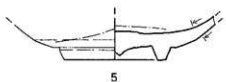
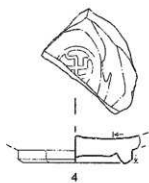
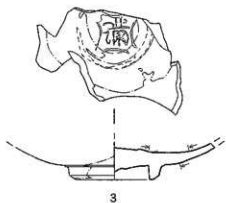
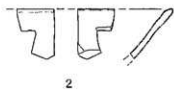
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 器 高台径 (cm)	素地	施 釉	文 様 内面 外面	貫 入	出土地点
第20図 1 図版13の1	碗	14.6 — —	灰褐色で 粗粒子	内外面に薄く施す。	アラバスク文 圏線	なし	しー14 Ⅱ こー11 Ⅲ
" 2 " 2	" の高台	— — 4.9	"	畳付け露胎。	十字花文 圏線	"	こー13 Ⅲ すー11 Ⅱ・Ⅱ焼上
" 3 " 3	碗	13.4 4.6 7.5	"	" 内底面と畳付け露胎。	抽象化された草花 文	"	しー10 Ⅱ
" 4 " 4	"	13.6 — —	"	"	"	"	さー15 Ⅱ
" 5 " 5	"	15.6 — —	灰褐色で 微粒子	内外面に薄く施す。	草花文	"	けー12 Ⅲ
" 6 " 6	"	11.4 — —	"	"	"	"	さー10 Ⅰ
" 7 " 7	"	— — —	"	"	"	"	こー14 表採
" 8 " 8	"	— — —	"	"	"	"	こー12 Ⅱ焼上
" 9 " 9	"	— — 6.2	"	畳付け露胎。	草花文 高台内圏線 圏線と点文	"	こー11 階段部攪乱
" 10 " 10	" の高台	— — 6.8	灰白色で 微粒子	内外面に薄く施釉。 畳付け露胎。	草花文 圏線と点文	"	さー9 Ⅱ攪乱
第21図 11 図版14の11	"	— — 6.4	灰白色で 微粒子	"	"	"	しー12 Ⅱ
" 12 " 12	"	13.1 — —	"	内外面に薄く施釉。	寿字文・雨雲 組み合わせ 圏線	"	さー9 Ⅱ攪乱
" 13 " 13	" の高台	— — 6.8	"	畳付け露胎。	菊花散らし文 圏線	"	しー15 Ⅰ
" 14 " 14	"	— — 5.9	"	"	寿字文と菊花散ら し文・圏線	"	こー13 Ⅱ
" 15 " 15	"	— — 6.1	"	"	菊花散らし文 圏線 圏線	"	そー11 Ⅱ a
" 16 " 16	"	15.0 7.4 6.2	"	"	草花文 圏線 フリス式蓮弁文 帯文・圏線	"	せー10Ⅲ 試掘トレンチ さー9 Ⅱ攪乱他

第7表 青花観察一覧

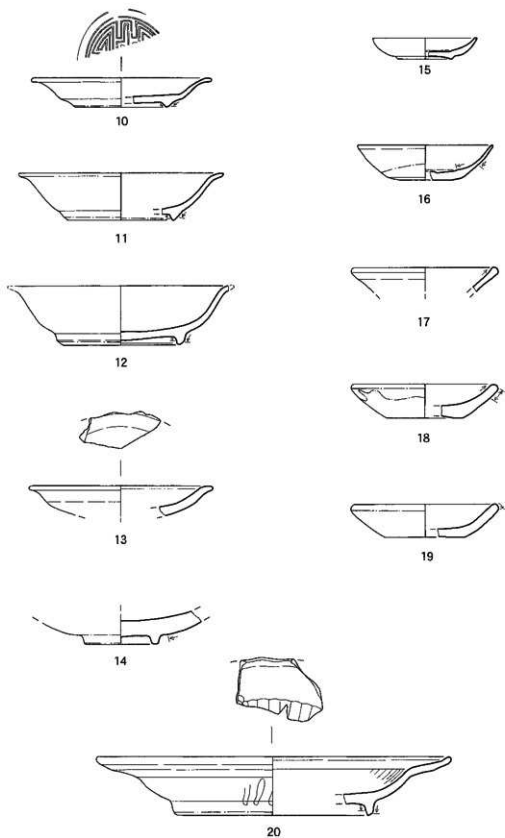
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 径 器 高 高 台 径 (cm)	素 地	施 種	文 様 内 面 外 面	貫 入	出土地点
第21図 17 図版14の17	小碗	7.3 — —	灰白色で 微粒子	内外面に薄く施釉。	圓線 組み帯文 芭蕉文	なし	モー6 IV
" 18 " 18	"	8.2 3.9 3.8	"	内外面に薄く施釉。 畳付け露胎。 砂が付着。	圓線 魚文・松文・梅文	"	こー11 階段部攪乱
第22図 19 図版15の19	皿	— — 6.4	"	"	唐草文? 玉取り獅子文 圓線	灰緑色	さー14 II 攪乱
" 20 " 20	"	9.5 2.1 4.4	灰白色で 粗粒子	畳付け露胎。	唐草文 十字架 文圓線	"	こー12 Ⅲ さー12 基礎内Ⅲ
" 21 " 21	"	9.9 — —	"	内外面に薄く施釉。	略波濤文 芭蕉文 花文・圓線	"	こー14 II 攪乱
" 22 " 22	"	10.2 2.8 3.7	"	腰部より畳付け露胎。 釉薬が未発色。	" 花文 ねじ花文 圓線	"	せー10 II こー14 III
" 23 " 23	"	— — 3.0	灰白色で 微粒子	畳付け露胎。	"	"	さー13 III
" 24 " 24	"	— — 3.3	灰白色で 粗粒子	"	寿字文? 芭蕉文 圓線	"	さー9 III
" 25 " 25	"	— — 6.2	灰白色で 微粒子	"	草花文 圓線 銘歌 帯文・圓線	"	こー11 階段入口裏 込め
第23図 26 図版16の26	鉢	23.1 — —	"	やや厚手の釉薬を内外 面に施釉。	草花文 雷文帯 圓線	粗い	しー10・11 Ⅲ 遺物集中 II 他
" 27 " 27	" の 胴部	— — —	"	"	丸文	なし	こー14 表採
" 28 " 28	鉢	20.5 — —	"	"	抽象的な雨垂れ文	"	けー12・13 IV こー12 Ⅲ・Ⅲ 磯泥
" 29 " 29	"	— — —	"	" 2次焼成品。	圓線 鱗文	不明	けー12 II・III こー11・12 III・Ⅲ 焼土
" 30 " 30	"	25.5 — —	灰白色で 粗粒子	"	口縁内外に 圓線	細かい	こー11 階段部攪乱
第24図 31 図版16の31	" の 高台	— — 7.9	"	" 畳付け露胎。 砂が付着。 外底内も部分的に露胎。	草花文? 圓線	なし	さー10 II a

第7表 青花観察一覧

押図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 器 高台径 (cm)	素地	施 釉	文 様 内面 外面	貫 入	出土地点
第24図 32 図版16の32	鉢 の高台	— — 7.4	灰白色で 粗粒子	やや厚手の釉を内外面 に施釉。 畳付け露胎。 砂が付着。	團縁 草花文	なし	こ-11 Ⅲb 1と同一か?
" 33 " 33	"	— — 12.8	"	" 畳付け露胎。 砂が付着。	團縁	"	せ-6 Ⅱ
" 34 図版12の34	鉢	22.3 9.2 10.3	灰白色で 微粒子	内外面に薄く施す。 畳付け際から露胎。	描象的な文様を描く	"	せ-10Ⅱa し・す-8 Ⅱ他
第25図 35 図版17の35	瓶	— — —	"	内外面に薄く施す。	芭蕉文 團縁	"	た-15 Ⅱ 最下部一括
" 36 " 36	"	— — 6.4	"	" 畳付け露胎。	唐草文 如意頭文 團縁	"	け-12 Ⅲb こ-12 Ⅲ
" 37 " 37	"	— — 7.0	"	"	窓文 梵字文・草花文	"	こ-12 Ⅲ糺混 こ-10 Ⅳ
" 38 " 38	小 杯	— — 2.5	"	見込み蛇ノ目ハギ。 畳付け露胎。		"	こ-14 Ⅱ
" 39 " 39	"	7.7 4.0 3.7	"	内外面に薄く施す。 畳付け露胎。	高台内團縁 團縁 抽象的な文様外面 は鉄釉を施す	"	こ-12 Ⅱ
" 40 " 40	"	7.4 4.0 3.7	"	" 畳付け露胎。	"	"	け-13 Ⅱ



第12圖 (圖版5) 白磁: 碗 (1~5)、皿 (6~9)



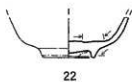
第13圖(圖版6) 白磁:皿(10~20)



21



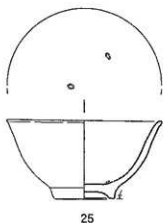
23



22



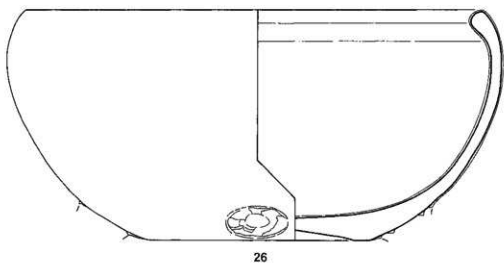
24



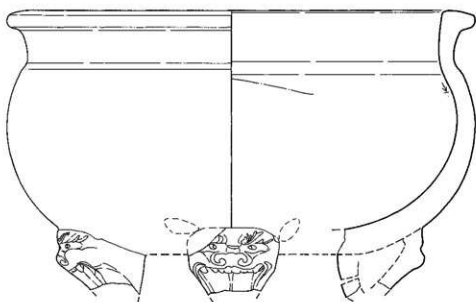
25



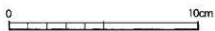
第14圖(圖版7) 白磁: 杯(21~23)、碗(24·25)



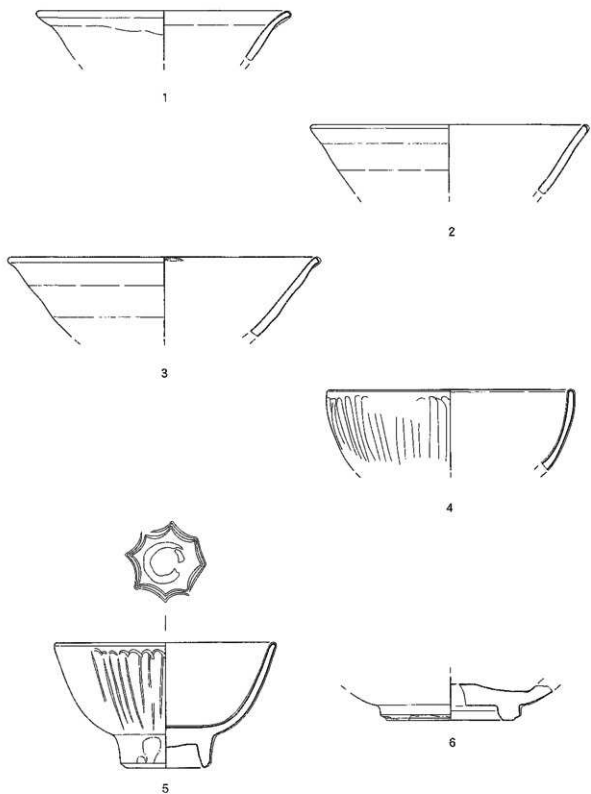
26



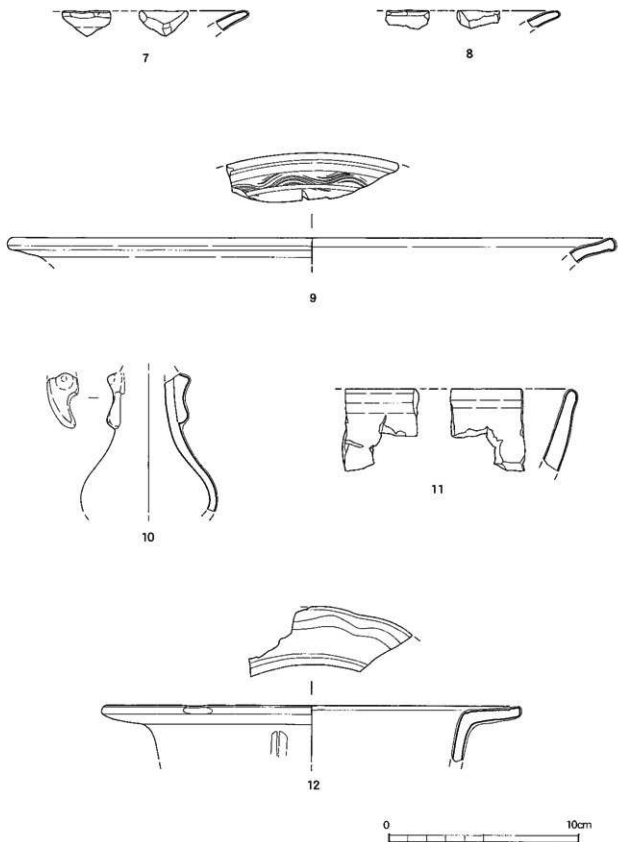
27



第 15 圖 (圖版 8) 白磁：香炉 (26・27)



第 16 图 (图版 9) 青磁：碗 (1~6)



第 17 圖 (圖版 9·10) 青磁: 皿 (7·8)、盤 (9)、瓶 (10)、鉢 (11·12)



13



14



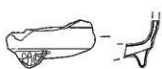
15



16



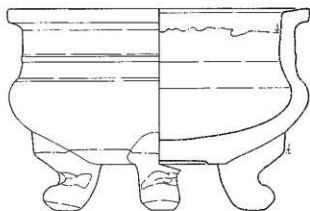
17



18



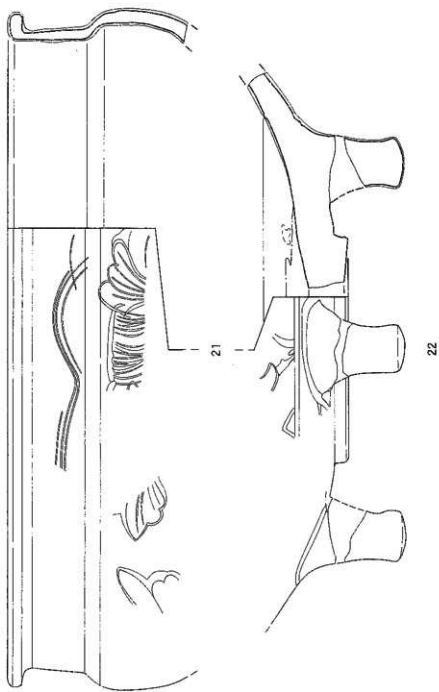
19



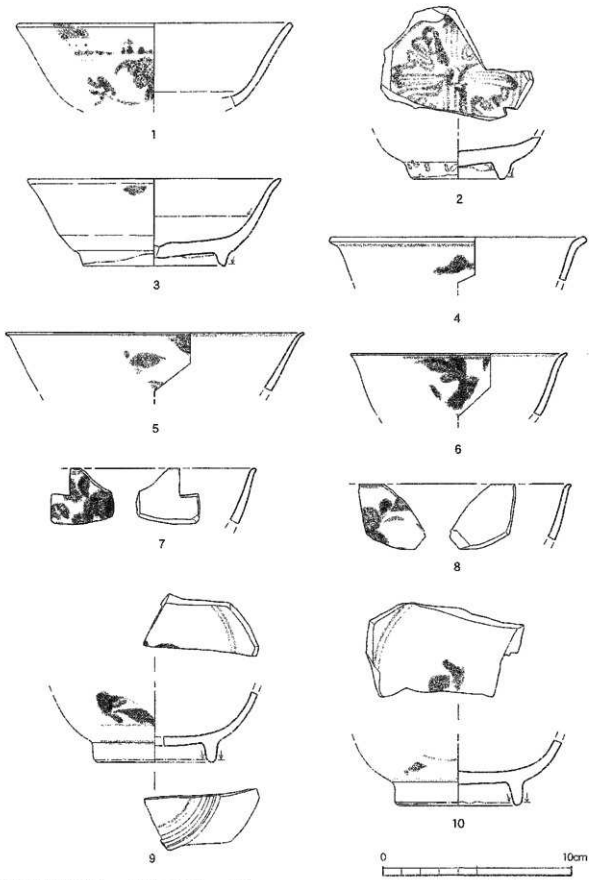
20



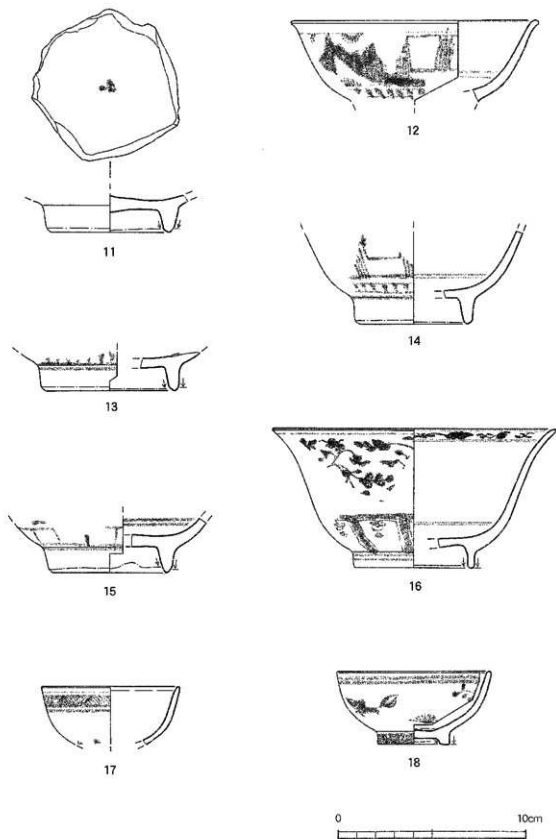
第18圖 (圖版10・12) 青磁：香炉 (13～20)



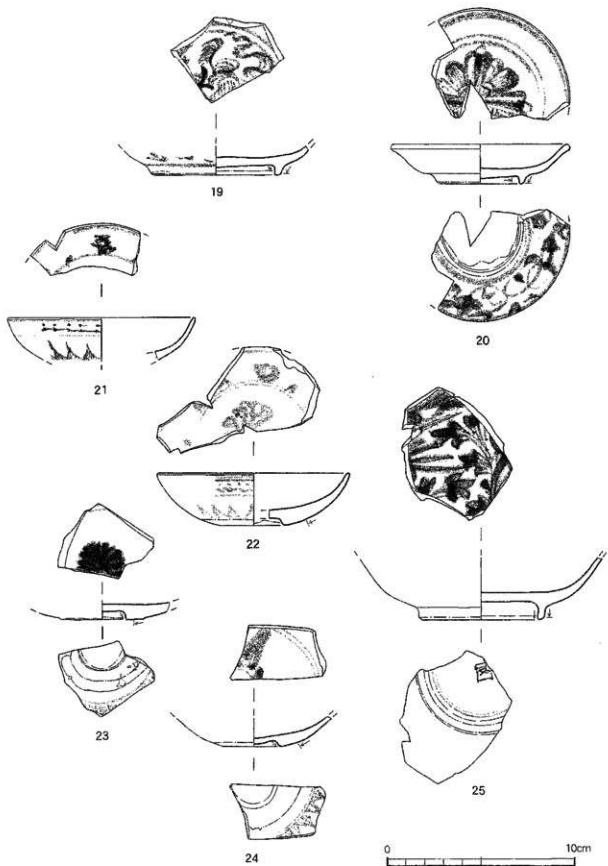
第19図 (図版11) 青磁：香炉 (21・22)



第20圖 (圖版13) 青花:碗(1~10)



第21圖(圖版14) 青花:碗(11~18)



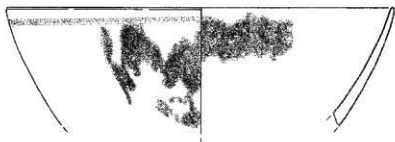
第22图 (图版15) 青花：皿 (19~25)



26



27



28



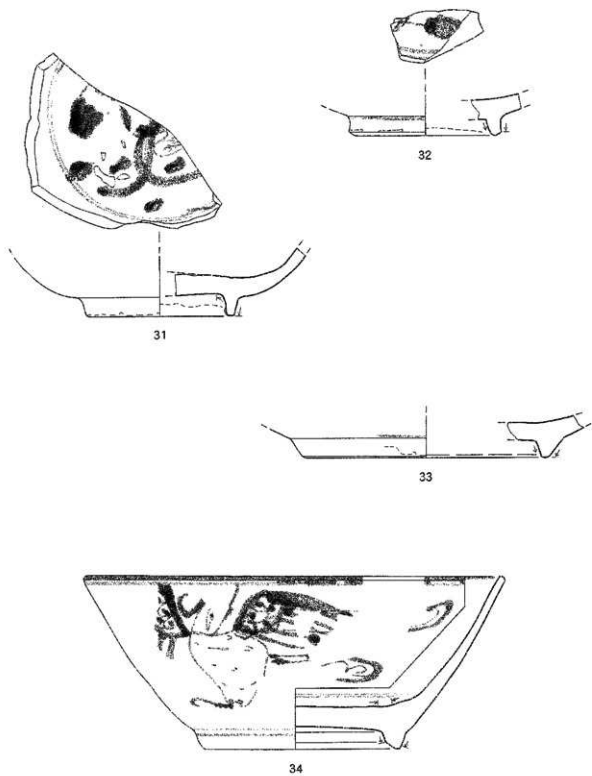
29



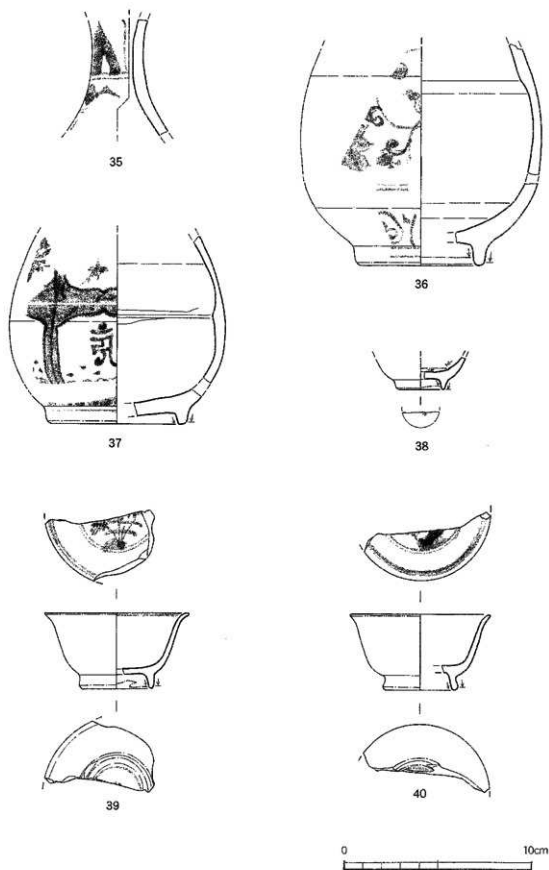
30



第23図 (図版16) 青花:鉢 (26~30)



第24圖 (國版12・16) 青花:鉢 (31~34)



第25圖 (圖版17) 青花: 瓶 (35 ~ 37)、杯 (38 ~ 40)

2. 色絵 (第26図1～6)

第8表に示したとおり破片で18点得られた。皿・花生・碗・香炉の4器種が見られた。2の皿は、赤色と黄色が肉眼で観察された。5の花生は剥離が著しく、色の確認は赤色のみであった。香炉は胴部を蓮華状に影らます小振りのものである。色は剥離しているため不明。

3. 瑠璃釉 (第26図7・8)

第9表に示したとおり7点確認された。示したのは、蓋と小碗でいずれも外面に瑠璃釉のものである。蓋の内面は露胎で、小碗の内面は白釉である。

4. 翡翠釉 (第26図9)

第1表に示したとおり2点確認された。示したものは、皿で裏面での剥離が著しい。

5. タイ産陶器 (第26図10・11)

第1表に示したとおり4点確認された。身と蓋の合子を示した。身の部分は褐釉で格子文や横位文を描く。蓋も同様に褐釉で格子文と横位文を描く。いずれも、合わせ口部は露胎。

6. 褐釉陶器 (第27・28図8～10)

第10表に示したとおり、破片で425点得られた。壺・水注等が確認された。注目されたものは、蓋受け部を持つ水注が確認されたことである。

壺は中・大のサイズが見られた。中が1～3、大が4・5である。1・4は口唇部を丸味に、2・3は平坦に成形。1～3は口唇部をほぼ露胎にするが、4は釉葉が見られる。

蓋受け部を持つ水注は、丸味を持つ胴部より緩やかなカーブを持ちながら口縁部で立ち上がる器形を呈する。口縁内面に蓋受けの架かりを有する。底部は平底と上げ底の2種が見られた。6は胴上位に円形の貼り付け痕が見られ、取手等が想定されたが、判然としなかった。今後、資料の追加を待ち検討を加えたい。

7. 無釉陶器 (第28図11～13)

現状で釉葉が見られないもので、いずれも内湾器形の鉢である。11は口縁部外面に浅い段を緑部に沿って廻らすものである。器面に砂粒が散見され手触りがザラザラするものである。その器形より蓋も想定されたが、今回は取り敢えず内湾鉢と取り扱った。本資料も今後の資料の追加を待ちたい。

12・13は摺鉢で前者が口唇部を平坦に成形し黄褐色を呈する。後者が丸味を帯び紫褐色を呈する。

第8表 色絵出土一覧

器種 出土地点	皿		花生		碗		香炉			器種不明		合計
	口縁部	底部	口縁部	胴部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	袋物		
										胴部	底部	
I層	1		1		1	1		2		1	1	8
II層	2		1	1			1	3	1			9
基壇内	II層		1									1
合計	3	1	2	1	1	1	1	5	1			18
	4		3		2		7			2		

第9表 瑠璃釉出土一覧

器種 出土地点	小碗		黄	瓶		袋物	合計
	口縁部	胴部		口縁部	胴部		
I層		1					1
II層	1	1	1	1	1		5
III層		1					1
合計	1	3					7
	4		1	1	1		

第10表 褐釉陶器出土一覧

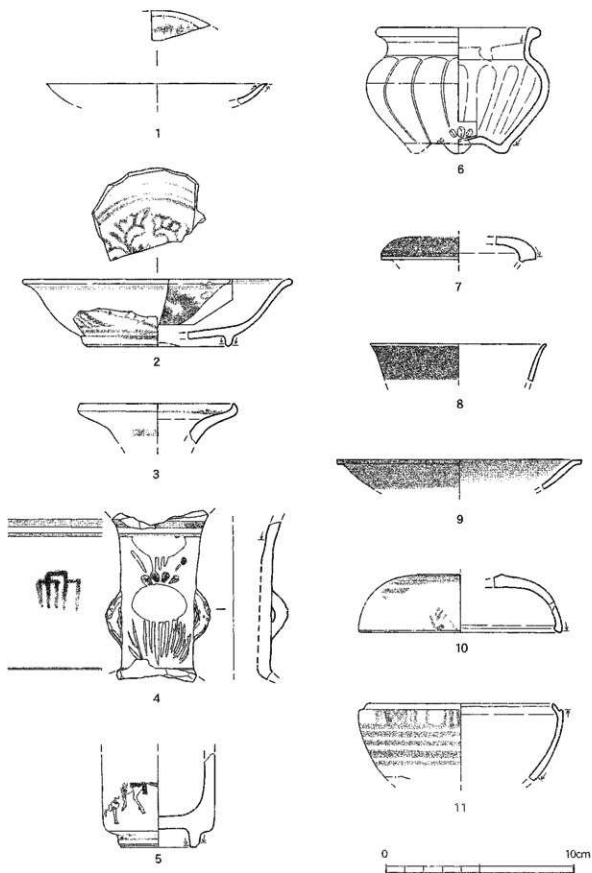
器種 出土地点	壺			鉢		水注			器種不明						合計	
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	壺類		鉢?		口縁部	胴部		底部
									胴部	底部	胴部	底部				
I層		39	1		1	1			8	1		1		3		55
II層	4	110	3	3	1	6	1	13	2	2	2	1	3	2		153
III層		107	1	1	7	21	3	13	1	1	1		17	1		174
IV層	1	11				1							1			15
石敷	II層												1			1
基壇内	I層		3		1											4
	II層		8												1	9
	III層		2		1											3
基壇内 試掘トレンチ	I層												1			1
試掘トレンチ	I層		1													1
	II層	1	5			1										7
	III層		2													2
合計	6	288	5		5	10	30	4	35	4	3	4	1	26	4	425
		299					44				77					

第11表 色絵・瑠璃釉・翡翠釉・タイ産陶器観察一覽

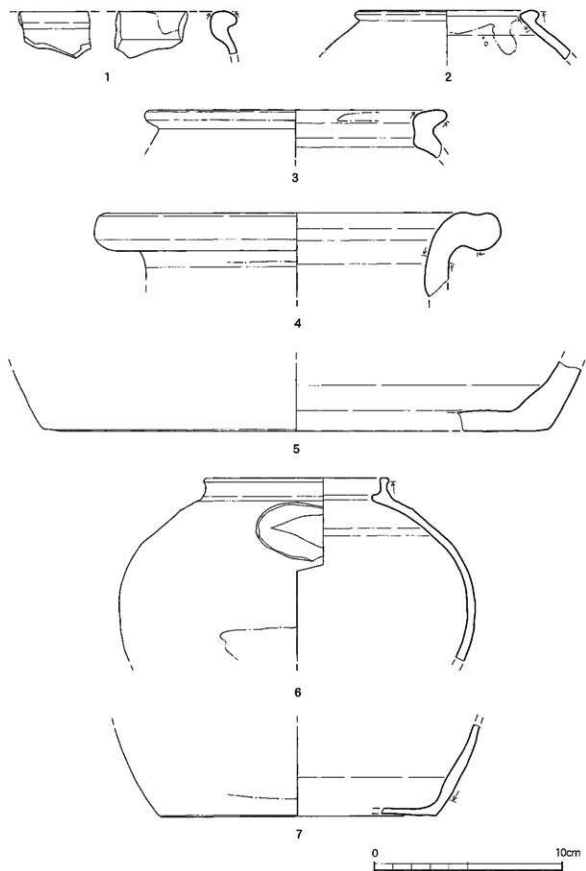
挿図番号 図版番号	名称又は 仮称	口 器 高 高台径 (cm)	素地	施釉	文様	黄 入	出土地点	
第26図 1 図版18の1	色 絵	皿	11.8 — —	灰白色 微粒子	口亮、内面に薄く施釉。 赤・緑色釉が僅かに観察 される。	草花文? なし	さー13 I	
" 2 " 2		"	14.4 3.6 7.6	"	内外面に薄く施す。 赤・黄色釉が観察される。 畳付けは露胎。	"	しー11 II すー11 基壇内IIa	
" 3 " 3		花生	8.6 — —	灰白色 粗粒子	内外面に施釉。 赤色釉が僅かに観察され る。	不明 隠線	"	しー11 II しー13 I
" 4 " 4		"	— — —	"	" 内器面は露胎。 "	隠線 草花文?	"	そー7 II
" 5 " 5		筒型碗	— — 4.0	"	畳付け露胎。	不明 隠線	"	すー9 II攪乱
" 6 " 6		香炉	9.0 6.7 —	白色	内底面と内面、縁部内面 は露胎。	蓮華文 脚周辺に 沈文	"	そー6・7・8 II・II遺物集中 せー8 II 他
" 7 " 7	瑠璃釉	蓋	外径 8.2	灰白色 粗粒子	外面のみ施釉。	不明	"	さー5 II
" 8 " 8		小碗	9.4 — —	"	内外面に薄く施釉。	なし	"	さー14 II
" 9 " 9	翡翠箱	皿	13.0 — —	白色 微粒子	内外面に薄く施す。	"	"	しー11 II
" 10 " 10	タイ産陶器	合子の蓋	— — —	灰色 粗粒子 黒色粒子 が散見。	外面のみに施釉。	格子文 隠線	"	こー12 III
" 11 " 11		合子の身	9.0 — —	"	"	"	"	こー14 III

第12表 褐釉・無釉陶器観察一覧

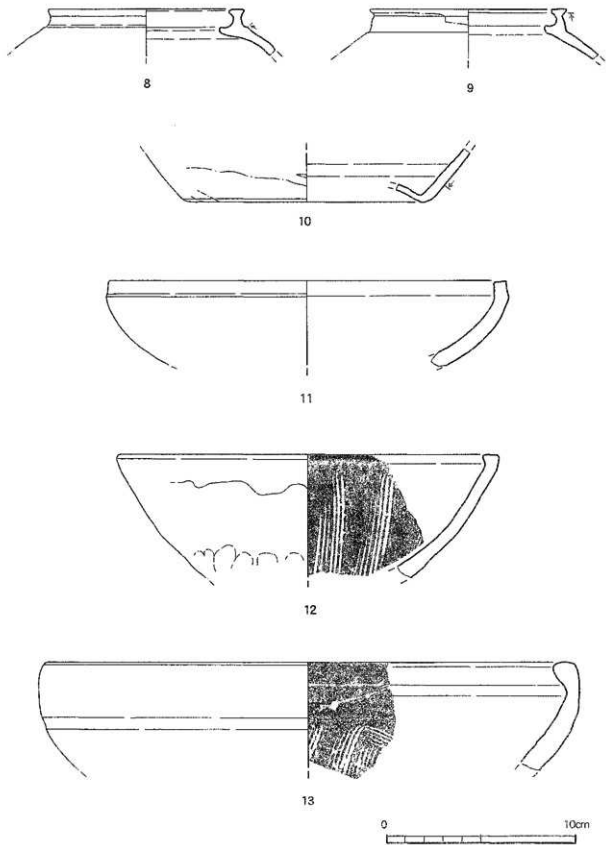
押図番号 図版番号	名称又は 仮称	口 径 器 高 高台径 (cm)	素 地	施 種・特徴	釉 色	出土地点
第27図 1 図版19の1	中型 壺	— — —	灰白色で微粒子。 — — — 混入物は殆ど見られない。	内外面に薄く施すが、口 唇部は露胎。	淡茶 褐色	こー12 II
" 2 " 2	"	9.8 — —	灰色で粗粒子。 — — — 砂粒・石英が僅かに観察 される。	口唇部内面より外面にか けて施釉。 口唇部は露胎。	黒褐 褐色	しー10 II 遺物集中
" 3 " 3	"	16.1 — —	灰白色で微粒子。 — — — 僅かに砂粒が観察される。	内外面に薄く施すが、口 唇部端部は露胎。	淡茶 褐色	けー14 II 試掘トレンチ
" 4 " 4	大型 壺	21.6 — —	灰白色で部分的に赤褐色 の粗粒子。 — — — 砂粒・赤色粒等が観察さ れる。	" 口唇部とその下位は露胎。	緑褐 褐色	さー10 IV
" 5 " 5	底 部	— — 27.0	橙褐色で粗粒子。 — — — 赤色粒・砂粒・黒色粒等 が散見。	外面は胴下半部まで内面 は施釉。 高台部は横位篋削り。 底面は未調整。	茶褐 褐色	けー13 III しー14 I
" 6 " 6	水 注	9.8 — —	灰橙褐色で粗粒子。 — — — 赤色粒・砂粒・黒色粒等 が散見。	外面は胴下半部まで薄く 施釉、釉が掛からない面 も見られる。 内面は受け部下位僅かに 帯状に巡らす。	淡茶 褐色	こー12 III・III a
" 7 " 7	底 部	— — 14.8	"	胴下部まで内面は露胎。 上記6の底部と思われる。	"	こー12・13 III・III a けー12 II a こー14 重攪乱
第28図 8 図版20の8	水 注	10.3 — —	赤褐色で粗粒子。 — — — 砂粒・赤色粒子を混入。	口唇部端部より施釉。 口唇部から内面は露胎。	"	こー9 II 攪乱
" 9 " 9	"	10.4 — —	淡橙褐色で粗粒子。 — — — "	"	"	こー12 III 小磯群内 III a
" 10 " 10	底 部	12.4 — —	赤褐色で粗粒子。 — — — 砂粒・赤色粒子を混入。	胴下半部まで内面は帯状 に施釉。 上げ底。 上記8の底部と思われる。	茶褐 褐色	こー11・12 II・III 攪混
" 11 " 11	鉢	21.0 — —	茶褐色で粗粒子。 — — — 砂粒を顕著に含み、石英 等が散見。	釉薬なし口部に僅かに段 を設ける。 内外面ヨコナデ。	暗茶 褐色	こー13 II 焼土 けー12 I 試掘トレンチ
" 12 " 12	摺 鉢	20.2 — —	黄白色で粗粒子。 — — — 砂粒と黒色粒子が散見で きる。	釉薬なし6本1組の摺目 で底面より摺り上げる。 外面ヨコナデとタテナデ。	黄白 色	こー11 III
" 13 " 13	"	28.0 — —	淡赤褐色で粗粒子。 — — — 砂粒を混入。	" 唇部に凹線を巡らす。 口唇部内面にも沈線を巡 らす。 5本1組の摺目を略格子 状に施す。	紫茶 褐色	けー12 II a さー11 III



第26図 (図版18) 色絵：皿 (1・2)、花生 (3・4)、碗 (5)、香炉 (6)
 瑠璃釉：蓋 (7)、碗 (8) 翡翠釉：皿 (9)
 タイ産陶器：蓋 (10)、台子 (11)



第27圖(圖版19) 褐釉陶器：壺(1~5)、水注(6・7)



第28図(図版20) 褐釉陶器：水注(8～10) 無釉陶器：鉢(11)、摺鉢(12・13)

8. 本土産陶磁器

第13表に示したとおり、破片で277点出土した。その中で、産地が同定できたのは肥前系と薩摩系である。以下、肥前系より略述する。

肥前系（第29・30図1～9）

碗・皿が確認された。1は筒型碗で2次焼成を受けたようである。外面はやや白っぽく内面は紫系色に変色が見られる。釉薬は高台脇より露胎で内面は施釉。唐津焼と思われる。2・3は荒磯文碗？、4～7は蛇の目凹台高台の碗・皿である。8・9は蛇の目軸八ギの青緑釉の皿である。9は外面無釉である。2点とも内野山窯と思われる。

薩摩系（第30図10～13、第32図）

蓋・水注・鍋・鉢・花生等が確認された。10は白薩摩の蓋で、掛かり部が長く瓶の蓋が想定された。11～13は白象眼を施した球状の水注。14～19は苗代川焼の鍋・鉢・花鉢である。16は図上復元を試みたもので浅鉢になるようである。18は逆「L」字状の口縁部を持つ端反りに立ち上げる花鉢である。底部外面には3足張り付けられ、中央に径1.5cmの1次孔が見られる。

9. 産地不明陶器（第33図）

20・21に示したものである。接合は困難であるが、同一個体と思われるものである。緑色に発色した灰釉を内外面に施し、口唇部のみは露胎。22に図上復元を試みた。口縁部は内傾し肩部には羽釜状に縁を巡らす。口径11.6cmを計る小振りなものである。用途としては、個人用の小釜・ろ過器等が考えられるが、今後検討したい。20がこ-12・14のⅡ・Ⅳ層より出土。21がこ-14のⅣ層より出土。

23・24は失透ざみ緑色釉を施した鉢と蓋の揃いものである。口唇部・内面、壘付けは露胎。蓋も内面のかかりまで露胎。鉢の口径12.3cm×器高5.8cm×高台径7cm、蓋は外径13.6cm×かかり10.8cmを計る。

23はこ-10、そ-7のⅡ層、24はこ-10・12、せ-9、そ-7・8のⅡ層よりそれぞれ出土。

10. 蓮華（第34図1～3）

第1表に示したとおり、破片6点の出土をみた。1・2は白磁製で、1は柄部が弧状にカーブしたものである。花型の押し文が先端部に見られる。2は葎筒底の口部で腰部脇より底面にかけて露胎。3は散り唐草文の蓮華で、外底面よりストレートに立ち上げるものである。外面にも文様が僅かに観察される。外底面内も施釉されるが、周辺は露胎。1がこ-11の階段部Ⅰ層、2は15ラインのⅠ層より出土。3はせ-8のⅡ層より出土。

11. 人形（第34図4～7）

第1表に示したとおり、破片で4点出土した。4・5とも白磁製のもので、4は僅かに襟などが観察される。5は襦物と思われ、着物と鹿？が見られる。4が重さ28.7gを計り、さ-12基壇内のⅢ層、5が重さ30.7gを計る。し-13のⅡ層とさ-10Ⅳ層出土のものが接合されたものである。

6・7は七福神の土製品と思われるものである。2点とも前後型台合せのもので、表面に赤色の顔料を施している。6が恵比寿様、7が大黒様と思われる。6はす-2のⅡa層、7はさ-10のⅡ層よりそれぞれ出土。

第13表 本土産陶磁器出土一覧

出土地点	器種											合計			
	肥前系			瀬戸系			備前系			器種不明					
	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器				
1層	1	1				4	3	1	1		2	6	7	1	27
2層		1	1			1	2	3	2	4	1	2	14	22	61
3層	1	1	2			1		4	1				10	8	29
4層				1										4	6
摩快馬入口	磁器	磁器												1	1
温徳内	磁器													3	4
石室	磁器							1						1	1
石室	磁器									1					1
1号石室遺構															
3号石室遺構A															
1層															
2層								1					1	1	1
3層															1
土層3															1
合計	2	3	3	1	2	6	11	5	5	1	5	34	45	11	136
			6												22
			9												125

出土地点	器種																			合計						
	肥前系			瀬戸系			備前系			北陸			器種不明			雑器										
	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	口土器								
1層	1	1				1	1	1							2	9	1	2		4	3	1	1	1		
2層		1	2				3	2	2			1	1	1	1	13	2	4		1	7	6		2	1	
3層			1	1					1																	
4層																										
摩快馬入口	磁器	磁器																								
温徳内	磁器																									
石室	磁器																									
石室	磁器														1											
1号石室遺構																										
3号石室遺構A						1																				
1層																										
2層																										
3層																										
土層3																										
合計	1	1	3	4	1	1	1	1	2	2	3	1	1	1	1	3	28	5	6		16	9	2	1	3	2

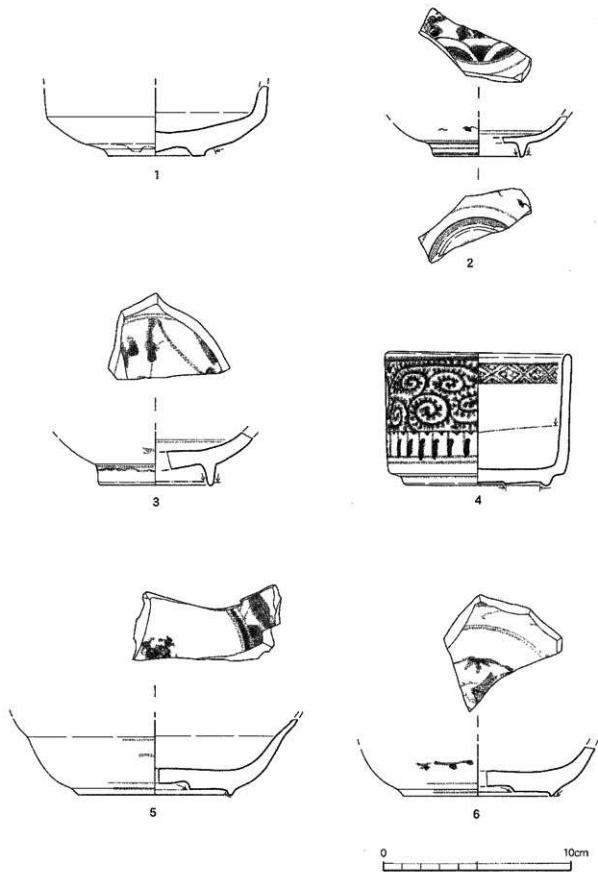
出土地点	器種										合計	
	肥前系					瀬戸系						
	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器	磁器	陶器	口土器	磁器	陶器		
1層		1						1		9	1	41
2層	2		1	1	1		1	15				72
3層					1			3	1			15
4層												3
摩快馬入口	磁器	磁器										1
温徳内	磁器											6
石室	磁器											1
石室	磁器											1
1号石室遺構												1
3号石室遺構A												1
1層												1
2層												0
3層												3
土層3												1
合計	2	1	2	1	1	1	3	26	1	1		141

第14表 本土産陶磁器観察一覧

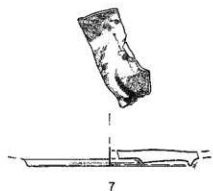
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口径 器高 高台径 (cm)	素地	施釉・特徴	文様	貫入	出土地点
第29図 1 図版21の1	筒型 甕?	— — 5.2	橙茶色で粗粒子。 砂粒が観察される。	高台縁から露胎。 外面は白釉を施すが、 2次焼成を受けている。 内面は淡紺色釉。	不明	なし	さ-10 Ⅲ・Ⅳ
" 2 " 2	甕	— — 4.7	灰白色で微粒子。	畳付け露胎。	荒磯文? 圏線	"	こ-13 Ⅲ a
" 3 " 3	"	— — 5.8	"	"	"	あり	せ-8 Ⅰ
" 4 " 4	筒型 甕	10.0 7.1 7.6	"	蛇ノ目凹高台。 内面、胴下半部露胎。	蛸唐草文 略寿字文 四方障文	緑 褐色	す-10 Ⅰ号右組 遺構
" 5 " 5	皿	— — 8.2	"	"	唐草文? 不明 5弁花文	なし	こ-11 Ⅲ b
" 6 " 6	"	— — 7.9	"	"	唐草文? 松梅文圏線	"	こ-11 Ⅲ b
第30図 7 図版22の7	"	— — 8.6	"	"	山水文	"	し-10 Ⅱ
" 8 " 8	"	12.3 3.4 4.5	"	銅緑釉を施釉。 蛇ノ目八平。 高台縁から露胎。	なし	"	こ-14 表探
" 9 " 9	"	13.0 — —	"	外面は露胎。	"	"	し-14 Ⅱ
" 10 " 10	蓋	外径 6.0 2.9 内径 4.0	淡灰色で微粒子。	外面のみ施釉。 白磁摩系。	"	あり	こ-10 Ⅲ
" 11 " 11	"	外径 6.0 — —	淡灰白色と暗茶褐色。 微粒子。	外面に失透の鉛釉を施 釉。 薩摩系	白象服の 菊花文 圏線	なし	す-9 Ⅱ横乱
" 12 " 12	水 注	— — —	暗茶褐色で微粒子。	内面は黄茶褐色釉を施 釉。 薩摩系	" 桜文 圏線 縦位沈線	"	す-11 Ⅱ焼土 せ-11 3号右組△ 他
" 13 " 13	"	5.6 — —	茶褐色で微粒子。	光沢の鉛釉を内外面に 施釉。	白象服の 変形菊花文	"	せ-6 Ⅲ せ-12 Ⅱ 他
第31図 14 図版23の14	鯛 の蓋	17.7 — —	茶褐色で粗粒子。 砂粒が顕著。	褐釉を腰部外面より内 面の縁へ施釉。 薩摩系 苗代川焼	なし	"	さ-14 Ⅱ
" 15 " 15	" の身	19.2 — —	"	内外面に褐釉を施すが 蓋受け部は露胎。 薩摩系 苗代川焼	"	"	さ-11 階段部横乱

第14表 本土陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 径 器 高 高 台径 (cm)	素 地	施釉・特徴	文 様	貫 入	出土地点
第31図 16 図版23の16	浅鉢	31.4 — —	灰色で微粒子。 灰・白の素地がスジ状 に観察される。 砂粒が混入。	内外面に褐釉を施すが 口唇部は露胎積み痕が 2ヶ観察される。 薩摩系 苗代川焼	なし	なし	さ-9 Ⅱa さ-10 Ⅱ・Ⅳ
" 17 " 17	鉢	22.8 — —	灰白色で粗粒子。 シラスを混入?	鉛釉を施釉するが、口 唇部は露胎。 薩摩系 苗代川焼	不明	"	さ-9 Ⅱ
第32図 18 図版24の18	花鉢	16.4 17.9 —	茶褐色で粗粒子。 砂粒が観察される。	口唇部内面より外面に 褐釉を施釉。 底面と足部は露胎。 薩摩系	なし	"	せ-8 Ⅱ遺物集中 さ-10・11 Ⅱ 他
" 19 " 19	大鉢	34.0 — —	"	内外面に施釉。 薩摩系 苗代川焼	"	"	そ-6 Ⅲ遺物集中 せ-11 Ⅱa焼土 さ-9 Ⅲ 他



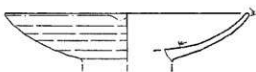
第29圖(圖版21) 本土産陶磁器(肥前系):碗(1~4)、皿(5・6)



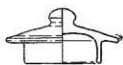
7



8



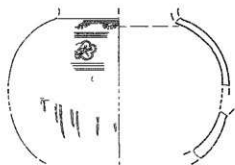
9



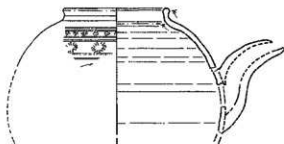
10



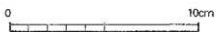
11



12



13



第30図(図版22) 本土産陶磁器(肥前系):皿(7~9)
(薩摩系):蓋(10・11)、水注(12・13)



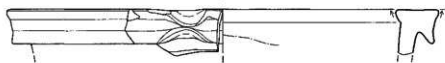
14



15



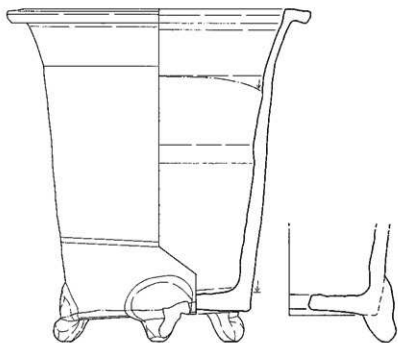
16



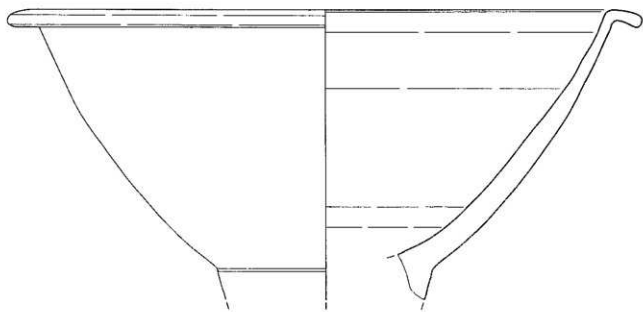
17



第 31 图 (图版 23) 本土産陶磁器 (薩摩系) : 蓋 (14)、鍋 (15)、鉢 (16・17)



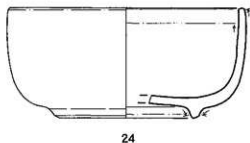
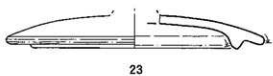
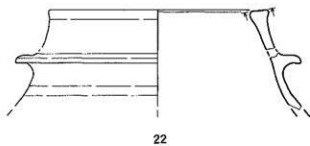
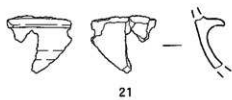
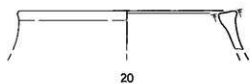
18



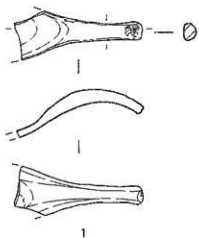
19



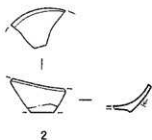
第32図 (図版24) 本土産陶磁器 (薩摩系) : 花鉢 (18)、鉢 (19)



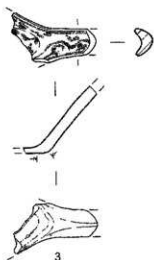
第 33 図 (図版 25) 産地不明陶器：不明 (20・21)、20・21 の想定図 (22)、蓋 (23)、鉢 (24)



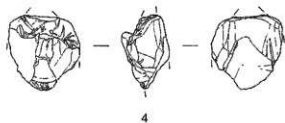
1



2



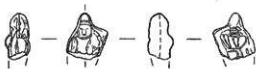
3



4



5



6



7



第34图(图版26) 莲华(1~3)、人形(4~7)

12. 青銅製品

本地区より得られた青銅製品は、約65点であった。その殆どは用途不明品であったが、幾つかは用途がわかるものもあった。ここでは用途不明品も含めて報告する。掲載した資料の分量・出土地点・層位等は第15表に示した。以下、歡喜天より記述する。

歡喜天 (第35図)

像頭人身の立像で、男女二天のものである。互いに右肩に顔を載せている。天蓋のある女神の鼻が少し欠けているが、ほぼ完形品である。表面は青錆で覆われているが、部分的に地金が見られ金色を発する。また、鉄錆も見られ、他の遺物との接触で付着したものと思われた。蓮華座には足裏からの支柱で4ヶ所で留められている。蓮華座の裏には、紙片の貼り付け痕が見られ「・・・拾拾・・・」と方形の印鑑？痕が観察できる。元々、貼り付けられていたものと思われた。高さ16.4cm、重量900g。本品は工事中に発見された採集品である。

仏具関係 (第36図1～15)

1に示したものは、端部を破損しているが、ほぼ全形を知り得る独結杵である。把部中央は4面鬼目で両サイドに8面蓮弁文を配し2条の凸帯をそれぞれ巡らす。

2は銅製碗で、口縁部で一部破損変形しているが、全形を知り得る資料である。3は鐘の芯で、ややバチ形の形状を呈し、端部につり下げるための孔が見られる。4・5は香炉の両側につく、像頭形の把手である。底面に孔が見られる。同型のものである。6・7も同型の燭台で、内部は空洞。8は燭台の皿を扁平したもので、2次使用品？。9・10は亞字形の花瓶で、内部は空洞に成っている。頸・脚台部には2条の凸帯を巡らす。9は脚台部の破損品である。11～13は香炉・机の脚部と思われるもので、11のように疵状の張り出しに凸部を設けるものと、12・13のように頂部に凸部を設ける2種見られた。

14・15は大変薄く表面に沈線が施している。火焰宝珠を模したものと思われる。天蓋等の環珞？。

飾り金具関係 (第37図16～25)

16は上下対象の薄いもので、全体的に蝶形に見える。表裏面に装飾は見られず、中央に方形の孔が施されている。留め具のあて具？。17～20は調度品の飾り金具と思われ、17は広角のV字状のもので、左右・中央の孔が見られ左孔に留め具が装着されている。表面に唐草文と魚々子文等が描かれている。裏面は無文。18・19は17に比べて薄いのが、類似の端部片と思われる。20はかなり薄いもので、粗孔が穿たれている。表面には魚々子文と沈線によって文様が描かれている。6・7は単筒・櫃などの把手で、中央部へ暫時厚くなる。端部は滑り留め状に丸く成形。23・24も櫃等の蝶番で、ハート形と留め具を装着する孔が4ヶ施されている。23は半欠品であるが、表面に魚々子文と沈線で文様が見られる。24は両面とも無文。25は大型のもので透かし彫りと小穴を巡らす。中央下位には宝珠の凸起が裏面から留められている。

鍵（第37図26）

頭部は扁平で、円柱部は方形の空洞を呈する。柱時計等の鍵が想定されるが、今後、類例資料の追加を待ち、さらに検討を加えたい。

留め具関係（第38図27～31）

27・28は頭部が丸笠で、断面が方形と円形のものである。29も丸笠で芯部下半部で二股に分かれる。30は割ピン。31は花型で中央に小孔が見られる。飾り用の留め具と思われる。

カンザシ（第38図32～38）

32・33とも花型のもので、32は頭部より外れたものである。33は芯部に土台の花型が装着されたもので、32の製品などが被る。34～36は匙型のもので、34・35の頭部は円形で肩部に6面体の断面を呈する。35は頭部半欠形で先端部が厚手なものである。37は頭部が5面体で、肩部を6面体に変化させたものである。37・38は頭部が破損したもので、頭部6面体、肩部で捻じり体部が4面体のものである。

キセル（第38図39～41）

39・40は雁首、40は銀の塗装が僅かに表面で観察される。41は火皿を破損したもので、吸い口まで一体型のものである。表面に僅かに金の塗装が観察される。

刀子（第38図42）

刀身部は鉄製で錆が著しい。鞘部は薄い青銅製の板を2枚用い、両サイドを目釘で留めたものである。現状では、片方にしか刀身部は見られないが、もう一方の端部に鉄片が観察できる。両サイドに刀身が想定された。今後、レントゲン撮影等で改めて確認したい。

銅鏡（第38図43）

三角縁無文鏡の破片。縁に浅い段を設け、三角縁を作りだす。現況から推すると略方形鏡が想定された。

不明品（第38図44～46）

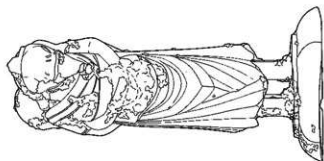
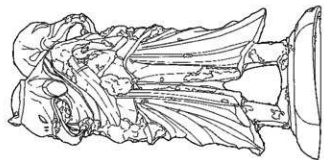
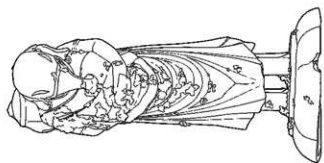
44は円形に細い弓状の短棒を装着したもので、引き出し等の把手か？。45は扁平なもので、円形・コの字の孔が見られる。46は細い円柱のもの。45・46の用途は不明。

第15表 青銅製品観察一覧

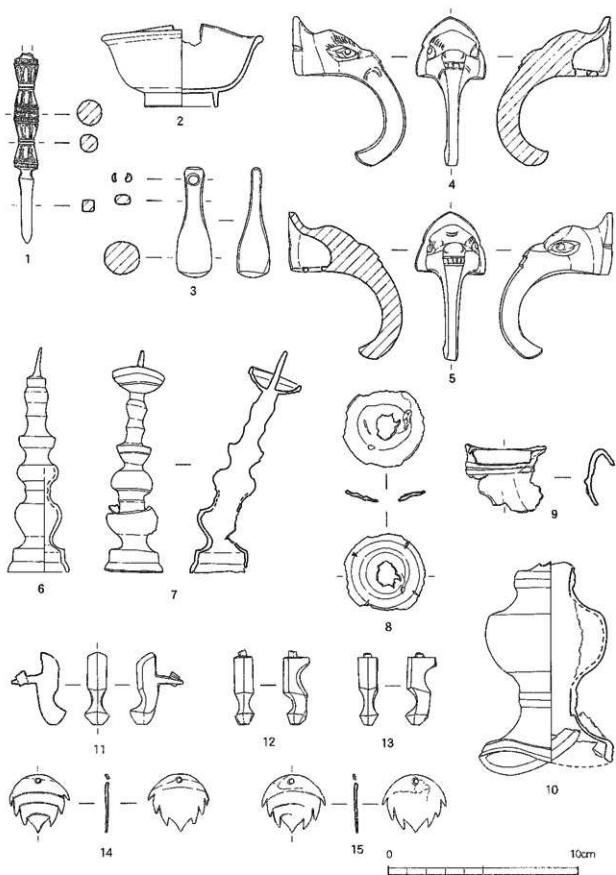
挿図番号 図版番号	種 類	法 量 (cmg)	出土地点
第36図 1 図版28の1	独結杵	残存長:10.0 把部長:5.8 把部幅:1.3 先端部長:4.0 先端部幅:0.6 重量:53.9	す-11 I
" 2 " 2	碗	口径(推定):8.0 器高(推定):4.0 高台径:3.9 重量:148.2	せ-12 II
" 3 " 3	鐘の芯	全長:5.8 孔径:0.5 重量:53.9	す-12 II
" 4 " 4	把手	重量:141.6	し-8 II
" 5 " 5	"	重量:132.1	こ-14 I
" 6 " 6	燭台	器高:11.9 底径(推定):3.2 重量:56.2	す-8 I
" 7 " 7	"	重量:55.3	す-11 II 焼土
" 8 " 8	"	径(推定):4.3 重量:7.4	し-8 II
" 9 " 9	花瓶	重量:20.1	す-10 II 遺物集中
" 10 " 10	"	重量:252.5	そ-6 II 遺物集中
" 11 " 11	脚	全長:3.8 最大幅:1.3 重量:23.8	す-10 II 遺物集中
" 12 " 12	"	全長:4.0 最大幅:1.0 重量:23.5	す-11 II 焼土
" 13 " 13	"	全長:3.8 最大幅:1.0 重量:20.6	せ-8 II
" 14 " 14	天蓋の環路?	全長:3.0 最大幅:3.2 孔径:0.3 厚み:0.06~0.08 重量:3.2	せ-8 溜井上部
" 15 " 15	"	全長:3.0 最大幅:3.3 孔径:0.3 厚み:0.06~0.09 重量:3.4	せ-8 II 遺物集中
第37図 16 図版29の16	飾り金具	3.4×3.2 孔径:3×3 厚み:0.06 重量:2.4	せ-12 Ⅲ地山直上
" 17 " 17	"	孔径:0.2 厚み:0.12 重量:20.1	せ-6 Ⅲ
" 18 " 18	"	幅:1.0 孔径:0.2 厚み:0.06 重量:2.4	こ-12 II
" 19 " 19	"	幅:1.2 孔径:0.2 厚み:0.05 重量:1.6	す-11 基壇内II a
" 20 " 20	"	孔径:0.2 厚み:0.03 重量:0.8	せ-6 II
" 21 " 21	把手	把手中央部径:0.6 重量:18.4	せ-9 石敷西側II
" 22 " 22	"	把手中央部径:0.6 重量:19.7	せ-6 Ⅲ
" 23 " 23	蟻糸	孔径:0.3 重量:17.4	せ-8 溜井上部
" 24 " 24	"	孔径:0.2 重量:44.9	す-10 II 遺物集中
" 25 " 25	"	重量:42.6	け-12 Ⅲ

第15表 青銅製品観察一覧

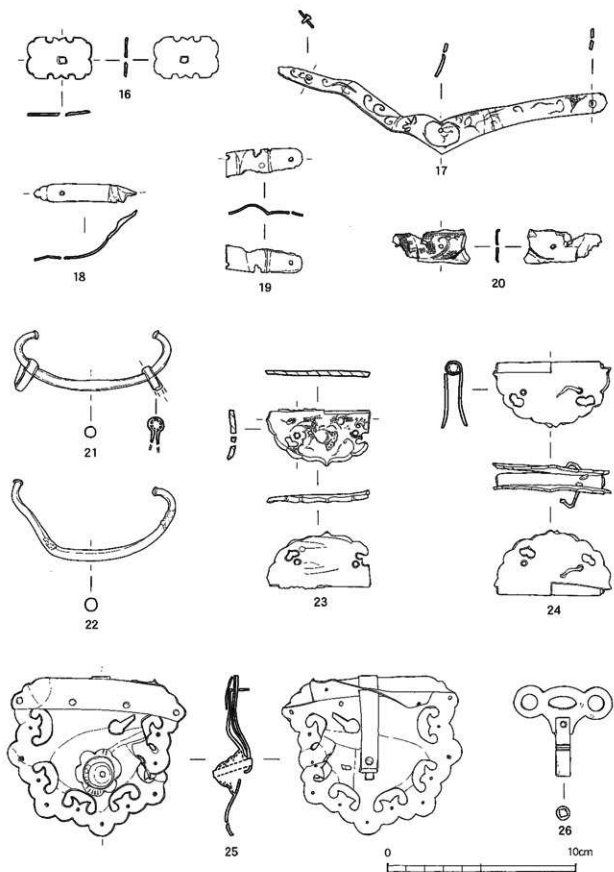
拝図番号 図版番号	種 類	法 量 (cm.g)	出土地点
第37図 26 図版29の26	鏡	全長:4.7 頭部厚み:1.4 円柱部径:0.8 重量:14.4	採集
第38図 27 図版30の27	留め具	全長:3.0 頭部径:1.0 重量:1.8	せ-6 IV上部
# 28 # 28	#	全長(推定):2.0 頭部径:0.4 重量:0.3	す-10 II遺物集中
# 29 # 29	#	頭部径:0.8 重量:2.5	し-10 II a
# 30 # 30	#	全長:2.1 重量:0.9	こ-14 III
# 31 # 31	#	孔径:0.2 重量:0.9	こ-11 III焼土
# 32 # 32	カンザシ	重量:1.3	す-11 基壇内II a
# 33 # 33	#	重量:2.2	さ-10 III小磯群内
# 34 # 34	#	全長:13.0 匙部幅:0.5 重量:7.5	さ-11 II
# 35 # 35	#	重量:4.6	せ-11 II a焼土
# 36 # 36	#	全長(推定):9.6 匙部:0.9 重量:7.3	け-13 IV
# 37 # 37	#	残存長(推定):8.7 重量:7.2	せ-8 溜井下部
# 38 # 38	#	残存長:9.0 重量:6.7	す-11 基壇内II a
# 39 # 39	キセル	全長(隔首):2.4 火皿径:0.9 重量:2.1	こ-13 II焼土
# 40 # 40	#	全長(雁首):5.3 火皿径:1.0 接続部径:1.0 重量:9.7	せ-8 II遺物集中
# 41 # 41	#	全長(推定):11.8 重量:10.4	す-10 1号石組遺構
# 42 # 42	刀子	残存長:10.6 重量:19.2	採集
# 43 # 43	銅鏡	重量:51.3	せ-8 II
# 44 # 44	不明品	重量:1.4	せ-9 石敷西側II
# 45 # 45	#	重量:0.9	す-8 II
# 46 # 46	#	重量:1.6	せ-11 II a焼土



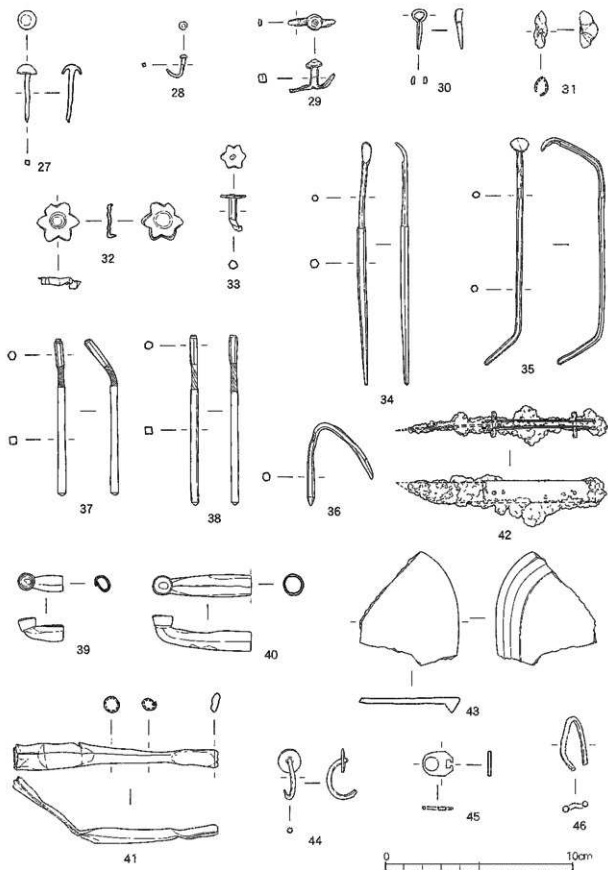
第35圖 (國版 27) 歡喜天



第 36 图 (图版 28) 青銅製品：独鈷杵 (1)、碗 (2)、鎗の芯 (3)、把手 (4・5)、
 獨台 (6~8)、花瓶 (9・10)、脚 (11~13)、瓔珞? (14・15)



第37図 (図版29) 青銅製品：飾り金具 (16～20)、把手 (21・22)、螺番 (23～25)、鍵 (26)



第38図 (図版30) 青銅製品：留め具 (27～31)、カンザシ (32～38)、キセル (39～41)、
 刀子 (42)、銅劍 (43)、不明品 (44～46)

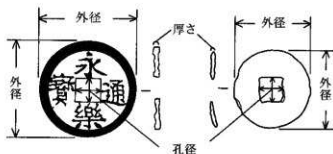
13. 銭貨

銭貨は総数 74 点が得られた。その内訳は有文銭が 42 点、模鑄銭が 5 点、雁首銭が 2 点、無文銭が 25 点である。その中で最も古いものでは宋代の天聖通寶 (1023 年) や淳熙元寶 (1174 年) が、新しいものでは江戸の寛永通寶 (1636 年)、清代の乾隆通寶 (1736 年) が見られた。層別にはⅡ層、Ⅲ層から主に出土しており、出土状況としてはⅡ層から寛永通寶と乾隆通寶が、Ⅲ層から無文銭が多く見られる傾向にある。

ここでは状態が良いもの、または特徴的なものから図版に掲載した。

なお銭貨の計測部位は右の通りであり、外径・孔径の計測値は平均をとった。

個々の詳細については第 17・18 表に示した。



銭貨計測部位

今回出土銭の 2 / 3 を占めたのが寛永通寶と無文銭である。

寛永通寶は 26 点見られ、一文銭、鉄銭、四文銭と様々なタイプが確認された。一般的に一文銭は古寛永・新寛永に大別されるが、鑄造時期によっても 1～3 期に細分することができる。今回得られたものは 1 期 (1636～1659 年) の古寛永が 3 点、2 期 (1668 年～1683 年) の文銭が 2 点、3 期 (1697 年以降) の新寛永が 20 点確認された。また、四文銭 (1768 年以降) は裏面に 11 波紋のあるものが 1 点得られた。

無文銭は 25 点見られ、形や大きさに様々なタイプが確認された。無文銭の分類は孔の形状によって方形、隅丸方形、円形の 3 種に分けられる。下記の通りに分類を行った。

I 類 孔の形が方形をしているもの。今回このタイプが多く検出された。外径や孔径の大きさにも幅があるため、ここでは外径を基準として 1～5 に、孔径の外径に対する割合から a～c に細分した。

外径

- 1 : 2.2 cm 台 - 渡来銭とほぼ同じタイプ
- 2 : 2.0 cm 台 - 今回数が最も多いタイプ
- 3 : 1.7 cm 台
- 4 : 1.5 cm 台
- 5 : 1.2 cm 以下のもの

孔径の外径に対する割合 (孔径 / 外径)

- a : 30% 台 - 渡来銭とほぼ同じ割合
- b : 40% 台 - 渡来銭よりやや大きい
- c : 50% 以上 - 孔径の割合が大きい

Ⅱ類 孔の形が隅丸方形のもの。今回は外形が 1.46 cm、孔径が 0.74～0.85 cm 程度のもの 1 点のみの出土である。セキの跡が残っている (註)。

Ⅲ類 孔の形が円形をしているもの。外径も 1 cm 以内と小さく、いわゆる輪銭と呼ばれるものである。孔と外輪が接近しており、リングの幅が細い。

無文銭で最も多かったタイプは I-2-a で、外径が 2.03 cm 前後、孔径が 0.65 cm 前後であり、これら

は堺出土の無文銭鋳型（16世紀中ごろ～後半）の大きさに該当する。

その他にも渡來銭や無文銭への過程とみられる模鑄銭（背は平らであり、面は摩滅が激しく僅かに文字の痕跡が伺えるもの）、火皿を潰して作ったといわれる雁首銭も数点検出された。

本遺跡の主体銭貨はおおよそ17世紀以降の寛永通寶及び無文銭と考えられる。

注：セキ(堰)……湯道から分岐して銭本体に湯が流れ込む部分

バリ………鑄型の合わせ目に溶銅が流れ込み、湯道や製品の周囲に薄く板状にはみ出した物

参考文献：永井久美男編『中世の出土銭貨』兵庫県埋蔵銭貨調査会 1994年

『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭貨調査会 1996年

丁福保 他『歴代古銭圖説』陝西旅游出版社 1990年

是光吉基『国内出土のいわゆる「無文銭」について』

『考古論集－潮見浩先生退官記念論集－』潮見浩先生退官記念事業会 1993年

嶋谷和彦『中世の模鑄銭生産－堺出土の銭鋳型を中心に－』『考古学ジャーナル』№.372

ニューサイエンス社 1994年

第16表 銭貨出土一覧

□判読不明 ○欠損

層序	銭種			天 〇〇 〇〇	淳 〇〇 〇〇	天 〇〇 〇〇	〇 豊 通 〇	〇 〇 通 〇	〇 〇 〇 〇	寛永通寶				乾 隆 通 寶	判 読 不 能	雁 首 銭	模 鑄 銭	無文銭			計
	古	文	新							四文	I	II	III								
I層													1		1	1	1				4
II層	1	1			1	3	2	2	13	1	2			1	1	1	9	1	1		39
III層			1	1	3	1	1		5				1			2	10			2	27
IV層																1	1				3
2号石組み試掘下													1								1
計	1	1	1	1	4	4			3	2	20	1	3	1	2	5	21	1	3		74
											26										

第17表 銭貨観察一覧(1)

□判読不明 ○欠損 ()内は推定法量

押印番号 図版番号	銭貨名	時代 初鋳年	書体	法量 (cm・g)				背文	残存 率	状態・特徴	出土地点	計測 番号
				外径	孔径	厚さ	重量					
第39図 図版31の1	淳〇〇寶 (折二銭)	南宋 1174年	真書	—	—	0.13	2.50	十	1/2	淳熙元寶と推定される。 銭文はやや磨耗している。	さー15 II層	5
" 2 "	天〇〇寶	北宋 1023年	篆書	—	—	0.10	1.03		1/2	天聖元寶と推定される。 磨食し、背の輪郭弱く、 銭文も磨耗している。	せー19 II層	64
	天〇〇〇		真書	—	—	0.16	2.70		1/2	天禧通寶？輪郭、銭文と も磨耗が激しい。	さー12 III層	2
	〇豊通〇		行書	—	—	0.13	1.10		1/3	元豊通寶？磨食が激し く、銭文も磨耗し読みづ らい。	こー13 Ⅲa層	4

第17表 銭貨観察一覧(1)

□判読不明 ○欠損 ()内は推定法最

押図番号 図版番号	銭貨名	時代 初铸年	書体	法量 (cm・g)				背文	残存 率	状態・特徴	出土地点	計測 番号
				外径	孔径	厚さ	重量					
	○○通○		楷書	—	—	0.11	0.60		1/4	背の輪郭弱い。書体は細く、「マ」頭の通である。	こー12 Ⅲ a層	9
	○○通○		楷書	—	—	0.08	0.70		1/3	背の輪郭はほとんどない。書体は細く、「マ」頭の通である。	こー12 Ⅱ層焼土	10
	○○通○		楷書	—	0.60	0.12	0.90		1/4	輪郭、銭文とも明瞭であり、書体は太い。「コ」頭の通である。	さー10 Ⅲ層小隴 群内	72
	○○通○		楷書	—	—	0.15	0.80		1/5	錆び膨れが激しい。銭文もかなり読みづらい。	しー10 Ⅲ層試掘 トレンチ	35
	○○○寛		楷書	—	—	0.09	0.40		1/5	背の輪郭弱い。寛永通寶か?	しー9 Ⅱ層	22
	○○○寛		楷書	—	—	0.14	1.70		1/4	輪郭は明瞭。銭文はやや磨耗している。	しー10 Ⅲ層試掘 トレンチ	73
	○○○寛		楷書	—	—	0.07	0.30		1/5	腐食が激しく、ぼろぼろ。銭文は僅かに読み取れる程度である。	さー12 Ⅱ層焼土	36
	○○○寛		楷書	—	—	0.11	0.54		1/4	背の輪郭弱く、銭文もやや磨耗している。	せー10 Ⅱ層	70
第39図 図版31の3	寛永通寶 (古)	江戸 1636年	楷書	2.50	0.58	0.11	3.00		ほぼ 完形	一部欠けている。輪郭、銭文は明瞭。	さー12 Ⅱ層	14
" 4 " 4	寛○通寶 (古)	"	楷書	2.50	0.58	0.13	2.00		1/2	輪郭、銭文共に明瞭。	さー10 Ⅲ層	18
" 4 " 4	寛永通寶 (古)	"	楷書	2.44	0.60	1.13	2.70		5/6	輪郭は明瞭。銭文はやや磨耗している。	せー6 Ⅱ層	65
" 5 " 5	寛永通寶 (文)	江戸 1668年	楷書	2.58	0.60	0.12	1.80	文	2/3	輪郭、銭文共に明瞭。やや腐食。	さー15 Ⅱ層	25
" 5 " 5	寛○○ (文)	"	楷書	—	—	0.12	0.80	文	1/5	背の輪郭及び文字は磨耗し弱い。面は良好。	せー8 Ⅱ層遺物 集中	26
" 6 " 6	寛永通寶 (新)	江戸 1697年	楷書	2.27	0.70	0.10	2.60		完形	輪郭は明瞭。銭文はやや磨耗している。	こー11 Ⅲ層	11
" 7 " 7	寛永通寶 (新)	"	楷書	2.30	0.58	0.10	2.50		完形	磨耗している。赤錆が付着している。	しー9 Ⅱ a層	12
" 7 " 7	寛永○○ (新)	"	楷書	2.33	0.60	0.10	1.40		1/2	輪郭は弱く、銭文も磨耗している。緑の錆びが付着。	せー10 2号右組 試掘下	20
" 7 " 7	寛○通○ (新)	"	楷書	—	—	0.10	0.70		1/5	背の輪郭が弱く、銭文はやや磨耗。	すー11 基壇内 Ⅱ a層	23
" 8 " 8	寛永通寶 (新)	"	楷書	2.45	0.59	0.11	2.60		完形	磨耗している。背の輪郭やや弱い。	さー13 基壇内 Ⅲ層	13
" 8 " 8	寛永通寶 (新)	"	楷書	2.30	0.65	0.10	2.46		完形	腐食が激しく、銭文が読みづらい。背の輪郭も弱い。	こー11 Ⅱ層	67
" 9 " 9	寛永通寶 (新)	"	楷書	2.30	0.63	0.08	1.90		ほぼ 完形	輪郭、銭文とも明瞭。通が欠けている。	すー11 基壇内 Ⅱ a層	15

第17表 銭貨観察一覧(1)

□判読不明 ○欠損 ()内は推定質量

挿図番号 図版番号	銭貨名	時代 初鋳年	書体	質量 (cm・g)				背文	残存 率	状態・特徴	出土地点	計測 番号
				外径	孔径	厚さ	重量					
	寛永通寶 (新)	江戸 1697年	楷書	2.32	0.64	0.10	2.38		完形	背の輪郭がやや弱く、銭文も一部磨耗している。	せー9 Ⅱ層	66
第39図 10 図版31の10	寛〇〇寶 (新)	"	楷書	2.27	(0.68)	0.13	1.09		1/2	腐食し背の輪郭がない。磁気反応がある。	すー13 Ⅱ層	69
	寛〇〇寶 (新)	"	楷書	—	—	0.08	0.70		1/4	背は輪郭がほとんどないくらい磨耗。非常に薄い。	さー10 Ⅱa層 遺物 成土	37
	寛〇〇寶 (新)	"	楷書	—	(0.5)	0.10	1.10	ある	1/2	銭文は磨耗、外輪の幅が細い。背文はあるが読み取れない。	すー10 Ⅱ層 遺物 集中	7
	〇永通〇 (新)	"	楷書	—	—	0.08	1.00		1/2	磨耗している。背の輪郭がやや弱い。薄い。	せー6 Ⅳ層上部	16
	〇永〇寶 (新)	"	楷書	—	—	0.09	0.60		1/2	輪郭、銭文とも明瞭。	けー11 Ⅱ層	21
	〇永〇寶 (新)	"	楷書	—	—	0.10	1.00		1/2	背の輪郭がやや弱く、銭文も一部磨耗している。	せー11 Ⅱ層	68
	〇永通〇 (新)	"	楷書	—	—	0.12	1.30		1/4	輪郭明瞭。	こー11 Ⅲb層	28
	〇永通〇 (新)	"	楷書	—	0.60	0.10	1.20		1/2	やや磁気反応あり。背の輪郭弱く、赤錆付着。	さー12 Ⅱ層 焼土	74
	〇永通寶 (新)	"	楷書	2.37	0.65	0.07	1.40		3/4	輪郭、銭文とも濃しく磨耗。文字は僅かに読み取れる程度である。	さー11 Ⅱ層	33
	〇永〇〇 (新)	"	楷書	—	0.62	0.10	0.60		1/5	銭文明瞭。背の外輪がやや弱い。	しー10 Ⅲ層 試掘 トレンチ	24
	〇永〇〇 (新)	"	楷書	—	—	0.10	0.50		1/5	緑の錆び膨れが見られる。銭文はやや磨耗。	すー11 基礎内Ⅱ a層	27
	〇永通〇 (新)	江戸 1739年	楷書	—	—	0.15	1.40		1/2	鉄銭。前面に赤錆の錆び膨れが見られる。	こー11 Ⅲ層	1
第39図 11 図版31の11	寛〇〇寶 (四文)	江戸 1768年	楷書	—	0.62	0.10	1.80	11波	1/2	赤味をおびている。やや銭文磨耗。	すー8Ⅱ 層	19
" 12	乾隆通寶	清 1736年	隸書	1.78	0.55	0.05	0.60	満州 文字	ほぼ 完形	輪郭、銭文ともに磨耗が激しく、非常に薄い。外輪もやや欠けている。	こー14 Ⅰ層	17
" 13	乾〇通寶	"	隸書	2.19	0.50	0.06	0.80	満州 文字	1/2	やや腐食、銭文磨耗。	そー7 Ⅱ層 遺物 集中	8
" 13	乾〇〇寶	"	隸書	—	—	0.08	0.60	満州 文字	1/2	磨耗し、輪郭・銭文とも弱い。	こー12 3 Ⅱ層 焼土	3
	判読不能	不明	不明	2.25	0.50	0.14	1.80		3/4	白緑色の錆び膨れが激しく、文字が読み取れない。	こー11 Ⅲ層	6
" 14 " 14	雁首銭	不明	なし	2.05	0.40	0.14	2.00		完形	火皿の縁や下部の補強帯部が潰され、銭貨の縁や郭の雰囲気を作っている。	こー14 Ⅰ層	57
第40図 1 図版32の1	雁首銭	"	なし	2.05	0.50	0.08	1.40		完形	完全に平らではなく、内側に湾曲している。	そー6 Ⅱ層 遺物 集中 擾乱	58

第17表 銭貨観察一覧(1)

○判読不明 ○欠損 ()内は推定法量

押図番号 図版番号	銭貨名	時代 初铸年	書体	法量 (cm・g)				背文	残存 率	状態・特徴	出土地点	計測 番号
				外径	孔径	厚さ	重量					
第40図 2 図版32の2	模铸銭	不明	不明	2.30	0.55	0.15	2.90		完形	背が平らである。備かに文字の形跡がある。緑の錆びが付着。	こー10 IV層	31
	模铸銭	"	不明	2.30	0.64	0.80	2.10		完形	背が平らである。備かに文字の形跡がある。黄緑の錆びが付着。	こー13 Ⅲa層	29
	模铸銭	"	不明	2.35	0.64	0.13	2.40		完形	背が平らである。備かに文字の形跡がある。腐食が激しく剥離している。	こー14 I層	30
	模铸銭	"	不明	2.30	0.65	0.12	1.60		3/4	背が平らである。備かに文字の形跡はある。	こー14 Ⅲ層	34
	模铸銭	"	不明	2.20	0.61	0.09	1.37		5/6	背が平らである。備かに文字の形跡はある。	さー15 II層	71

第18表 銭貨観察一覧(2)

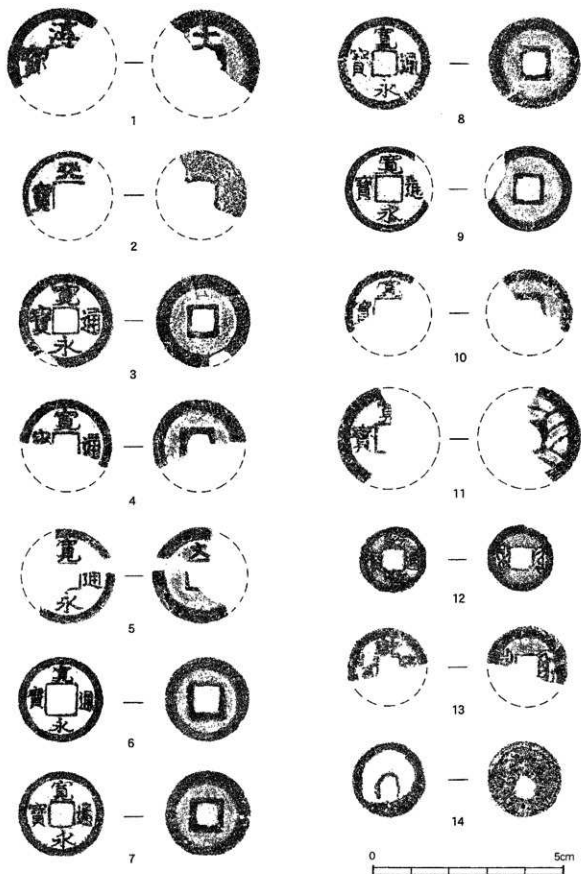
()内は推定法量

押図番号 図版番号	銭貨名	法量 (cm・g)				残存 率	分類	状態・特徴	出土地点	計測 番号
		外径	孔径	厚さ	重量					
第40図 3 図版32の3	無文銭	2.27	(0.7)	0.08	0.80	1/2	I-1-a	模铸銭と外径は大差なく、孔径は少し大きい。表面は赤味をおびた錆び。	さー13 IV層	44
" 4	無文銭	2.08	0.64	0.10	1.40	ほぼ 完形	I-2-a	表面は緑色の錆びで覆われている。厚さもあり、しっかりしている。	こー14 Ⅲ層	32
" 5	無文銭	2.05	0.67	0.10	1.20	ほぼ 完形	I-2-a	表面は緑の錆びで覆われている。腐食しており脆い。	しー13 II層	38
" 6	無文銭	2.00	0.63	0.10	1.10	ほぼ 完形	I-2-a	表面は黄緑色の錆び。少し折れ曲がっている。セキの跡がみられる。	さー13 II層	39
" 7	無文銭	-	0.65	0.09	0.60	1/2	I-2-a	表面は緑の錆び。質は硬くしっかりしている。	こー14 Ⅲ層	41
	無文銭	2.07	-	0.09	1.30	完形	I-2-a	表面は緑の錆びと赤味をおびた錆び。くの字状に折れ曲がっている。腐食しており脆い。	こー14 Ⅲ層	40
	無文銭	-	-	0.07	0.30	1/3	I-2-a	腐食しており、ところどころ欠けている。その断面は青白い錆び。	けー12 Ⅲ層	42
	無文銭	(2.05)	0.65	0.06	0.50	1/2	I-2-a	表面は黄緑色の錆び。薄い。	こー14 Ⅲ層	45
" 8	無文銭	2.06	0.75	0.10	0.70	ほぼ 完形	I-2-a	表面は黄緑色の錆び。腐食しており脆い。	しー11 基壇内 II a層	43
" 9	無文銭	-	-	0.08	0.30	1/4	I-2-a ?	残存部が少なく分類難しい。推定される径からI-2-aと考えられる。	せー10 II層	63
" 9	無文銭	-	-	0.08	0.20	1/2	I-3-c	表面は緑の錆び。腐食している。推定される孔径は0.8cmくらいと大きめである。	こー14 Ⅲ層	51
	無文銭	1.88	0.76	0.07	0.56	完形	I-3-b	表面は緑の錆び。腐食しており、脆くなっている。	さー15 II層	62

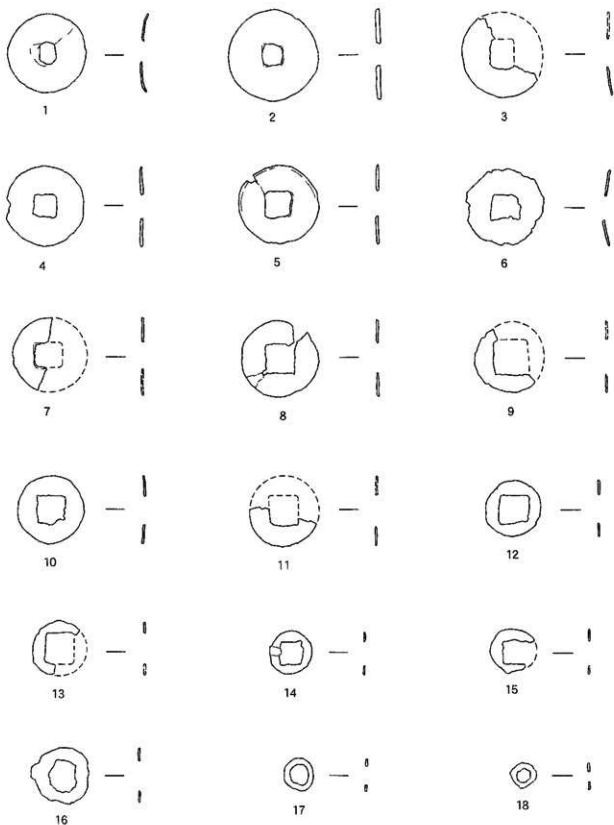
第18表 銭貨観察一覧(2)

() 内は推定法量

押印番号 図版番号	銭貨名	法量 (cm・g)				残存 率	分類	状態・特徴	出土地点	計測 番号
		外径	孔径	厚さ	重量					
第40図 10 図版32の10	無文銭	1.76	0.74	0.08	0.60	完形	I-3-b	表面は緑の錆び、質は硬く しっぺりしている。孔にバリ が残る。	せー13 Ⅱ層	47
＃ 11 ＃ 11	無文銭	—	0.75	0.07	0.40	1/2	I-3-b	質は硬くしっぺりしている。	さー12 Ⅱ層焼土	46
	無文銭	—	—	0.08	0.30	1/4	I-3-b	やや腐食している。推定され る外径や孔径は計測番号47、 46と類似すると考えられる。	こー11 Ⅲ層焼土	50
＃ 12 ＃ 12	無文銭	1.49	0.77	0.10	0.40	完形	I-4-c	表面は緑の錆び、腐食してい る。	さー11 Ⅰ層	48
＃ 13 ＃ 13	無文銭	1.50	0.80	0.08	0.20	2/3	I-4-c	表面は緑の錆び、腐食してい る。変形している。	さー13 Ⅱ層	55
	無文銭	—	—	0.07	0.10	1/5	I-4-c	腐食が激しく、表面は青白い錆 びで覆われている。推定され る外径や孔径は計測番号48、 55と類似する。	こー12 Ⅲ層炭泥	52
＃ 14 ＃ 14	無文銭	1.12	0.65	0.05	0.10	完形	I-5-c	表面は緑錆び、面に突起状のセ キ跡が見られる。とても薄い。	こー14 Ⅲ層	49
＃ 15 ＃ 15	無文銭	(1.2)	0.65	0.05	0.20	3/4	I-5-c	腐食しており、残存部分の緑も 一部欠けている。	こー12 Ⅱa層砂 利ド	54
	無文銭	1.15	(0.7)	0.05	0.10	1/2	I-5-c	表面は白緑錆び、外径に対する 孔径がとても大きい。	こー14 Ⅲ層	53
＃ 16 ＃ 16	無文銭	1.46	0.85 0.74	0.07	0.30	完形	Ⅱ	表面は緑の錆び、セキ跡が側面 に残る。孔径の幅は縦が広い。	さー12 Ⅱ層焼土	56
＃ 17 ＃ 17	無文銭	0.85	0.47	0.10	0.10	完形	Ⅲ	表面は緑錆び、背は平らで表面 は丸味があり、断面はかまぼこ 状である。	こー14 Ⅲ層	60
	無文銭	—	—	0.07	—	1/3	Ⅲ	表面は緑錆び、推定される外径 や孔径は計測番号60と類似す る。	こー14 Ⅲ層	75
＃ 18 ＃ 18	無文銭	0.68	0.35	0.09	—	完形	Ⅲ	表面は緑錆び、背は平らで表面 は丸味がある。セキからカット された平らな断面が見られ る。	そー11 Ⅱa層	61



第39圖 (図版31) 銭貨 (1~14)



第40圖 (圖版32) 錢貨：無文錢 (1~18)

14. 瓦

第19・20表に示したとおり、軒瓦が破片で266点の出土を見た。他の遺物同様にその多くは、小破片で得られた。確認された種類としては、軒瓦・丸瓦・平瓦等であった。色調は灰色系・赤褐色系が見られたが、殆どが赤褐色系であった。以下、軒丸瓦より略述する。分類は上原氏の分類概念を用いた。個々の資料の観察は第21・22表に示した。

軒丸瓦 (第41図)

第19表に示したとおり、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅸ文様系が確認された。その殆どが赤褐色系の第ⅨB文様系のもので、前2者は希少である。

第Ⅰ文様系は1・2に示したもので、2点とも灰色系である。1の瓦当面は2次焼成を受け、摩耗が著しい。第Ⅲ文様系は3～6に示したもので、灰褐色と赤褐色が見られた。瓦当裏は縦位のナデ調整が顕著の観察される。5は2次焼成品で、瓦当面の剥落が著しい。

第Ⅸ文様系は7～10に示した。いずれも、赤褐色系で焼成が良好なものである。瓦当裏の調整で7・8は指痕が残るが、9・10は丁寧である。

軒平瓦 (第42図)

第20表に示したとおり、第Ⅰ～Ⅲ文様系が確認された。その殆どが赤褐色系の第ⅢB文様系のもので、前2者は希少であった。

第Ⅰ文様系は1に示したもので、灰色を呈する。成形は丁寧で瓦当の文様も明瞭である。2～10に示したものは全て第Ⅲ文様系に属するものである。赤褐色系である。3は花芯部が凹状に成形され、2の花芯とは異なるものである。瓦当裏の調整は接着面に沿ってヨコナデを施すものが主である。9・10の瓦当厚は上記のものに比べて薄く、瓦当裏も丁寧に調整されている。

註：上原 静「琉球の古瓦」『考古学ジャーナル』第427号 1998年

第19表 軒瓦出土一覧



第Ⅰ文様
(Ⅰ期)



第Ⅲ文様
(Ⅲ期)



第ⅨA文様
(Ⅲ期)



第ⅨB文様
(Ⅲ期)

Ⅰ期：16世紀後半

Ⅲ期：18世紀

瓦当面残	
1/2以上	1/2未満
18	136
154	

個体数
20

色・文様 出土地点	灰 色					灰 褐色					赤 色					合計						
	I	Ⅲ	ⅨA	ⅨB	不明	I	Ⅲ	ⅨA	ⅨB	不明	I	Ⅲ	ⅨA	ⅨB	不明							
Ⅰ層					1					2					3(2)		17(4)	3	26			
Ⅱ層										2					3		5(2)	(1)	47(8)	38	98	
Ⅲ層					1										5		1	2	3(1)	6	18	
溜井																			1		1	
基壇内	Ⅰ層				1																1	
	Ⅱ層			1		1				2											2	6
	Ⅲ層												(1)								1	
試掘 トレンチ	Ⅰ層																				1	1
	Ⅱ層																				2	2
合 計	1					4					2					12					154	
	5					16					133											

個体内訳

色・文様 出土地点	灰 色					灰 褐色					赤 色					合計							
	I	Ⅲ	ⅨA	ⅨB	不明	I	Ⅲ	ⅨA	ⅨB	不明	I	Ⅲ	ⅨA	ⅨB	不明								
Ⅰ層																					5	5	
Ⅱ層																					1	13	14
Ⅲ層																					1		1
合 計																2					20		
																18							
																20							

※1 文様の分類は上原静氏の『琉球の古瓦』（考古学ジャーナル 427.1998）軒瓦の編年表を参考にした。

※2 個体数の集計は花芯の残りが2/3以上あるものを1とした。

※3 ()内は瓦当面残が1/2以上の個数

第20表 軒平瓦出土一覧

			
第Ⅰ文様 (I期)	第Ⅲ文様 (I~II期)	第ⅢA文様 (III期)	第ⅢB文様 (III期)

瓦当面残	
1/2 以上	1/2 未満
23	89
112	

個体数
19

I期: 16世紀後半 II期: 17世紀 III期: 18世紀

色・文様 出土地点	灰 色					灰 褐 色					赤 色					合計	
	I	Ⅲ	ⅢA	ⅢB	不明	I	Ⅲ	ⅢA	ⅢB	不明	I	Ⅲ	ⅢA	ⅢB	不明		
I層		4(3)		2	1		1								11(2)	3	22
II層		6(4)		6	1	1	2(2)	1							42(9)	8	67
III層		1					3(1)								11(4)	1	16
IV層															1		1
基壇内 II層															2(1)		2
石敷 II層															1		1
試掘 トレンチ	I層															1	1
	II層						1								1		2
合 計	11					8					2					112	
	21					9					82						

個体内訳

色・文様 出土地点	灰 色					灰 褐 色					赤 色					合計
	I	Ⅲ	ⅢA	ⅢB	不明	I	Ⅲ	ⅢA	ⅢB	不明	I	Ⅲ	ⅢA	ⅢB	不明	
I層		2					1								1	4
II層				1			1								6	8
III層							2								2	4
基壇内 II層															1	1
石敷 II層															1	1
試掘トレンチ II層															1	1
合 計	2					4					12					19
	3					4					12					

※1 文様の分類は上原静氏の『琉球の古瓦』（考古学ジャーナル 427, 1998）軒瓦の編年表を参考にした。

※2 個体数の集計は花芯の残りが2/3以上あるものを1とした。

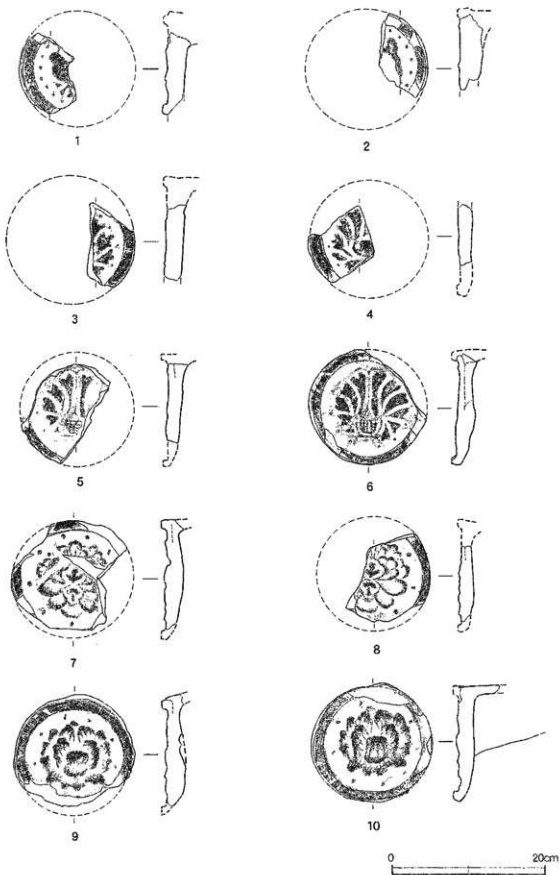
※3 ()内は瓦当面残が1/2以上の個数

第21表 軒丸瓦観察一覧

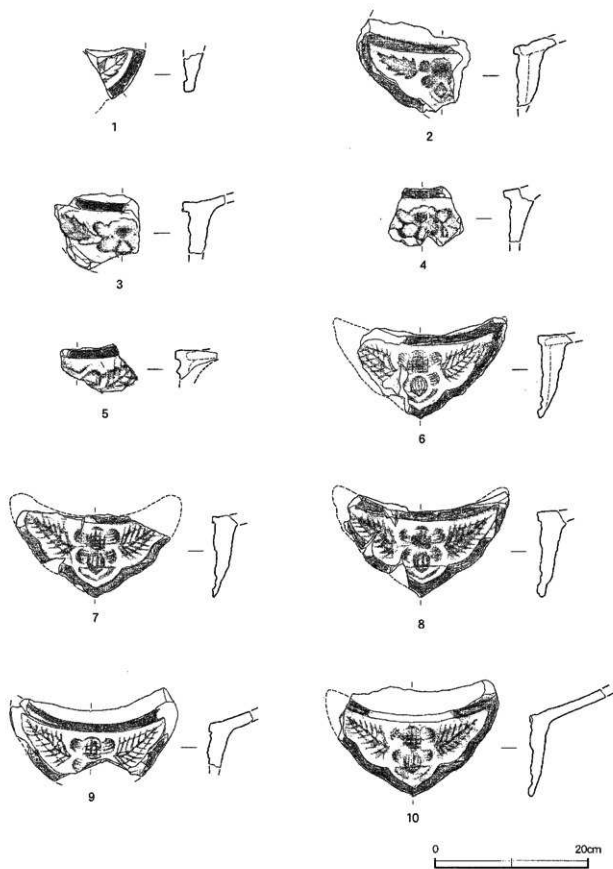
押図番号 図版番号	名称	上原 分類	外 径 内 径 瓦 当 厚 (cm)	素地	文様・特徴等	色調 焼成	出土地点
第41図 1 図版33の1	軒 丸 瓦	I	-- -- --	椀茶色で赤 色粒・茶色 粒・鉱物等が 観察される	花弁が寸詰まり。 珠文は7ヶ。 外面は白釉を施すが、瓦当径が 小さく丸瓦の接着面と段が見ら れる。 2次焼成品。	灰色 低い	た-15 II 最下部一括
" 2 " 2	"	"	-- -- --	"	花弁が1に比して、伸びる。 "	灰褐色	"
" 3 " 3	"	III	-- -- --	"	瓦当と丸瓦の接着面に段が見ら れず、丸瓦が大きい。瓦当厚も 厚い。 瓦当裏は丁寧にナデ調整。	"	"
" 4 " 4	"	"	-- -- --	"	花芯は横線。 瓦当径が小さく丸瓦との接着面 段が見られる。 瓦当裏ナデ・指紋が観察される。	"	け-12 II
" 5 " 5	"	"	-- -- --	"	2次焼成受け、瓦当面の剥落が 著しい。 瓦当裏ナデ調整。	赤褐色 高い	こ-13 II 焼土
" 6 " 6	"	"	-- -- --	"	瓦当面劣化が著しい。瓦当面が 小さく接着面で段を有する。ナ デ調整、漆喰が付着。 瓦当厚、厚い。	" 低い	こ-11 階段部攪乱
" 7 " 7	"	IX A	-- -- --	" 鉱物が顕著	瓦当面、良好。 瓦当裏、指紋が残る。ナデ調整。 漆喰が僅かに見られる。	" 高い	こ-13 III・III a
" 8 " 8	"	"	-- -- --	"	"	"	し-14 II
" 9 " 9	"	IX B	-- -- --	"	瓦当径が小さく、僅かに丸瓦と 段が見られる。花芯部は摩耗。 珠文間に正日痕が観察できる。 瓦当裏は丁寧に調整するが、指 紋痕が残る。	"	す-9 II
" 10 " 10	"	"	-- -- --	"	瓦当径が大きく、丸瓦と段が見 られる。丸瓦と瓦当裏へ漆喰が 付着。 瓦当裏は丁寧に調整。	"	す-8 II

第22表 軒平瓦観察一覧

神図番号 図版番号	名称	上原 分類	外 径 内 瓦 当厚 (cm)	素 地	文様・特徴等	色調 焼成	出土地点
第42図 1 図版34の1	軒平瓦	I	— — —	灰色と灰褐色の サンドウィッチ状 で微粒子。 鉱物粒子が散見。	葉脈が明瞭。 瓦当裏面ヘラによるタテナデ と縁側ヨコナデ。	灰褐色	け-13 II
" 2 " 2	"	III	— — —	"	瓦当面、劣化が著しい。漆喰 の付着が見られる。 瓦当裏はヘラによるヨコナデ 調整。	"	し-8 III
" 3 " 3	"	"	— — —	灰褐色 茶褐色・鉱物粒 子が散見。	瓦当の花芯・葉は凹状に表現。 上記2とは若干異なる。 瓦当裏はヘラによるヨコナデ。	淡赤褐色	た-15 II 最下部一括
" 4 " 4	"	"	— — —	"	" 2次焼成品?瓦当面の剥落が 著しい。	橙褐色	こ-13 II 基壇内III a
" 5 " 5	"	III A	— — —	"	瓦当上端面を僅かに面取り。 瓦当裏はヘラによるヨコナデ。	灰褐色	し-9 II
" 6 " 6	"	III B	— — —	赤褐色 茶褐色・鉱物粒 子が散見。	瓦当面に正目痕が観察される。 瓦当裏はヘラによるヨコナデ と縁側に沿ってナデ調整。 瓦当面は細かい粒子痕が観察 される。	赤褐色	せ-6 III
" 7 " 7	"	"	— — —	"	"	"	こ-12 II
" 8 " 8	"	"	— — —	"	" 漆喰が付着。	橙赤褐色 高い	せ-9 石敷内II a
" 9 " 9	"	"	— — —	"	" 瓦当はやや厚いが、上記6~ 8よりは薄い。ナデ痕は見ら れるが丁寧に成形。	"	こ-14 II
" 10 " 10	"	"	— — —	"	" 瓦当は薄く、ナデ痕等は残さ ず丁寧に成形。	"	さ-13 基壇内II



第41图 (图版33) 軒丸瓦 (1~10)



第42図 (図版34) 軒平瓦 (1~10)

第VI章 まとめ

以上、発掘調査の成果について述べた。調査に至る経緯については、第I章でも述べたように、繁多川・真地・識名地域に設置される公民館・図書館建設工事に伴うものであった。神応寺は、琉球八社の識名宮に併置された著名な寺院である。創建年代については不明であるが、「識名宮」との関連で16世紀後半以降の位置付けが想定されている。また、創建当初は臨済宗であったが、1671年に真言宗に改宗したことも知られている。以来、識名宮を庇護する寺院として発展していく。ところが、1910年「沖縄県諸禄処分法」の発令とともに衰退の一途を辿る。さらに、先の大戦で戦災を灰塵とくす。神応寺の歴史的背景については、田名真之氏の論功等に詳しい。参照頂きたい。ここでは、調査成果をいま一度整理して若干の要点に触れまとめたい。

層序は第I～V層の5枚が確認された。第II・III層が神応寺を物語る層である。第I層は戦後の整地土層でグランドゴルフ等に使用。第II層は戦災で焼失した神応寺の瓦礫などを敷き均した土層で、部分的には焼土（B層）層も含む層である。本層が戦前までの神応寺の遺物を包含する土層で、最も遺物が多く出土した層である。第III層は未攪乱の層で、上位層が活動期・下位が造営期の層と解した。下位の層は琉球石灰岩の小礫を含む黒褐色土層である。小礫群は境内内の平場造成のため意識的に混入された礫片と解した。小礫の一部も本堂が設置された琉球石灰岩の削った礫片とも解した。

遺物は希少であったが、16世紀後半のものであった。IV層は石灰岩の窪みに堆積した層で遺物は殆ど得られなかった。第V層は僅かに確認された層で、地山の赤褐色土を溝状に堆積した茶褐色の土層である。遺物は希少であった。

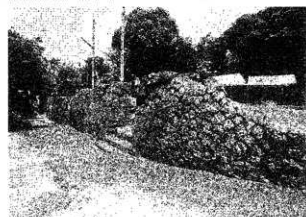
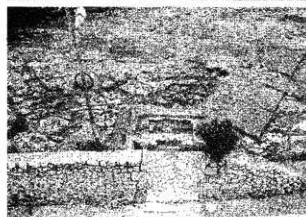
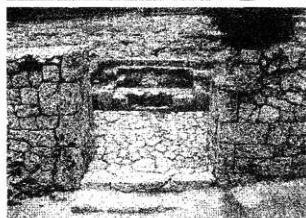
遺構は本堂跡・建物跡・石組遺構・埋喪・土壇等が確認された。これらの遺構は、基盤の琉球石灰岩を削り平場造成後に構築されたものである。本堂跡は保存状態は著しく悪かったが、その中でも僅かに基壇部と思われる石列と縁側に設置されてたと思われる埋喪No.2が検出された。また、階段部においても岩盤を削り石段を構築する方法が確認された。階段部と石垣については保存状態が良好なため一部現地保存を行った。建物跡は戦前の平面図には見られないもので、神応寺の施設に付随すると思われた。溜井と石組遺構・埋喪No.1等が付随している。今後、伽藍配置なども含めて検討を加えたい。出土遺物は仏具関係や建物関係・日常品関係等、多種多様に出土した。仏具関係では、青銅製品の香炉・燭台・花瓶等が見られたが、特に歡喜天・独結桿の出土は注目された。歡喜天は元来インドの神様であるが、仏教に組み込まれ信仰の対象となる。後者は密教法具の一種である。今後、沖縄の宗教史を考える上では、注目される資料かと考える。陶磁器類は16世紀後半～20世紀前半の中国産・本土産・沖縄産のそれぞれ出土が見られた。皿・香炉の出土量の多さには留意され、寺院跡の特徴と思われた。また、漳州窯・肥前系・薩摩系が確認されたことも特筆として挙げられる。さらに、最も多く出土した瓦の殆どが、18世紀代の赤褐色系瓦である。量的には少ないが、16世紀後半からの灰褐色系も見られた。貨銭は17世紀代以降の「無文銭」や「寛永通寶」が主に確認され、前述した出土遺物も含めて神応寺の年代観ともほぼ符合する。

県内では、数少ない寺院跡の発掘調査であるが、他の宗教施設との比較検討することによって神応寺の性格・位置づけ等がより判明するものと考えられる。

《註》

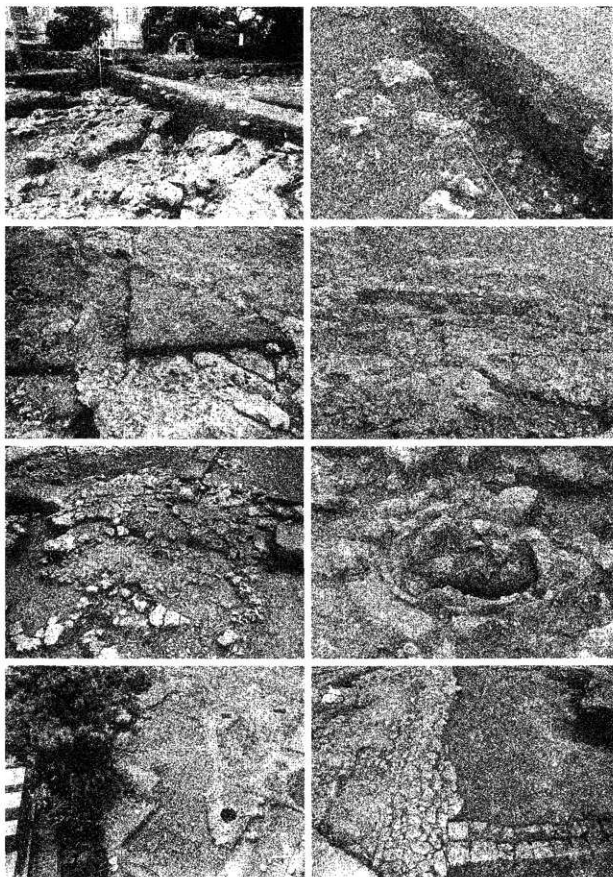
- 註1. 田名真之「神応寺跡」碑の建立と神応寺の歴史『那覇市史だより』第43号 1994年2月15日
『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年 5月30日
- 註2. 田辺 泰『琉球建築』座右宝刊行会 1972年 10月25日
- 註3. 佐和隆研編『密教辞典』法蔵館 1975年 2月21日
- 註4. 上原 静「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推多」『南島考古』14号1994年11月

圖 版



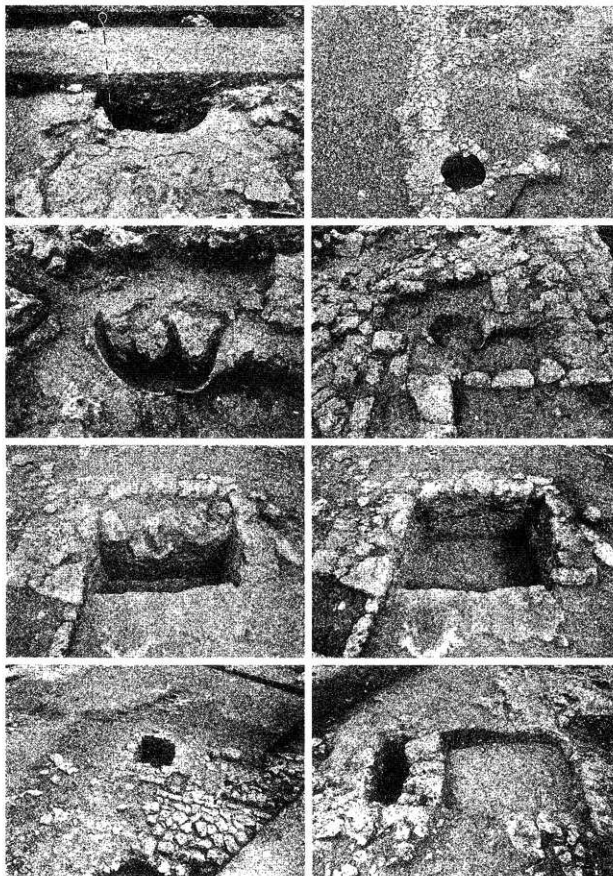
図版1 1段目 左：調査地区全景
2段目 左：正門
3段目 左：正門と調査区
4段目 左：石垣 南東側より

右：南西側より
右：調査区より見た正門
右：石垣 南西側より
右：12ライン全景



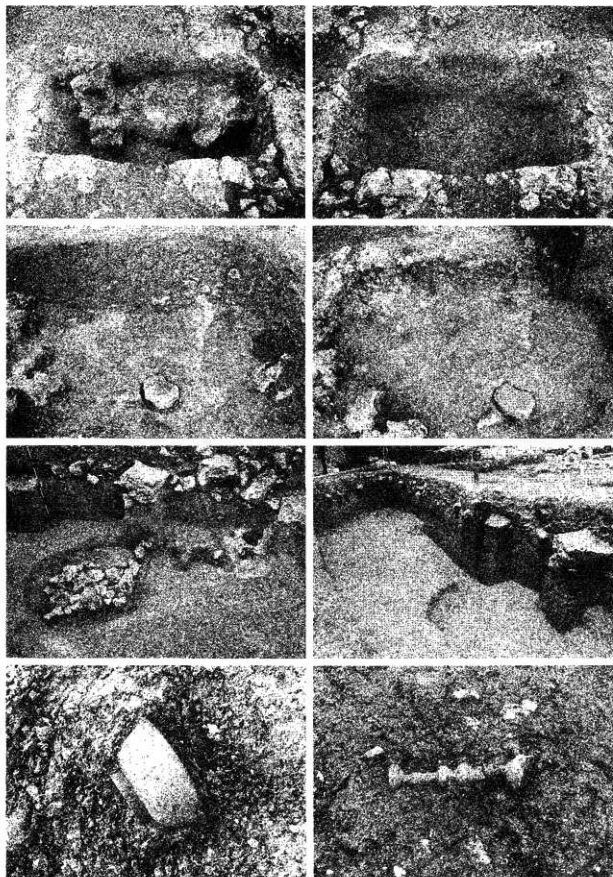
図版2 1段目 左：12ライン近景
 2段目 左：基礎跡
 3段目 左：埋甕№.2出土状況
 4段目 左：建物跡全景

右：「さー12」Ⅲ層の小椋群出土状況
 右：基礎跡の石列
 右：埋甕№.2近景
 右：建物跡の石散



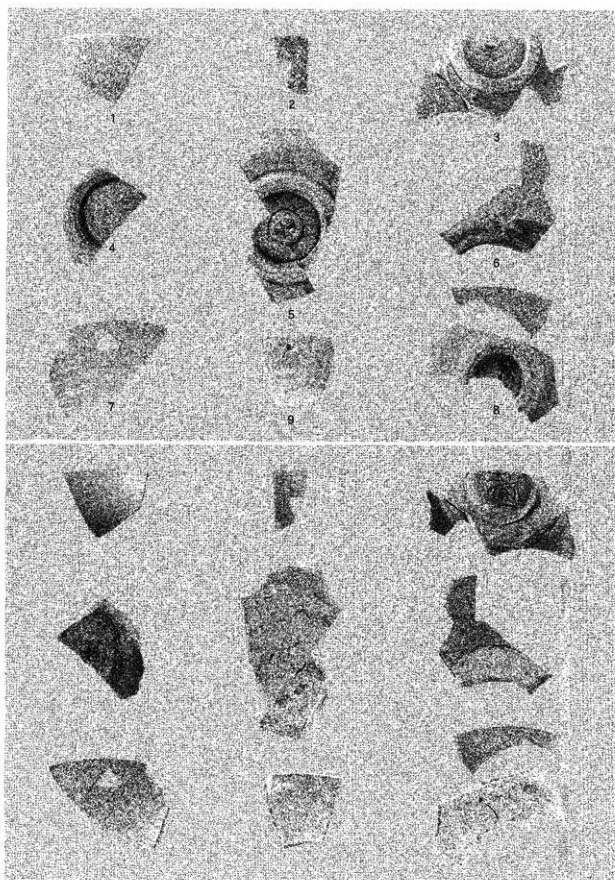
図版3 1段目 左：溜井の半掘状況
 2段目 左：埋塞No.1半掘状況
 3段目 左：1号石組遺構半掘状況
 4段目 左：1号石組遺構遠景

右：溜井の完掘状況
 右：埋塞No.1遠景
 右：1号石組遺構完掘状況
 右：3号石組遺構近景

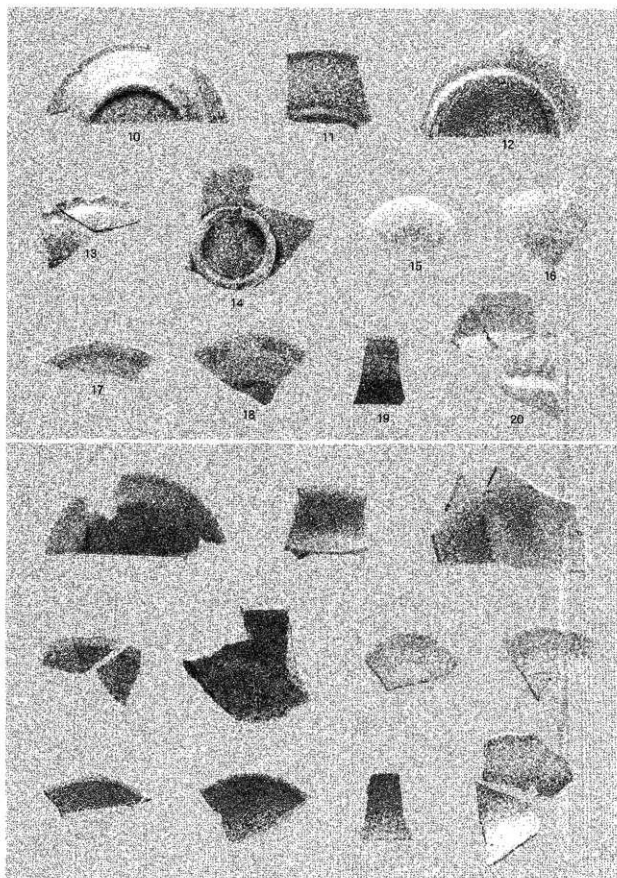


図版4 1段目 左：3号石組遺構半裁状況
 2段目 左：2号石組遺構半裁状況
 3段目 左：土塙の近景
 4段目 左：青銅製碗 出土状況

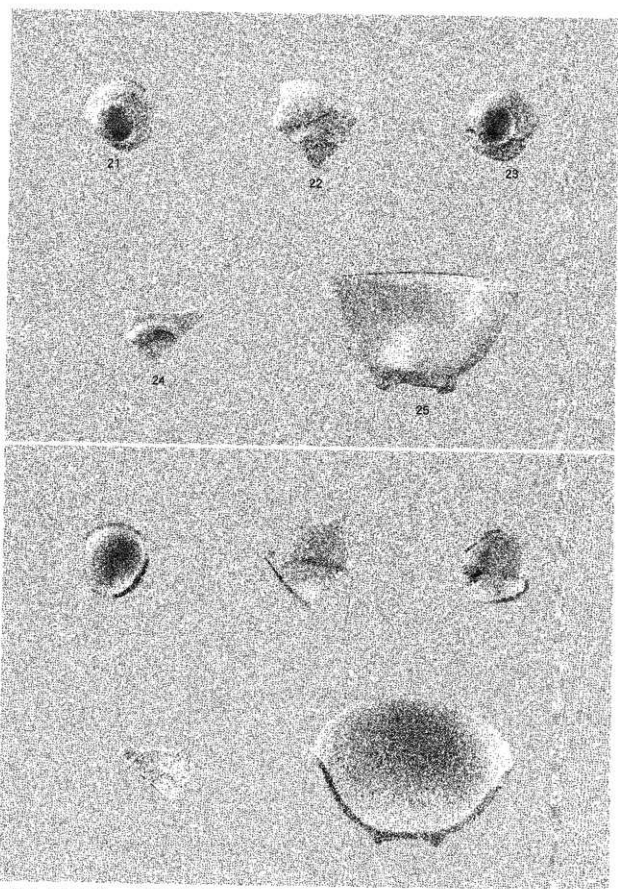
右：3号石組遺構完掘状況
 右：2号石組遺構完掘状況
 右：7ライン北壁と土塙完掘状況
 右：青銅製燭台 出土状況



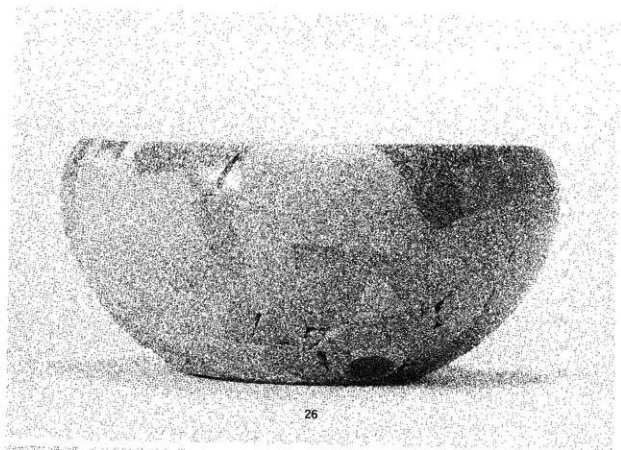
图版5 (第12图) 白磁:碗(1~5)、皿(6~9)



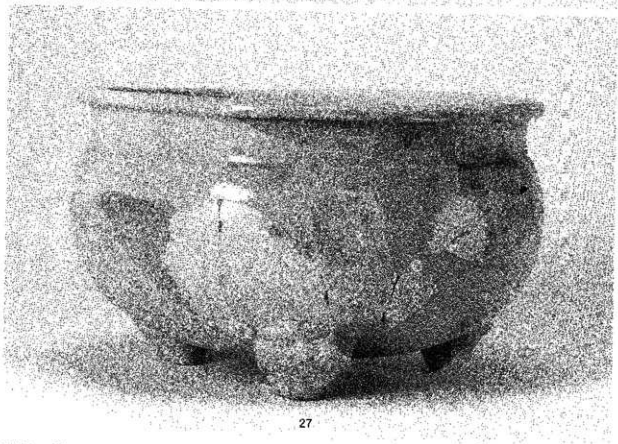
図版6 (第13圖) 白磁：皿 (10～20)



图版7 (第14图) 白磁: 杯 (21~23)、碗 (24·25)

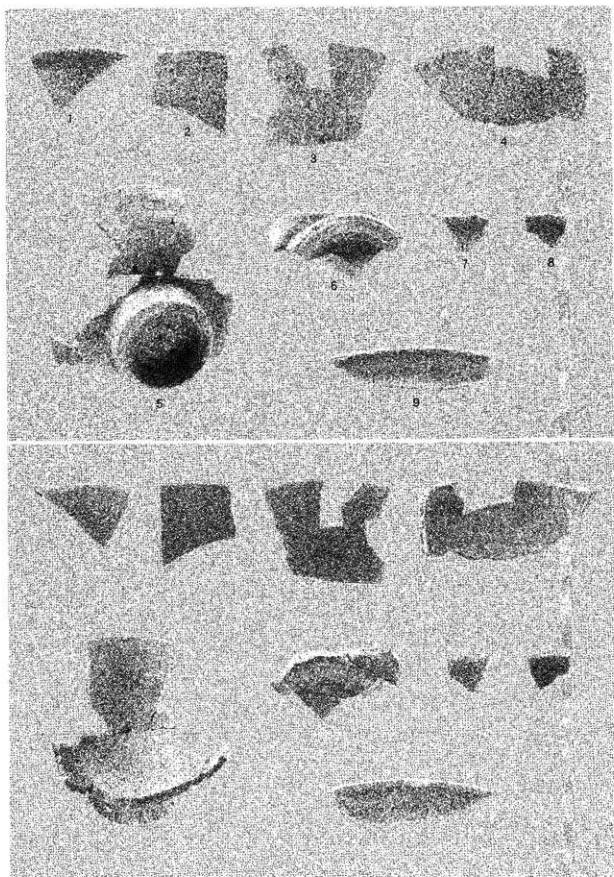


26

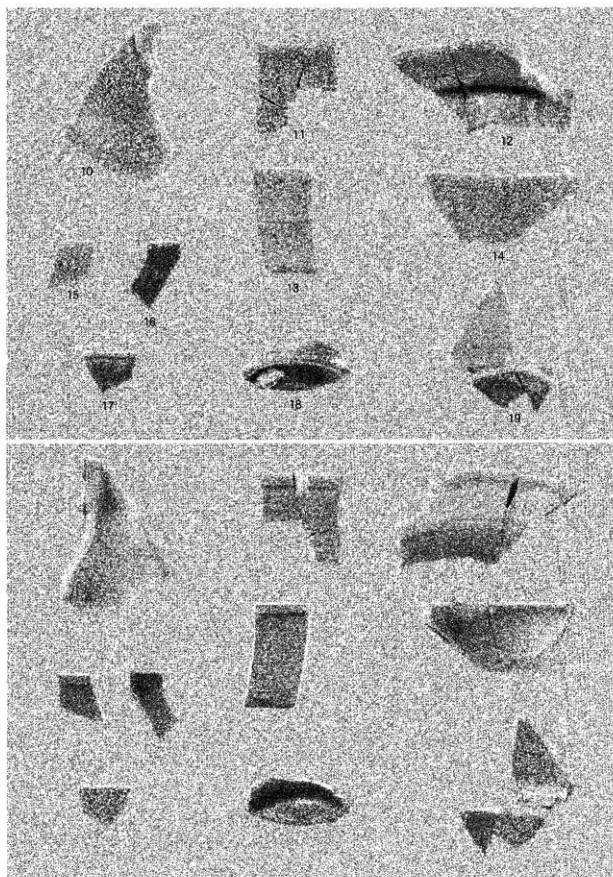


27

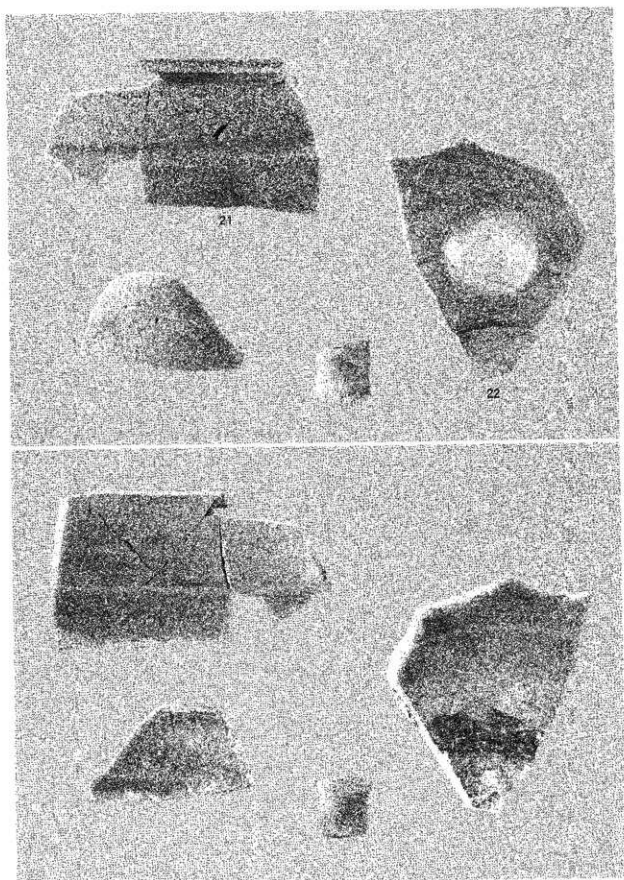
圖版8 (第15圖) 白磁：香炉 (26・27)



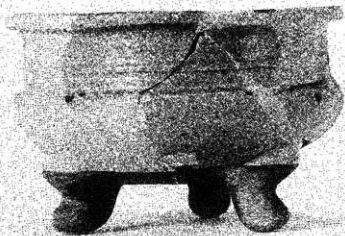
图版9 (第16·17图) 青磁:碗(1~6)、皿(7·8)、盘(9)



图版10 (第17·18图) 青磁: 瓶(10)、鉢(11·12)、香炉(13~19)



圖版11 (第19圖) 青磁：香炉 (21・22)

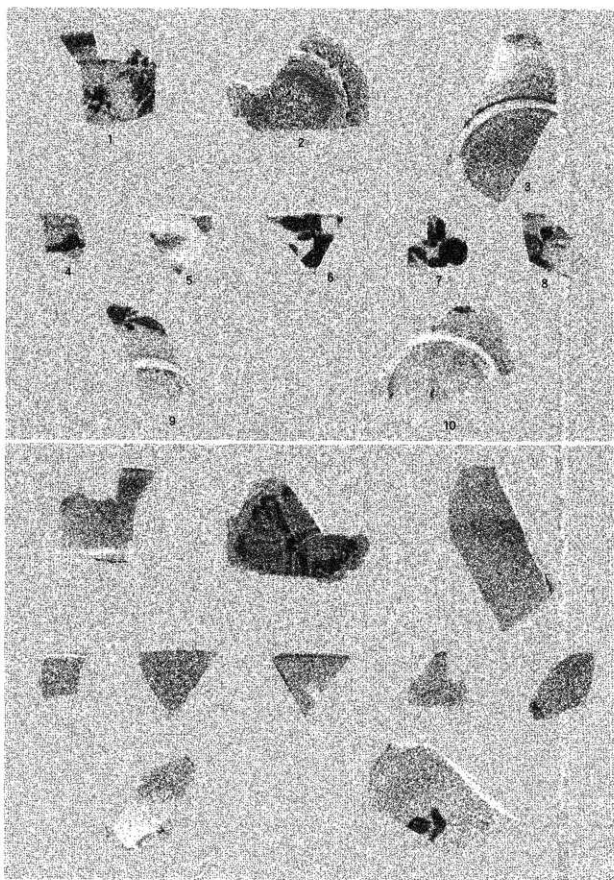


20

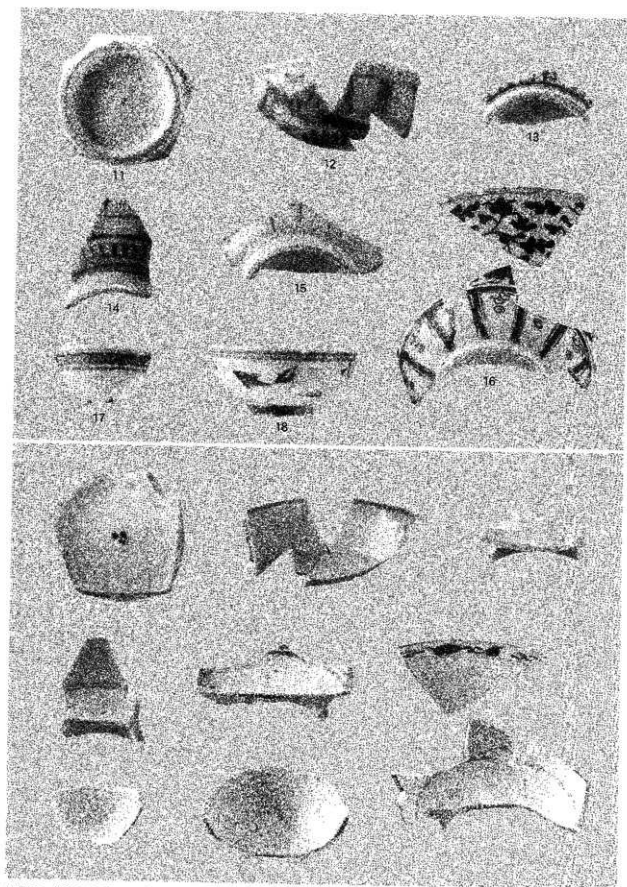


34

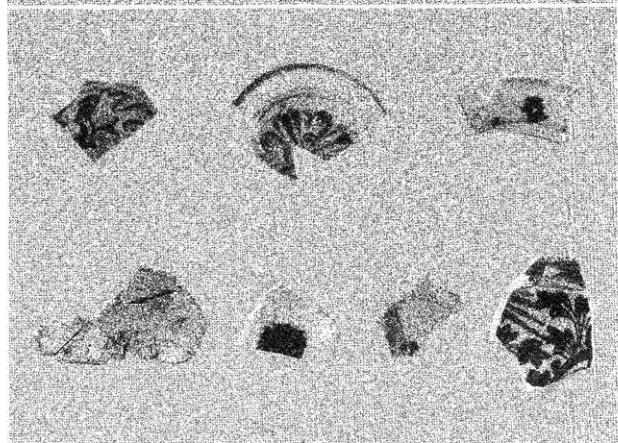
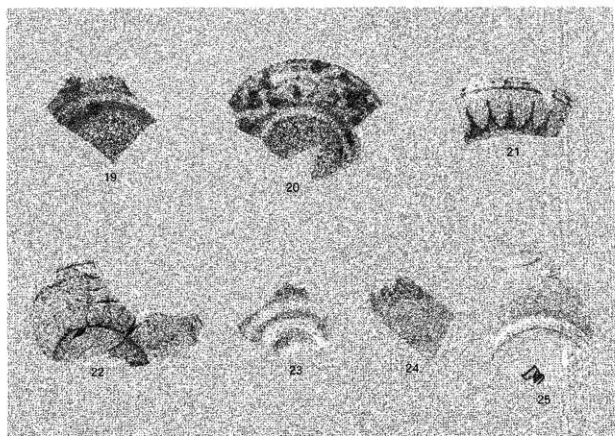
圖版12 (第 18・24 圖) 青磁：香炉 (20) 青花：鉢 (34)



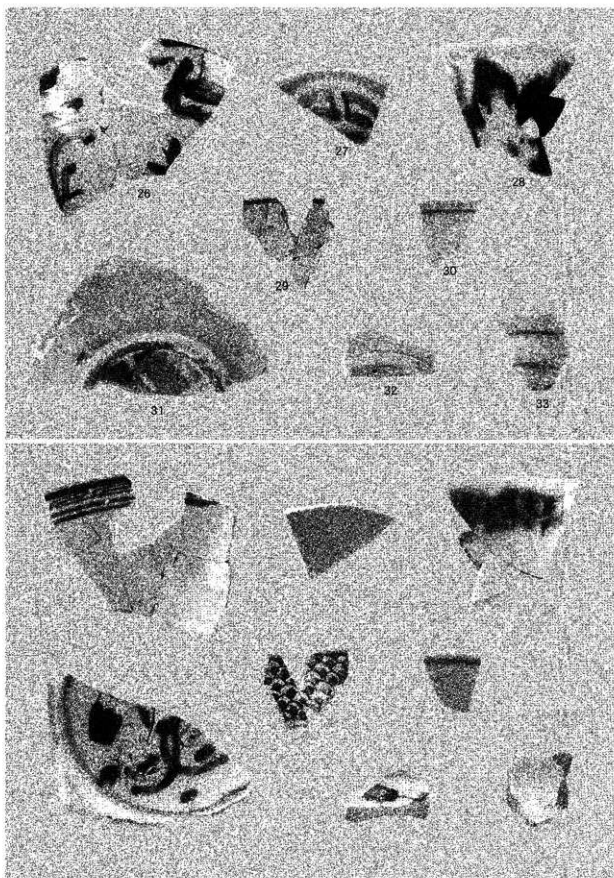
図版13 (第20図) 青花:碗(1~10)



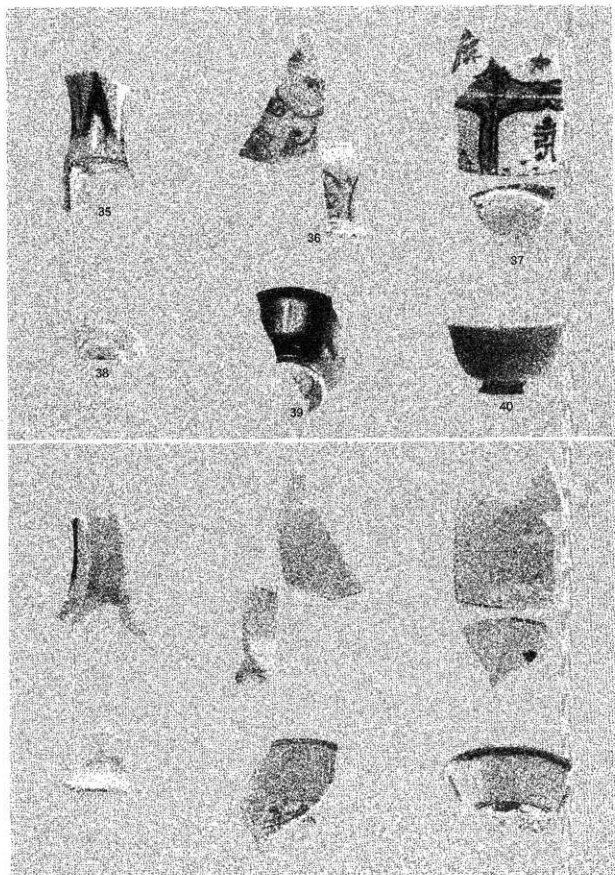
図版14 (第21図) 青花: 碗 (11~18)



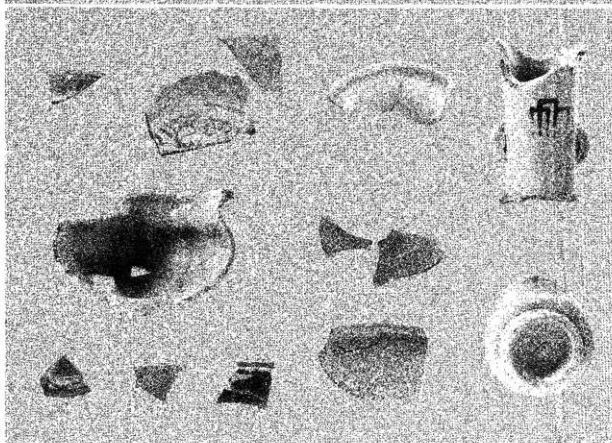
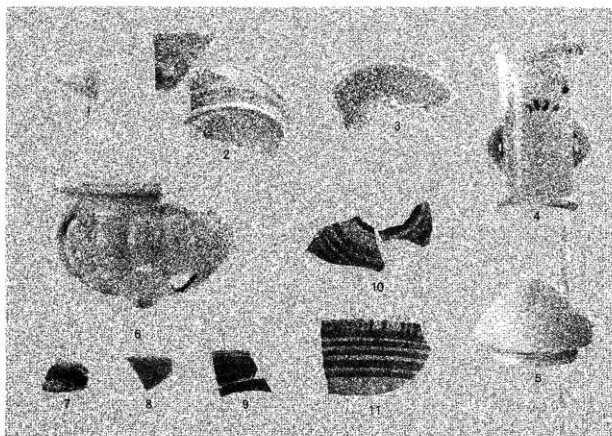
图版15 (第22图) 青花: III (19~25)



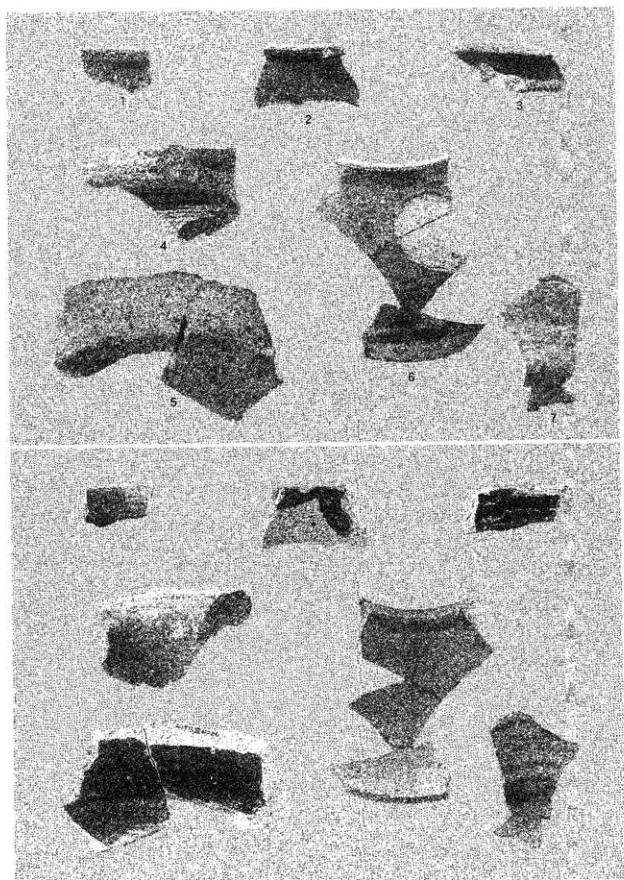
图版16 (第23·24图) 青花: 鉢 (26~33)



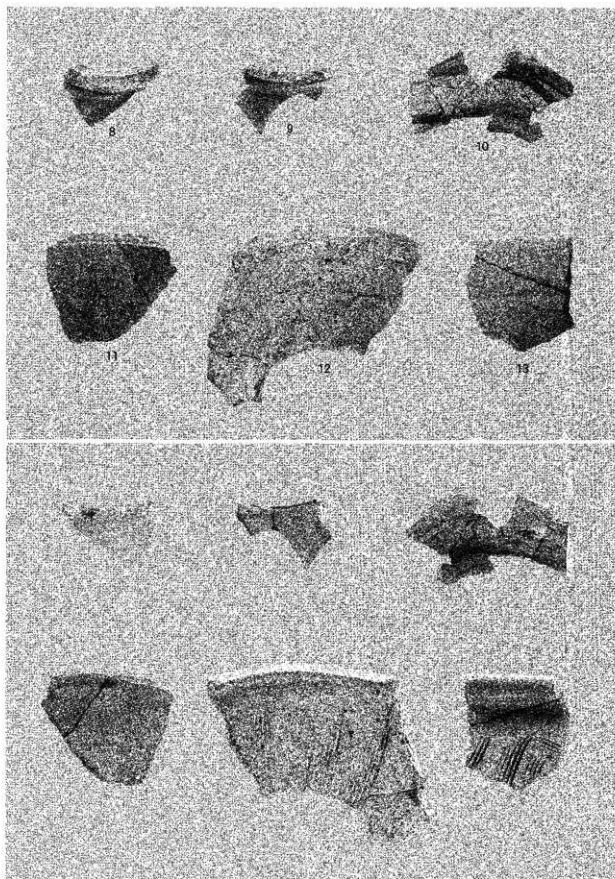
图版17 (第25图) 青花: 瓶 (35~37)、杯 (38~40)



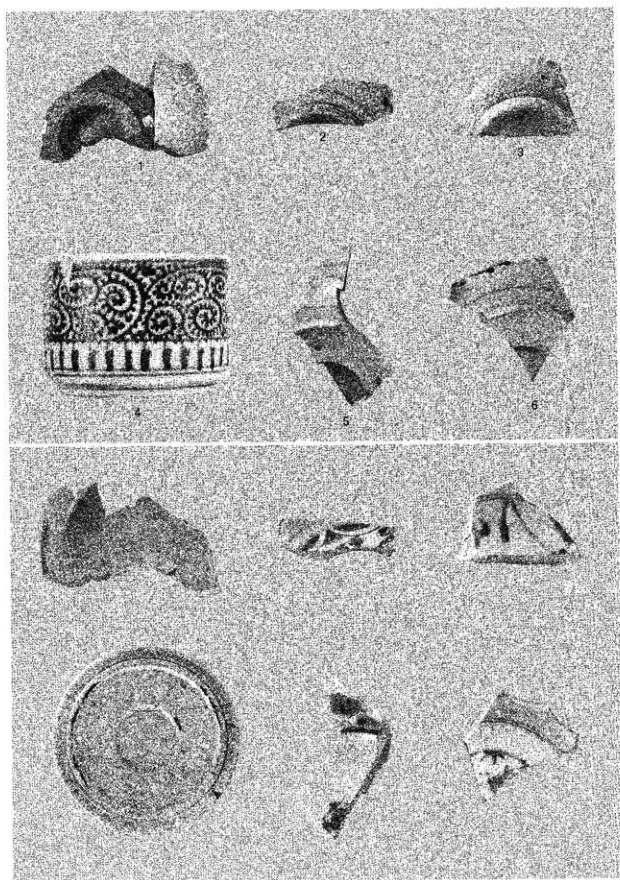
図版18 (第26図) 色絵：皿 (1・2)、花生 (3・4)、碗 (5)、香炉 (6)
 瑠璃釉：蓋 (7)、碗 (8) 翡翠釉：皿 (9)
 タイ産陶器：蓋 (10)、合子 (11)



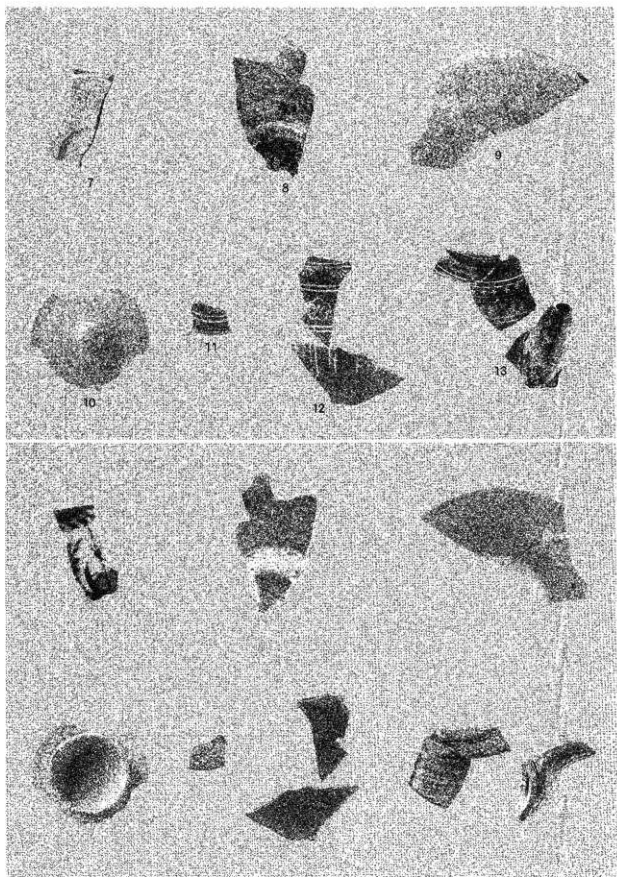
图版 19 (第 27 图) 褐釉陶器：壺 (1~5)、水注 (6·7)



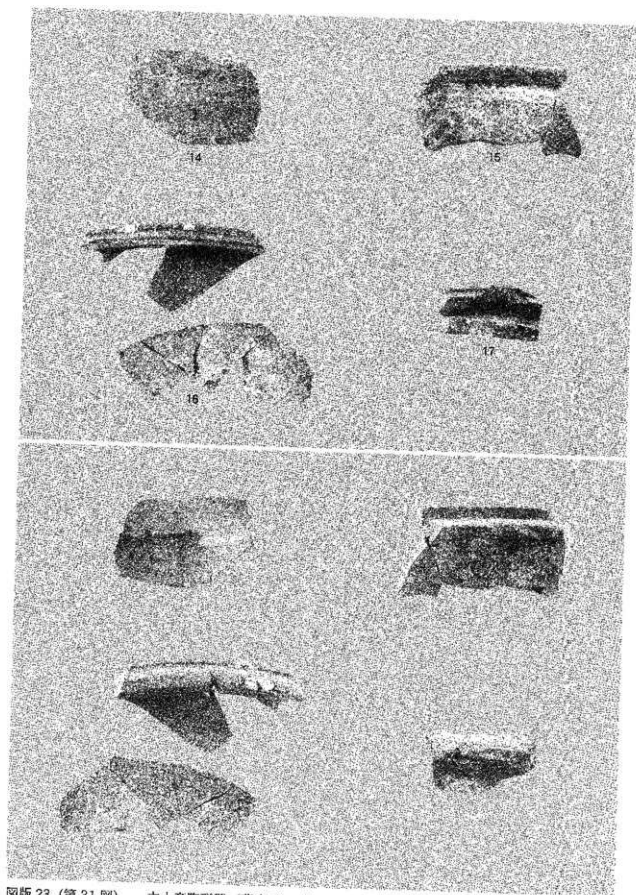
図版 20 (第 28 図) 褐釉陶器：水注 (8～10) 無釉陶器：鉢 (11)、摺鉢 (12・13)



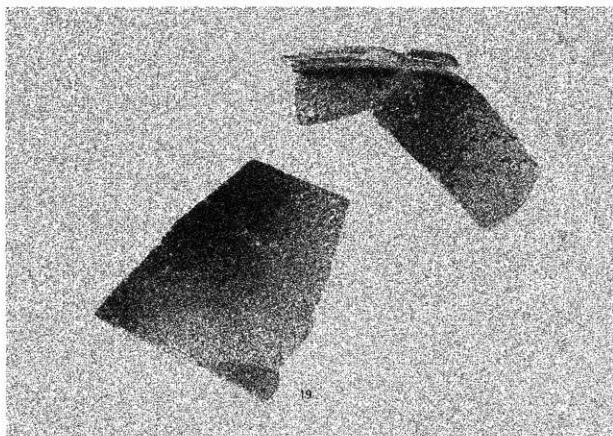
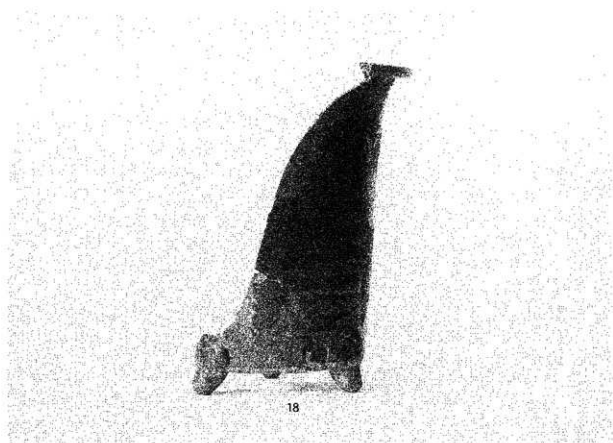
図版 21 (第 29 図) 本土産陶磁器 (肥前系) : 碗 (1~4)、皿 (5・6)



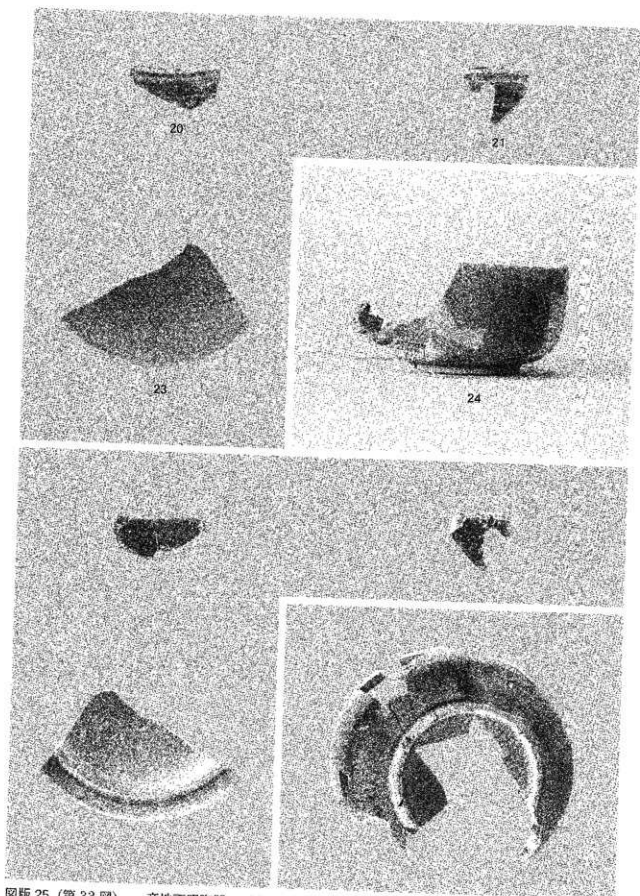
图版 22 (第 30 图) 本土産陶磁器 (肥前系): 皿 (7~9)
(薩摩系): 蓋 (10・11)、水注 (12・13)



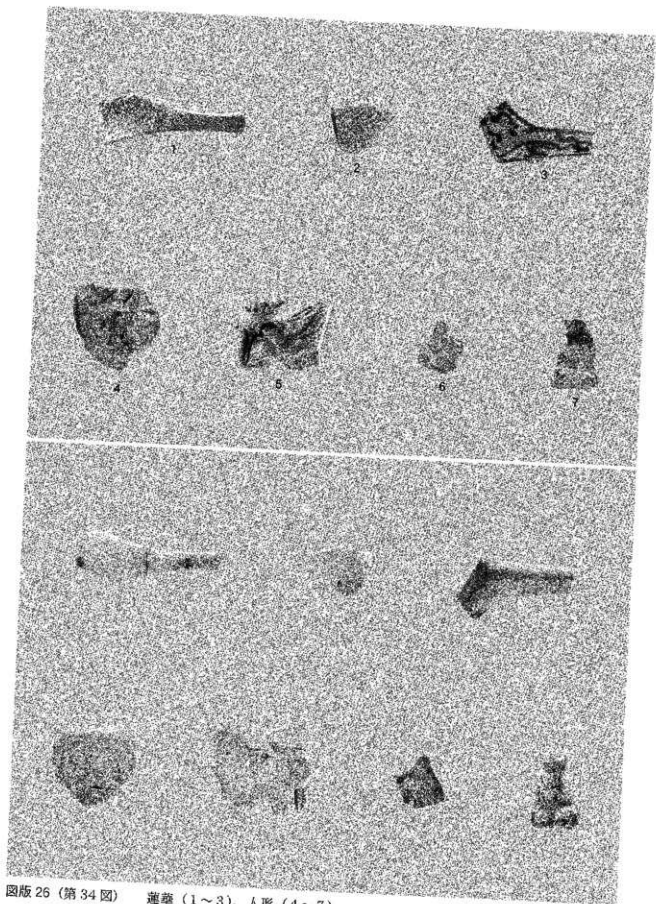
图版 23 (第 31 图) 本土灰陶磁器 (藤厚系) : 盖 (14)、钵 (15)、钵 (16·17)



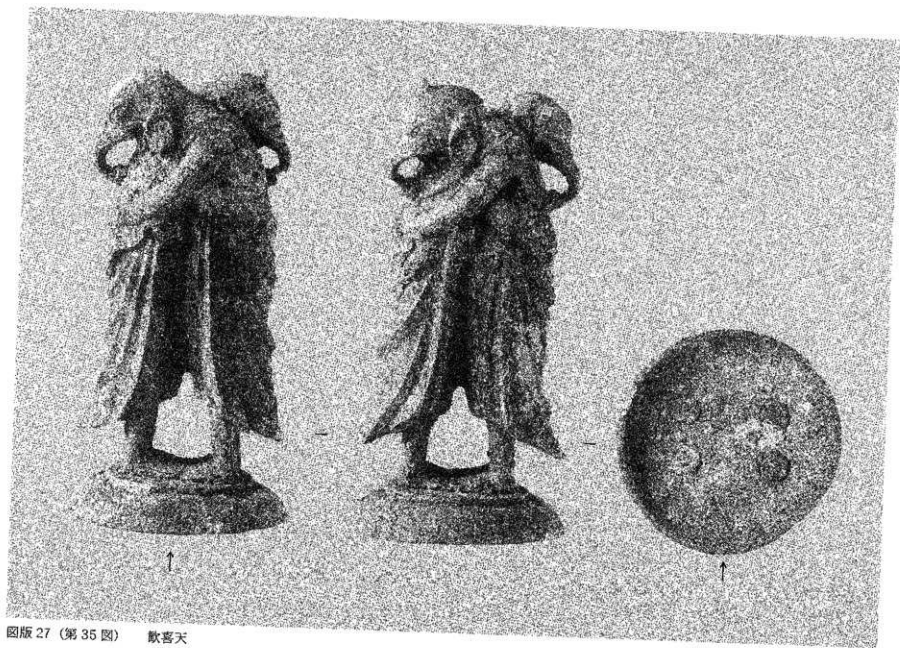
図版 24 (第 32 図) 本土産陶磁器 (薩摩系) : 花針 (18)、針 (19)



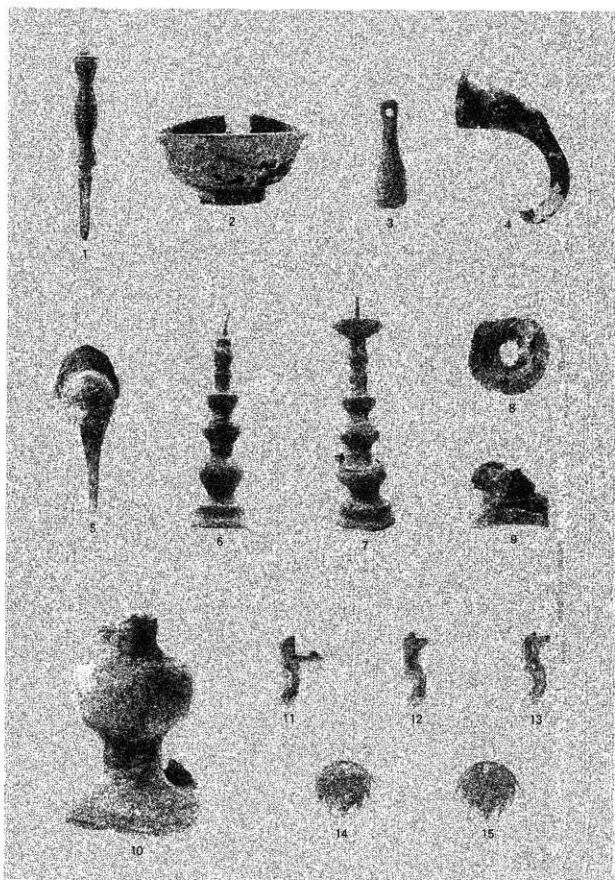
图版 25 (第 33 图) 产地不明陶器：不明 (20·21)、甕 (23)、鉢 (24)



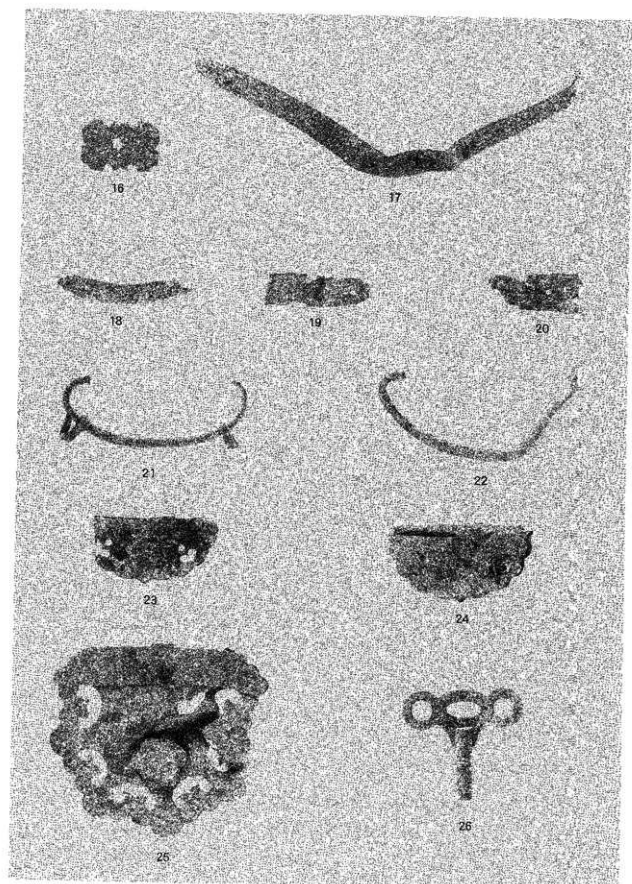
图版 26 (第 34 图) 蓮華 (1~3)、人形 (4~7)



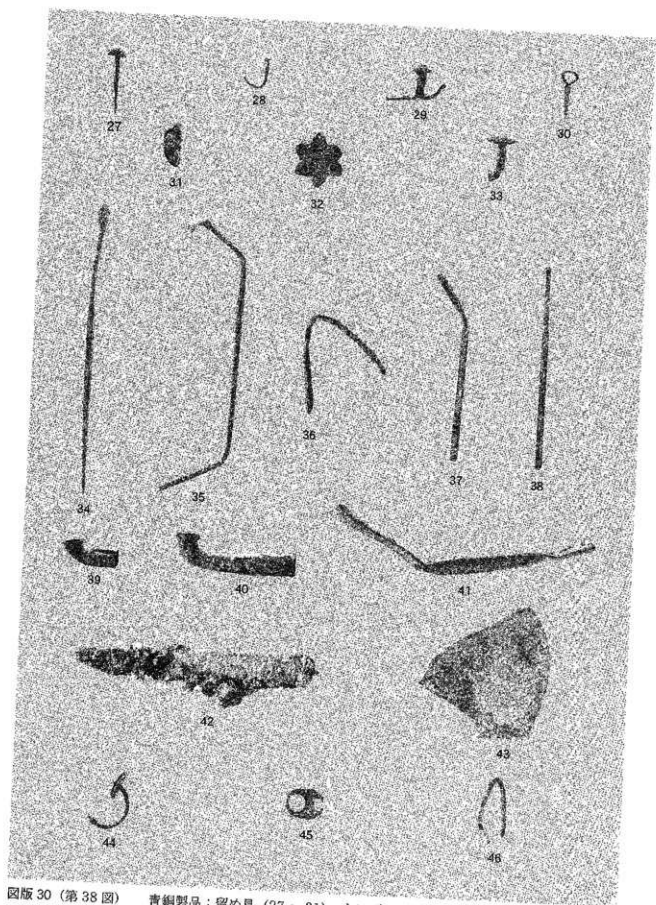
图版 27 (第 35 图) 欢喜天



図版 28 (第 36 図) 青銅製品：独鈷杵(1)、碗(2)、鎌の芯(3)、把手(4・5)、獨台(6～8)、花瓶(9・10)、脚(11～13)、環塔？(14・15)



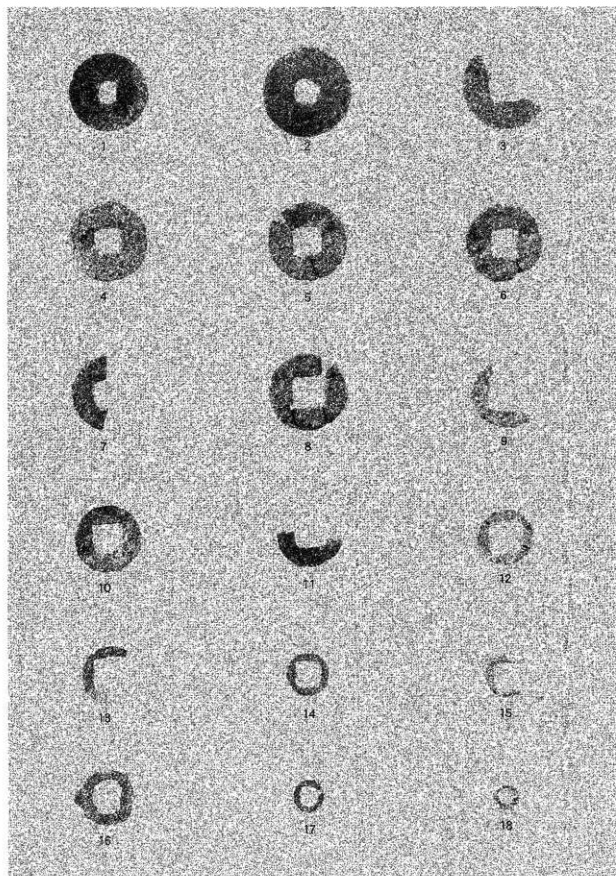
図版 29 (第 37 図) 青銅製品: 飾り金具 (16 ~ 20)、把手 (21・22)、蝶番 (23 ~ 25)、鍵 (26)



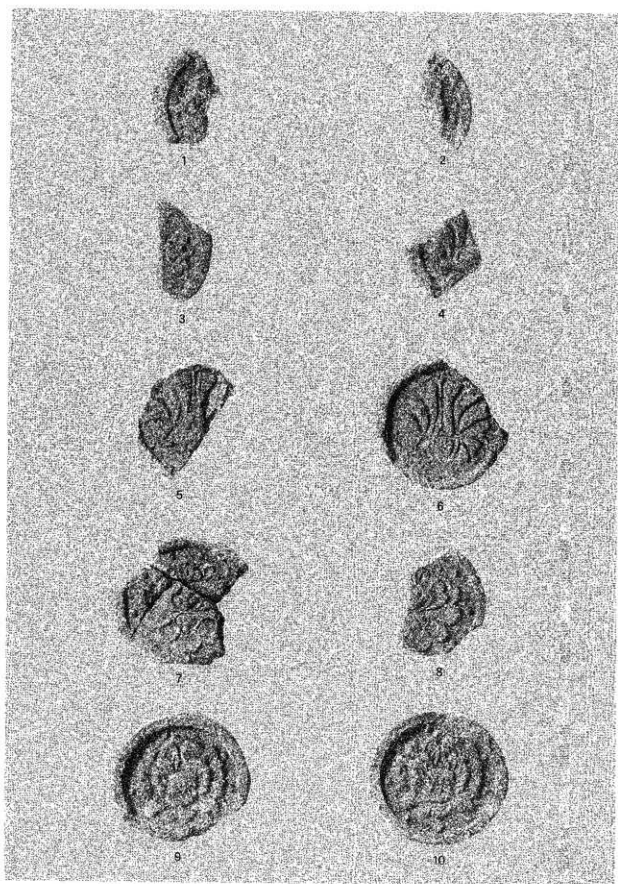
図版 30 (第 38 図) 青銅製品：留め具 (27～31)、カンザシ (32～38)、キセル (39～41)、刀子 (42)、銅鏡 (43)、不明品 (44～46)



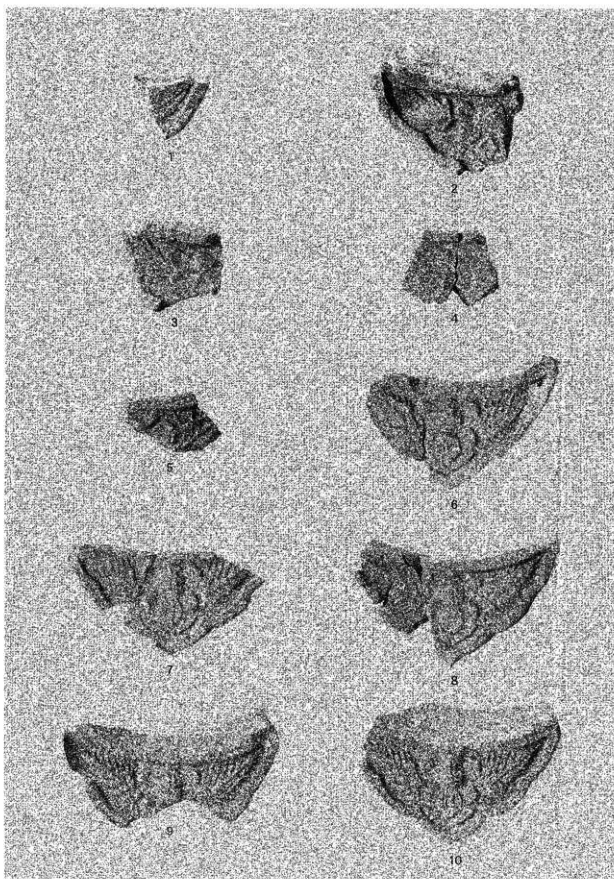
图版 31 (第 39 图) 钱货 (1~14)



図版 32 (第 40 図) 錢貨：無文錢 (1~18)



図版 33 (第 41 図) 軒丸瓦 (1~10)



図版 34 (第 42 図) 軒平瓦 (1~10)

那覇市文化財調査報告書第 69 集

じん おう じ あと
神 応 寺 跡

— 築多川公民館・図書館建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 —

発 行 2006年 2月

那覇市教育委員会

〒900-8553 沖縄県那覇市樋川 2-8-8

編 集 那覇市教育委員会文化課

☎ 098-853-5776

印 刷 文進印刷株式会社

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町 5丁目10-14

☎ 098-994-5777
